１.丹波綾部道路関係遺跡発掘調査報告

はじめに

今回の発掘調査は、丹波綾部道路建設事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。平成22年度は塩谷南古墳群および三ノ宮東城跡、平成23年度は三ノ宮東城跡の調査を実施した。

古墳群は、京丹波町南東側、旧丹波町の丘陵地上に位置する。北側に隣接する丘陵には、京都府指定文化財となっている巫女形埴輪が出土した塩谷古墳群が位置している。周辺には深志野古墳群や宮の浦古墳群がある。このように、塩谷南古墳群周辺は、古墳時代中期から後期にかけて、比較的多くの古墳が集中して築造された地域である。

塩谷南古墳群は、調査の結果、直径15mの円墳１基であることが分かり、木棺直葬の埋葬施設を２基検出した。そのうち埋葬施設１は割竹形木棺で、棺内から鉄鏃１点が出土した。埋葬施設２は組合式箱形木棺で、棺内から鉄剣と刀子状鉄器が出土した。なお、棺の検出面において、須恵器長頸壺の周囲に須恵器有蓋高杯７点を輪状に配した状況で確認した。平成23年１月15日に現地説明会を実施し、53名の参加があった。

一方、三ノ宮東城跡は、京丹波町の西側、旧瑞穂町の山地内の丘陵先端部に位置する。城跡の西側250mの地点には、土佐藩祖山内一豊の祖父久豊に関係するという地元伝承をもつ三ノ宮西城跡がある。三ノ宮東城跡は､室町時代後期の戦国時代の城跡と考えられていた。城跡の麓では、西丹波・摂津方面から福知山を経由して山陰方面へ通じる道、綾部を経由して丹後方面へ通じる道、和知を経由して若狭方面へ通じる道に分岐する。交通の要衝地に位置する城跡である。

三ノ宮東城跡の発掘調査は、平成22～23年度にわたって実施した。平成22年度には、工事用道路予定地である城跡西側の丘陵裾部の調査を行った（Ａ～Ｃ地区）。平成23年度は、城跡のほぼ全域の調査を実施した。事前に樹木伐採、土留設置、空撮図化などを行った。その後、人力により、表土除去や掘削・精査を行った。部分的に重機により表土層の除去も行った。曲輪とされる平坦地では、礎石建物跡や石積土坑、石列などを検出した。また、斜面部では、竪堀や切岸などを検出した。各平坦地（曲輪）を結ぶ道やそれに伴う護岸の石積、排水溝なども検出した。遺物では、中国製の青花磁器や白磁、国産の陶器甕や土師器皿、甲冑金具、刀装具、銭貨などが出土した。平成23年10月16日に現地説明会を実施し、134名の参加があった。

今回の調査では、京都府教育委員会や京丹波町および京丹波町教育委員会、地元三ノ宮、曽根の自治会などにご協力いただいた。現地調査にあたっては、地元有志の方々や各大学の学生諸君の参加があった。また、現地では都出比呂志、上原真人理事をはじめ、菱田哲郎氏、村田修三氏、千田嘉博氏、山上雅弘氏、森島康雄氏、福島克彦氏、中井淳氏、若江茂氏、高橋成計氏、南孝雄

氏、広瀬二郎氏、西森正晃氏、柏田有香氏、大髙大輔氏、永恵裕和氏、笹栗拓氏にご指導・ご教示をいただいた。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、すべて国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が負担した。

（引原茂治）

〔調査体制等〕

塩谷南古墳群群

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

現地調査担当者　調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛

同　専門調査員　黒坪一樹

調　査　場　所　船井郡京丹波町曽根

調　査　期　間　平成22年10月18日～平成23年１月20日

調　査　面　積　800㎡

三ノ宮東城跡

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸・水谷壽克

現地調査担当者　調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛

同　主任調査員　引原茂治

同　専門調査員　黒坪一樹

同　主査調査員　柴　暁彦

同　調査員　高野陽子・加藤雅士・牧田梨津子

調　査　場　所　船井郡京丹波町三ノ宮花ノ木

調　査　期　間　平成23年２月４日～平成23年３月４日

平成23年４月21日～平成23年11月29日

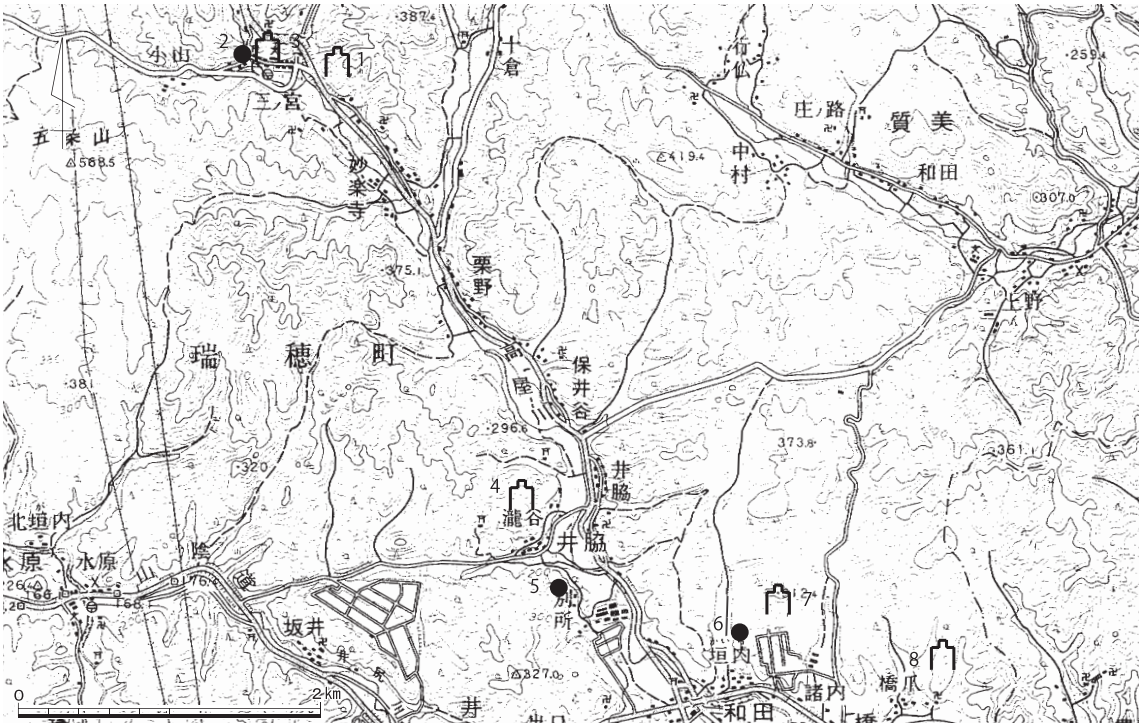
調　査　面　積　6,200㎡（平成22年度 200㎡、平成23年度 6,000㎡）

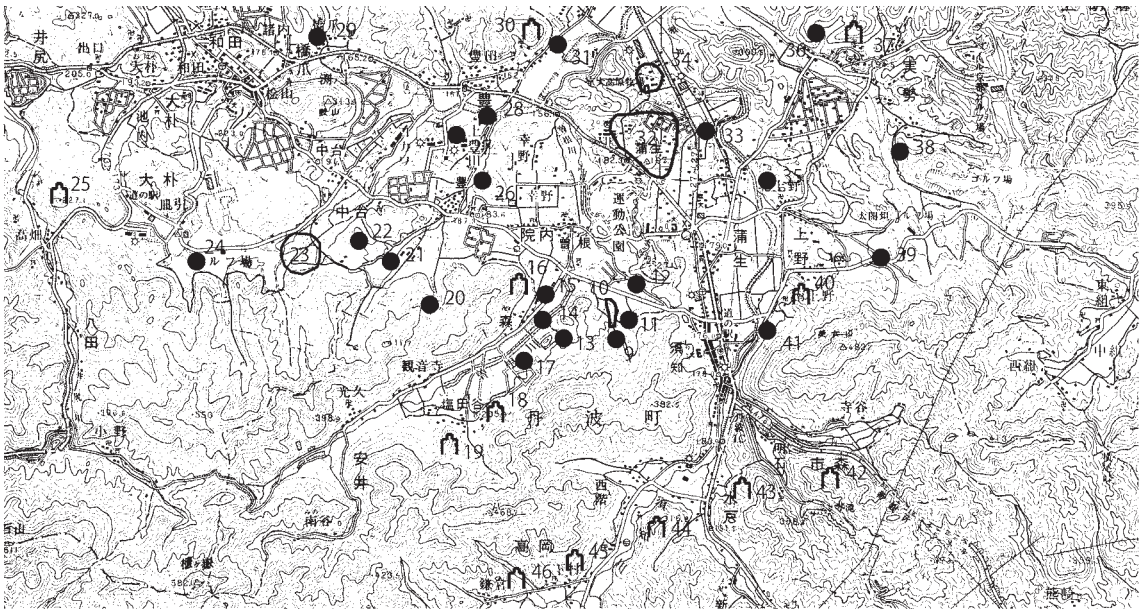
位置と環境

塩谷南古墳群と三ノ宮東城跡が所在する京丹波町は、平成17(2005)年丹波町、瑞穂町、和知町の合併によって誕生した。京都府のほぼ中央に位置し、兵庫県篠山市に隣接している。また、丹波高原の由良川水系上流部に位置し、旧丹波町の南側園部町との境界ともなっている山塊は、淀川水系と由良川水系の分水嶺となっている。

京丹波町内には『京都府遺跡地図』によると、現在140件の埋蔵文化財の登録がある。旧石器時代のナイフ形石器が蒲生遺跡で出土している。縄文時代では草創期の尖頭器が塩谷古墳群の調査で見つかっている。

弥生時代には京大農学部付属牧場付近に位置する美月遺跡(弥生時代中期)が昭和55(1980)年に調査され、京都府立須知高等学校周辺の蒲生遺跡では、昭和58(1983)年から４次にわたり発掘調査された。竪穴式住居跡をはじめとする弥生時代の遺構・遺物が検出されている。





1．三ノ宮東城跡
2．三ノ宮校裏山横穴
3．三ノ宮西城跡
4．井脇城跡
5．丁谷古墓
6．谷（穴武士）古墳
7．垣内城
8．橋爪城跡
9．塩谷南古墳群
10. 塩谷古墳群
11. 深志野古墳群
12. 宮の浦古墳群
13. 山田古墳群
14. 森遺跡
15. 森狐塚古墳
16. 曽根城跡
17. 塩田谷遺跡
18. 塩田北城跡
19. 塩田城跡
20. 院内窯跡
21. 中台（天ヶ棚）窯跡
22. 中台（桜池）窯跡
23. 中島古墳・中台遺跡
24. 皿引野古墳
25. 八田城跡
26. 豊田シミ窯跡
27. 鳥居野古墳（ドバ塚）
28. 千原古墳
29. 和田狐塚古墳
30. 豊田城跡
31. 豊田車塚古墳
32. 蒲生窯跡・蒲生遺跡
33. 蒲生野古墳群
34. 美月遺跡
35. 森ノ奥古墳群
36. 実勢古墳群
37. 実勢城跡
38. 実勢南古墳
39. 浜付場古墳群
40. 上野（須知）城跡
41. 須知遺跡
42. 須知城跡
43. 水戸・殿谷城跡
44. 水戸
（水戸稲荷山）城跡
45. 高岡下村城跡
46. 中畑城跡

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図（国土地理院1/50,000　上－綾部　下－園部）

古墳時代では、旧丹波町で最も多くの古墳が分布する。豊田車塚古墳やカナヤ１号墳は、前方後円墳とされている。カナヤ古墳群、蒲生野古墳群、森ノ奥古墳群、塩谷古墳群など多くは円墳である。森ノ奥古墳群では、２号墳から古墳時代後期の須恵器が出土している。塩谷古墳群はすでに発掘調査が行われ、そのいくつかが整備されている。旧瑞穂町には古墳は少ないが、町内唯一の横穴、三ノ宮校裏山横穴がある。

古代の遺跡としては須恵器窯跡がある。崖面に多くの須恵器が散布している蒲生野窯跡は、飛鳥時代の遺跡である。崖面に灰原が露出している豊田シミ窯跡、中台(天ヶ棚・桜池)窯跡群、院内窯跡などの奈良時代の窯跡もある。

中世になると、京丹波町においても小規模ながら多くの山城が築城された。旧丹波町域には、豊田城跡、須知城跡、上野(須知)城跡、中畑城跡、実勢城跡、富田(愛宕山)城跡、水戸・殿谷城跡、水戸(水戸稲荷山)城跡、高岡下村城跡、高岡中村城跡、曽根城跡、塩田城跡、塩田北城跡、宇津木城跡がある。なかでも城主が須知氏とかかわる須知城は、守護の細川氏を大いに苦しめた、延徳元(1487)年におこった延徳の国一揆に登場する。『北野社家日記』によると、延徳元年の末に守護方は一揆方の須知城を破ったが、翌年には一揆方の手に戻り、激しい戦闘は続いた。

旧瑞穂町域では、三ノ宮東城跡、八幡(水呑)城跡、垣内城跡などがある。このほかに城主の明らかな城もある。橋爪城は山内貞通～久豊・盛豊、三ノ宮西城は山内久豊、八田城は上原久左衛門、鎌谷城・鎌谷南城は細見河内守、井尻城は谷垣兵部が城主であったとされる。丹波綾部道路建設に伴い、平成21・22年度に発掘調査を実施した井脇城跡は、標高およそ300mを測る最高所に中心施設がある。複数の曲輪や尾根を断ち切る堀切などが設けられており、地元では「瀧谷の城」ともいわれている。城主は明らかではないが、山内氏との関係が指摘されている。

旧和知町域には、出野甚九郎が城主であったとされる出野城跡や市場城跡がある。また、『京都府遺跡地図』に上粟野塚、下粟野塚、広瀬塚なども登録されている。

丹波は、京都の北西の入り口であるために要衝とされてきた。中世にはその位置から、旧丹波町から旧瑞穂町にかけて所在した山内荘が置かれていた。守護も南北朝・室町時代を通して重臣が務めたことからも丹波の重要性がうかがえる。丹波においても中央の騒乱の影響を受けて複雑な動きを見せ、須知城や佐々尾においても合戦が起こっている。そして天正３(1575)年に織田信長から丹波・丹後の平定を命じられた明智光秀が登場する。光秀は、天正４(1576)年に安定的統治のために現亀岡市に亀山城の築城を開始する。このほか、各地の城を改築していることが指摘されている。その一つの須知城では、石積を築いている。こうして丹波は中世から近世へと移っていった。

(牧田梨津子)

（１）塩谷南古墳群

１．墳形・規模

塩谷南古墳群は、定高性の山々に囲まれた高原地形のなかにある。周辺は曽根川をはじめとする河川により形成された谷と尾根が入り組む。そうした地勢のなか、南東の山稜から北西の平野部近くまで張り出した尾根上に当初は塩谷古墳群と同じく複数の古墳の存在を想定していたが、１基確認した。北側の塩谷古墳群(注1)よりもひときわ高い位置に造られている（第２図）。

調査前の観察では、墳丘の一部に崩落が認められた以外、後世の大きな改変もなく、築造当初の状態をよくとどめていると思われた〔図版第１（１）〕。測量の結果、円墳とわかり、直径は南北溝の芯心間で約15m・南北溝の外側で約18m、裾部からの高さ約2.5mを測ることがわかった（第２図）。墳頂部の標高は207mである。

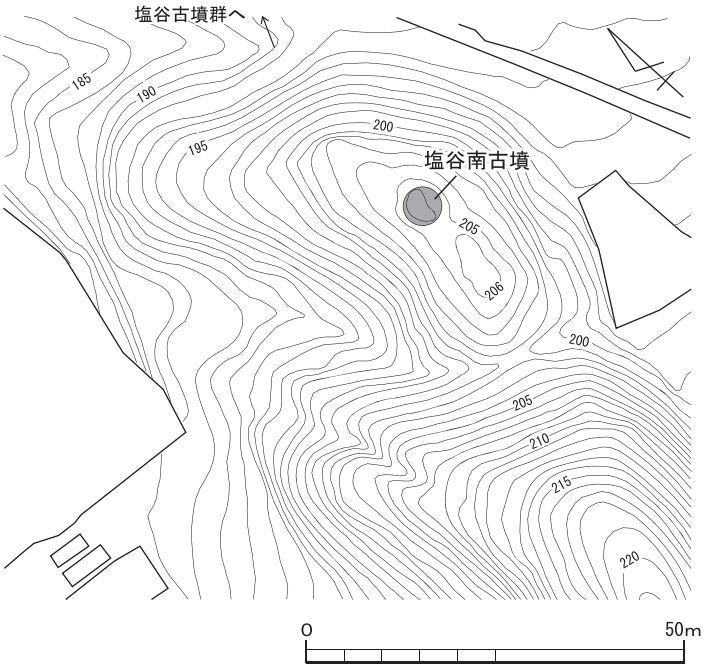
２．墳丘（第３・４図）

墳丘は、もともとの地山面から最大1.3mの高さに土を盛って整形されている。墳丘規模は南北の溝を掘削することにより決定され、墳丘基盤となる地山には、第16層、第14層、第７層、第11層、第10層、第６層などが盛り土されていった。最上層に、灰白色粘質土を多く含む橙色粘質土（第２層）が直径約3.5mの範囲にわたって覆うようにのせられ、墳丘は完成している。この第２層は２基の埋葬施設をともに覆っている。出土遺物については、墳丘南斜面の表層に近い第６層中から須恵器甕の体部片が出土した。

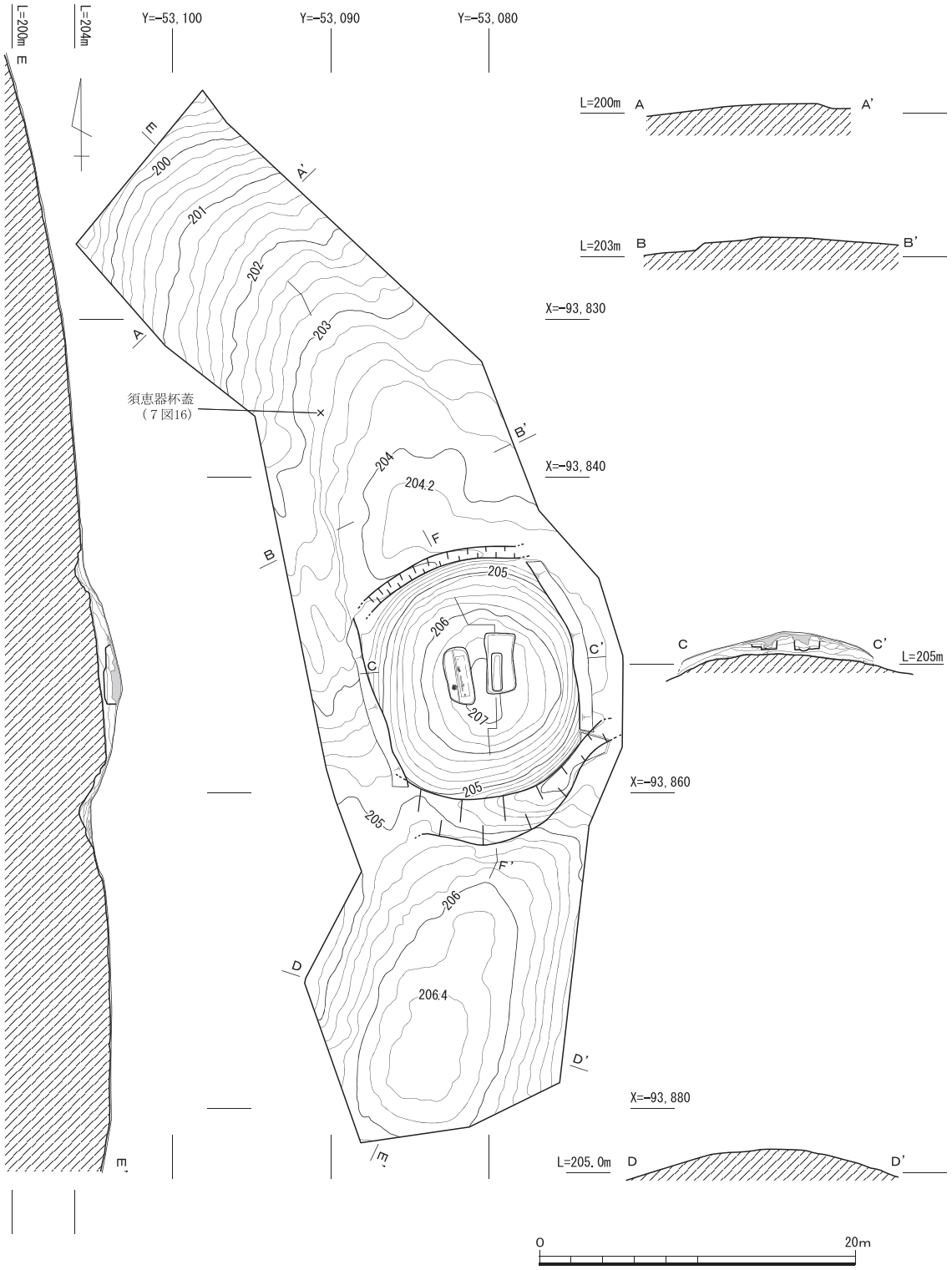
３．溝（第３・４図）

溝は南北の古墳裾部に掘られている。全周をめぐっていたのではなく、尾根を切断･区画し、かつ古墳の高さをより際立たせるのを目的に掘られたものといえる。盛り土との関係でいえば、南北溝とも盛り土の一部が溝内に流れ込んでいるが、基本的に溝の掘形と裾部のラインはほぼ一致している。

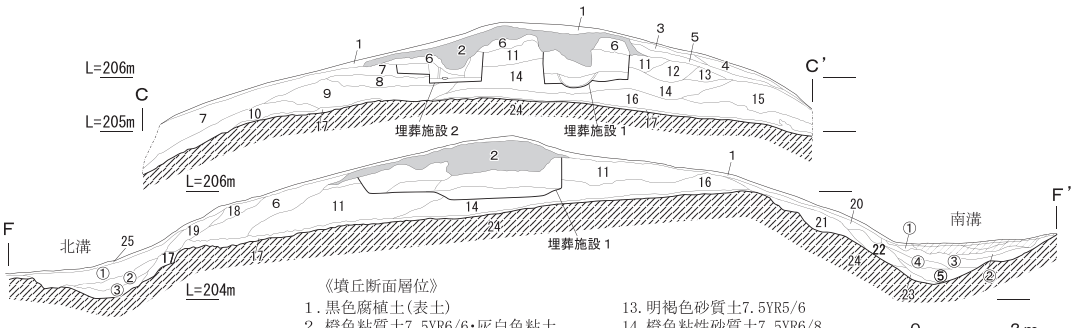
北溝は、幅0.8～0.9m、深さ0.25～0.85mを測る。埋め土は、３層に分けられ、上位から①に



第２図　古墳周辺地形図


L=200m
L=204m
Y=-53,100
Y=-53,090
Y=-53,080
L=200m A A'
L=203m B B'
X=-93,830
X=-93,840
X=-93,860
X=-93,880
L=205m C C'
L=205.0m D D'
須恵器杯蓋
（7図16）
200
201
202
203
204
204.2
205
206
207
206.4
0
20m

第３図　古墳全体図



《北溝》
① にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
② 明褐色粘質土7.5YR5/6
③ 褐色細砂質土7.5YR4/6（５mm～１cmの礫含む）

《南溝》
① にぶい褐色砂質土7.5YR5/4
② 褐色粘質土7.5YR4/6
③ 明褐色粘質土7.5YR5/6
④ 明赤褐色粘質土5YR5/6
⑤ 明赤褐色粘質土5YR5/8

《墳丘断面層位》
1．黒色腐植土(表土)
2．橙色粘質土7.5YR6/6・灰白色粘土7.5YR8/2・明赤褐色土5YR5/6の混在
3．明褐色土7.5YR5/8
4．橙色土7.5Y7/6
5．橙色土7.5YR6/6
6．橙色粘質土7.5Y7/6(灰白色粘土10YR8/2を疎らに含む)
7．橙色土7.5YR6/8
8．灰白色粘土2.5Y7/1・明赤褐色土2.5YR5/8・橙色粘質砂土7.5YR6/6の斑
9．橙色粘質土7.5YR7/6・灰白色粘土2.5YR6/1の斑
10．橙色粘質土7.5YR6/6
11．橙色粘質土7.5YR6/8・明赤褐色土5YR5/6・灰黄色粘土7.5YR7/2
12．明褐色土7.5YR5/8
13．明褐色砂質土7.5YR5/6
14．橙色粘性砂質土7.5YR6/8
15．明褐色粘質土7.5YR5/8
16．明褐色粘性砂質土7.5YR5/8
17．褐灰色粘土10YR6/1・灰白色粘土5Y7/2・灰黄色粘土2.5Y6/2・にぶい黄色粘質土2.5Y6/3の混在(地山直上に溜まった泥質の層で１～４cmの礫も含む)
18．橙色細礫混土7.5YR6/8
19．橙色細砂礫混粘質土7.5YR7/6
20．にぶい褐色土7.5YR5/4
21．橙色粘質土5YR6/8
22．橙色粘質土5YR6/6
23．褐色粘質土5YR4/4・オリーブ灰粘質土10Y6/2
24．明赤褐色砂質土2.5YR5/8・明黄褐色砂質土10YR6/8・にぶい黄橙色粘土10YR4/3・黄橙色極細砂質土10YR7/8・橙色粘質土5YR6/8の互層(地山)
25．褐色土10YR4/4

第４図　墳丘断面図

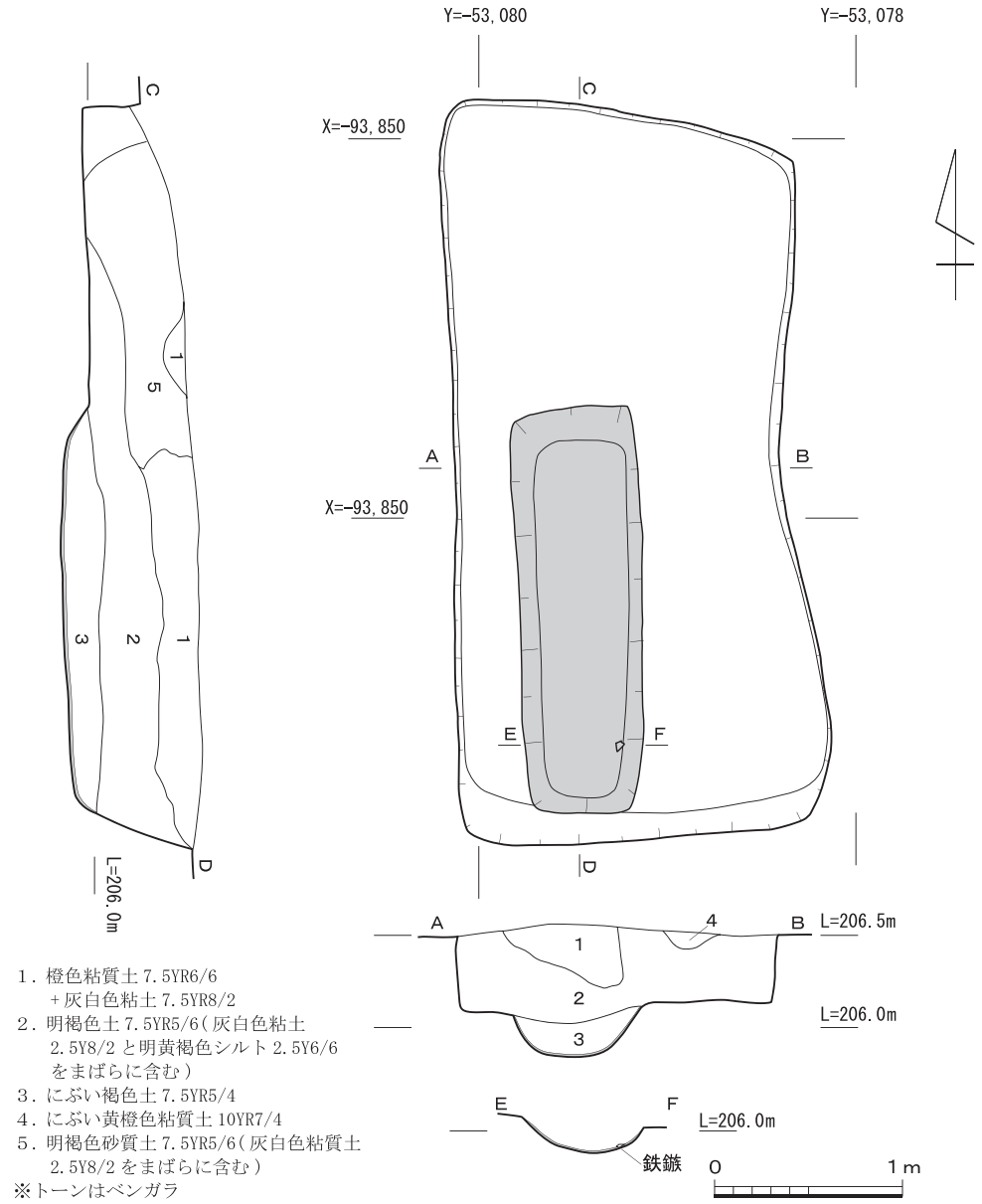
ぶい黄褐色粘質土、②明褐色粘質土、③褐色細砂質土となる。②層中から須恵器杯身(第７図17)の破片が出土した。

南溝は、北溝と比較して幅広で深い。幅１～３ｍ、深さ0.2～0.6mである。埋め土は５層に堆積し、上位から①にぶい褐色砂質土、②褐色粘質土、③明褐色粘質土、④明赤褐色粘質土、⑤明赤褐色粘質土である。③～⑤層から、整理用コンテナ１箱分ほどの須恵器が出土した。古墳時代の須恵器甕・壺のほか、奈良時代の杯身・杯蓋・壺などの破片も混入していた。古墳築造後、溝が埋められていく過程で投棄されたと考えられる。

４．埋葬施設

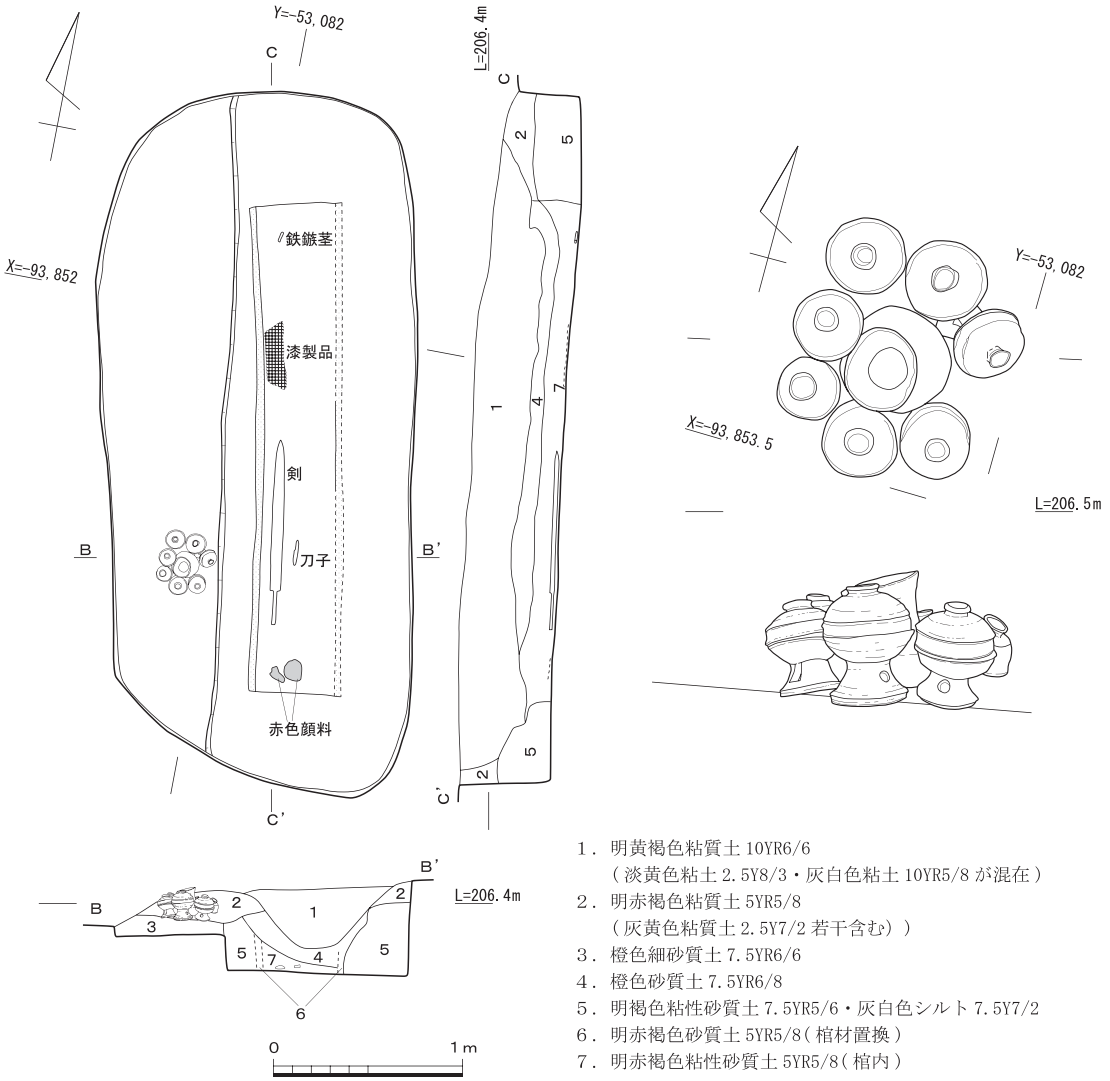
１）埋葬施設１（第５図）　南北に主軸をもつほぼ長方形の墓壙である。長辺3.7m、短辺1.8mを測る。墓壙検出面から棺痕跡の底までの深さは70cmである。棺痕跡は墓壙の中軸より東寄りで確認した。形状は長楕円形で、滑らかな円弧を描く断面形から割り竹形木棺とみられる。棺の向きは南北軸である。長軸2.2m、短軸0.65m、残存の深さ0.3mを測る。両先端の棺痕跡の立ち上がりは、土に置き換わった断面で見る限り、棺底から角度をもたず滑らかな曲面ラインを描く。内部には淡灰褐色細砂が詰まっており、棺痕跡内面にはベンガラとみられる赤色顔料が塗布されていた。棺痕跡内に入れられていた遺物は、鉄鏃１点である。南半のやや東寄りの地点で、先端部を南西方向にして出土した。被葬者の頭位については、棺痕跡の縦断面が北に向かってやや高くなることから北頭位と考えられる。

２）埋葬施設２（第６図）　南北軸のいびつな隅丸方形の墓壙である。長辺3.7m、短辺1.6mを測る。墓壙検出面から棺痕跡の底までの深さは0.45mである。墓壙の中央やや西寄りで、須恵器長頸壺の周りに配された有蓋高杯７点の集合を確認した。これらの須恵器は、棺の埋納後に、壙内



第５図　埋葬施設１実測図

の掘り残した面に配置したものといえる。棺痕跡については、その底を須恵器類の配置面から25cm下位で確認した。長辺に沿って棺痕跡を幅２～３cmで確認したことから、組み合わせ式木棺と考えられる。向きはN10°Eでほぼ南北軸に沿っている。棺痕跡の大きさは、最大長2.6m、幅0.55mを測る。棺痕跡内には、主軸より西寄りに鉄剣が一振り、その剣に並行して刀子一振りが置かれていた。剣は先端を北に向け、刀子は先端を南に向け、刃部側を東側にしていた。この鉄剣の先端から北側約１m離れて、鉄鏃茎の一部がみつかった。さらに鉄鏃茎の南におよそ40cm離れた位置で、黒漆状の塗膜を約10×40cmの範囲で確認した。弓矢を格納する靫の痕跡である可能性がある。しかし、これは断片で残存状況が極めて悪く、取り上げることはできなかった。その他、棺痕跡南端中間部に10×15cmの範囲でベンガラ痕跡がみられた。被葬者の頭位は、鉄剣の向き・配置などから推して、南頭位と考えられる。



第６図　埋葬施設２実測図

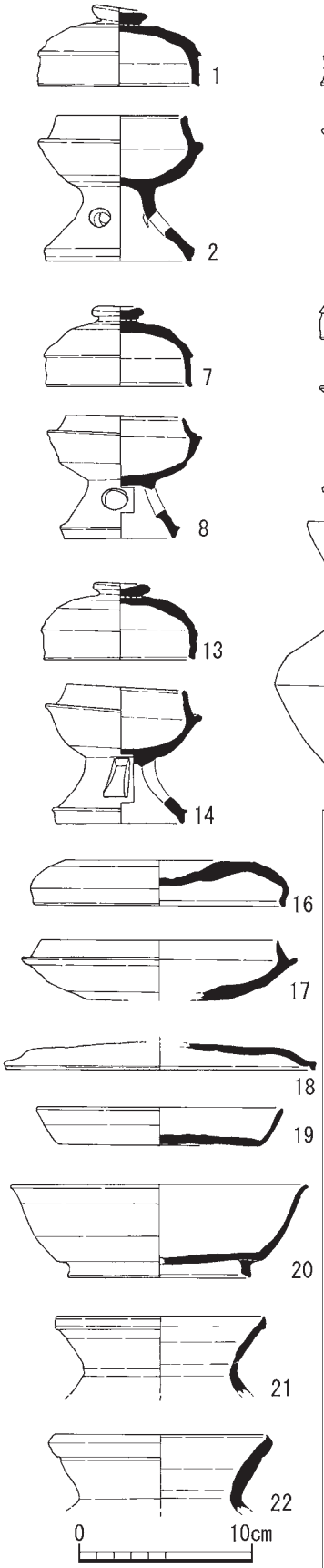
５．出土遺物

埋葬施設１（第７図24）

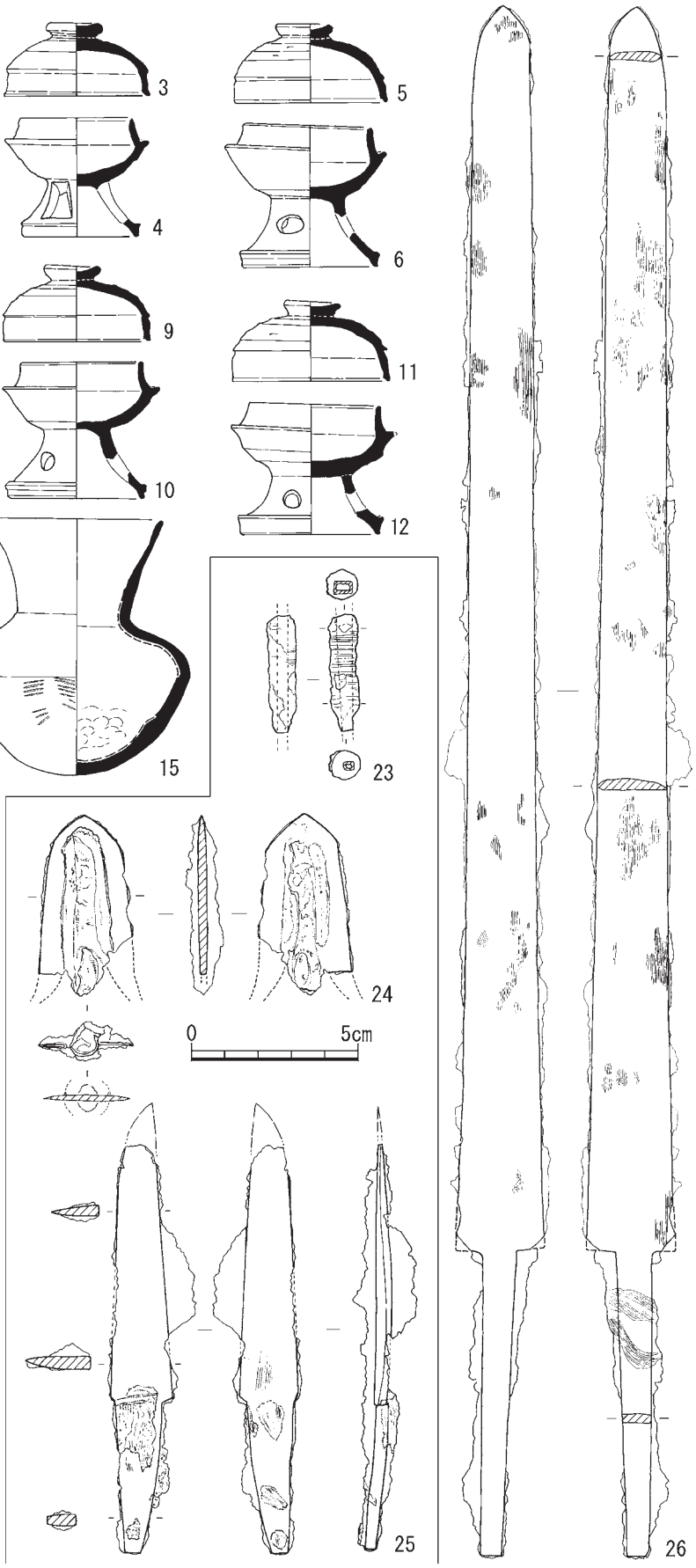
24は平根式鉄鏃で、長さ5.5cm、幅2.8cm、厚さ１cmの残存値である。逆刺の先端は残っておらず、基部形状は矢柄により明確にできない。両面から挟んで着装した矢柄の木質が、鏃身の先端近くまで達している。

埋葬施設２（第７図１～15・23・25・26）

１～14は須恵器有蓋高杯である。有蓋高杯の法量、色調、器面の調整などはほぼ揃っており、一括生産品とみられる。法量の平均値を示すと、蓋の口径8.9cm、器高4.7cm、摘み径3.3cm、高杯の口径7.3cm、器高８cm、裾径7.5cmである。蓋の口径がいずれも10cmを超えず、比較的小型である点は陶邑編年TK47（５世紀後半）の特徴であるが、天井部と体部をわける稜が丸みを帯びてにぶくなってきていることから、MT15併行期、６世紀初頭の時期としておきたい。(注２) 高杯は、短脚一段透かしで、透かしの形は方形と円形のものがある。調整は蓋の天井部および杯部の底近



第６図　出土遺物実測図



第７図　出土遺物実測図

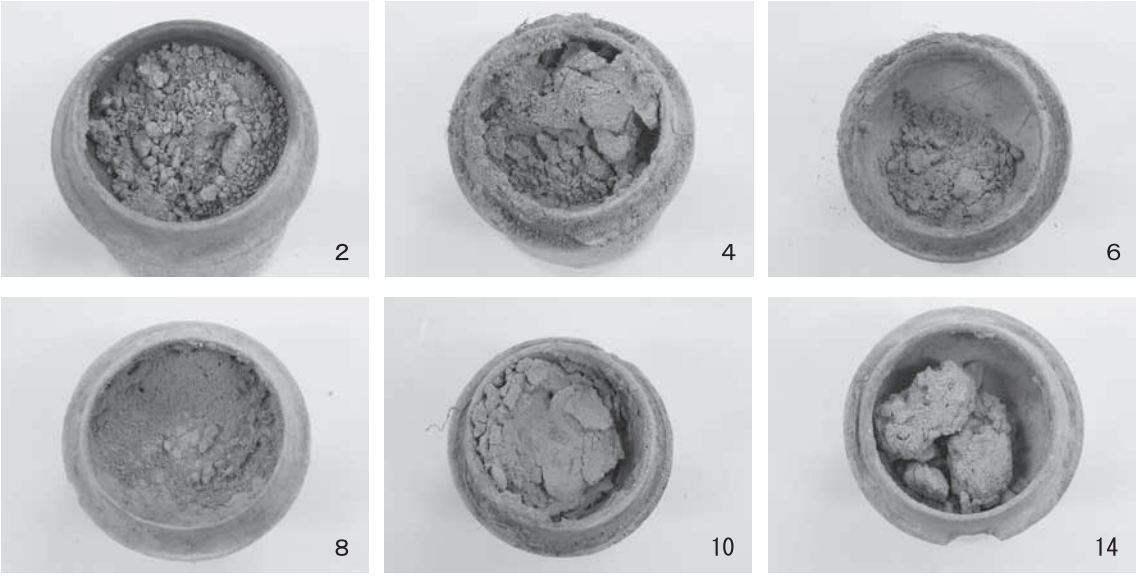


写真１　高杯内残存物（番号は第７図に同じ）

くをヘラ削りしている。色調は黒味を帯びた暗灰色である。蓋の天井部と高杯内面底に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されている。杯・蓋の口縁部にもベンガラの付着がみられるが、塗布されたものではない。なお高杯内に残存していたものは、細かな土砂の塊のみであった（写真１）。土砂の量は高杯２で40ｇ、高杯４で24.4g、高杯６で11.6ｇ、高杯８で19.7g、高杯10で51.8g、高杯12で1.9ｇ、高杯14で32.6ｇを計る。生産された窯の特定はできないが、園部窯跡群（南丹市園部町）における大向支群１・２号窯（５世紀末～６世紀前半）にその可能性がある[注3]。15は須恵器長頸壺である。体部から緩やかに外反する頸部、肩の張った体部をもつ。口径10.4cm、器高15.5cm、体部径13.8cmを測る。

23は鉄鏃茎である。鏃身部ではなく竹材が挿入され樹皮が巻かれている茎の中間部である。残存長3.5cm、幅0.9cm、茎の金属本体の断面は方形である。

25は刀子である。残存長12.2cm、残存刃部長7.7cm、刃部幅1.8cm、関部幅1.4cmである。切先は残存していない。関部および茎部に木質が残る。

26は鉄剣である。全長94cm、刃部長74.4cm、刃部幅５cm、関部幅２cmを測る大型のものである。鞘に収められていたようで、刃部全体に木質が付着している。また柄部の目釘位置は現状では不明である。

溝内（第７図17～22）

17のみ北溝内、その他は南溝内から出土した。17は須恵器杯身で、復元径13.7cm、器高3.5cmを測る。底部ヘラ削りの部分は狭くなっている。暗青灰色である。端部の立ち上がりの形状から、埋葬施設２の有蓋高杯のMT15期よりもやや新しく、TK10併行期とみられる。北溝の埋没過程で混じったものある。18～20は奈良時代の須恵器杯蓋（18）および皿（19）、杯Ｂ（20）である。18は口径17.6cm、器高1.6cm、19の皿は口径14cm、器高2.2cm、底径11.6cm、20は貼り付け高台をもち、全体に薄く仕上げられ、口縁端部がやや反っている。口径16.9cm、器高5.4cm、底径

10.5cmを測る。21・22は古墳時代須恵器壺の口縁部である。21は暗緑灰色で口径12cm、頸部径8.8cm、22は明灰色で口径12.2cm、頸部径9.4cmを測る。

その他の遺物（第７図16）　16は古墳から約20m離れた尾根北西側で出土した古墳時代の須恵器杯蓋である。口径14.4cm、器高2.6cmを測る。焼き歪みによる変形が顕著である。天井部をヘラケズリ、他はナデ調整している。表土直下の地山面で数点の須恵器片とともに出土した。

６．まとめ

古墳は、調査の結果直径15m、高さ2.5mの規模をもつ円墳であることが判明した。古墳頂部の標高は207mを測る。１基の小規模な円墳ながら、丁寧に造られているのが特徴である。塩谷古墳群の背後により高く、周囲をより遠くまで見晴らす格好の位置に造られているといえる。

また、南北の尾根部にも大きく手を加え[注4]、盛り土により整形された墳丘の頂部に２基の埋葬施設を設けている。埋葬施設１は手間のかかる割り竹形木棺であり、鉄鏃１点が出土した。埋葬施設２は組み合わせ式木棺に立派な剣や、刀子、鉄鏃茎、漆製品などを副葬し、かつ棺外に須恵器の有蓋高杯と壺が特異な配列で供えられていた。儀式的なものにしてもかなり手の込んだ様子が窺える。棺内および棺上に土器を供えない点は、塩谷古墳群でもみられたが、一般的な傾向である。また、古墳の築造時期であるが、有蓋高杯の形態が、陶邑編年MT15併行期という点から、古墳築造時期は６世紀初頭と考えられる。MT15併行期の古墳は、丹波地域のみならず少なく貴重である。

最後に棺外に土器を特異な配置で供える事例を２つあげておきたい。まず１例は、三田市西山古墳群６号墳埋葬施設６（６世紀後半）で、杯身、杯蓋、高杯などの一風変わった集積状況が報告されている。それによると、６号墳埋葬施設６のＡ土器群では、須恵器杯身と杯蓋の７セットが３組ずつ２列（１セットは２重）に並べられている[注5]。

もう１例は、古墳周壕中における事例である。長野県諏訪市一時坂古墳の第５・第６土器集中箇所（５世紀後半）で、土師器壺（第５土器集中）や須恵器瑳（第６土器集中）の周囲に、須恵器杯身・杯蓋などの器物を載せた土師器高杯７セット（第６土器集中のほうは１セットが須恵器有蓋高杯）を配置した例が報告されている[注6]。この一時坂古墳では、土器を設置する儀式の内容や手順に関わり、数量に一定の規制が働いたものと推定されている。埋葬儀礼に伴う須恵器を集積するという行為に、数量的規制がなされたという指摘は興味深い。

以上、この古墳は当地域を広く治めた盟主を被葬者とし、少なくとも塩谷古墳群の被葬者と同等か、さらにそれを上まわる力を持った人物の古墳といえる。

（黒坪一樹）

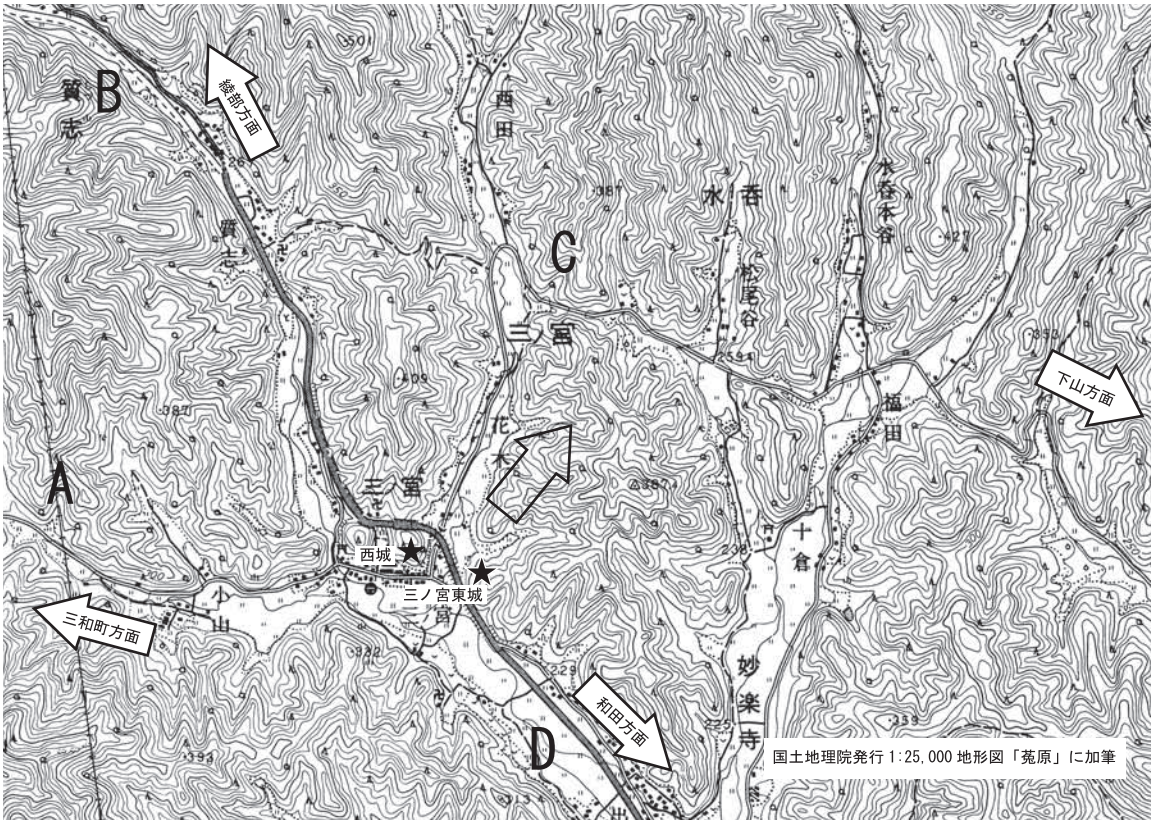
（２）三ノ宮東城跡

１．地理的位置

町内の全域は丹波高地に属しており、大部分が山地である。町内には由良川の支流がいくつかあり、河川がつくる谷と小規模な盆地に分散して集落が存在している。三ノ宮東城が所在する三ノ宮は、京丹波町のほぼ中央部の旧瑞穂町域に所在する。瑞穂町は昭和26年に梅田村･三ノ宮村･質美村が合併して瑞穂村となり、昭和30年に町制移行した経緯がある。

三ノ宮付近には、由良川水系の高屋川が流れている。三ノ宮の西約150mの地点では、高屋川の支流のうち、小山方面（A）からの東流と、質志方面（B）からの南流が合流し、さらに三ノ宮付近で花ノ木方面（C）からの南流と合流し、南東の和田方面(D)へ流れている。これら河川がつくる谷筋のうち、小山方面（A）－花ノ木方面（C）には、これにほぼ沿うかたちで現在府道26号線が通っている。小山方面（A）は福知山市三和町へ通じており、国道９号と合流している。花ノ木方面（C）では､途中で質美川に谷筋を変えながら､下山の集落や由良川方面へ抜ける。質志方面（B）と和田方面(D)をつなぐ谷筋にほぼ対応しては、国道173号が通っている。国道173号は綾部街道の別名をもつ、綾部と篠山をむすぶ街道で、京丹波町内では和田付近で国道９号と交わるほか、綾部からは国道27号･JR舞鶴線のルートで舞鶴まで抜けることができる。

三ノ宮東城は、小山方面（A）・質志方面（B）からの流れと、花ノ木方面（C）からの流れの合流



第８図　三ノ宮東城跡周辺図

部にある。これらがつくるY字状の谷底平野の東にある山地(標高387.4m)から南西方向に尾根がのびており、この先端に城が築かれている。尾根は、地形的には山地の中間斜面に分類されている(国土交通省　土地分類基本調査「綾部」)。地質的には丹波層群に属しており、調査においても基盤層は主として泥岩･砂岩であり､所々でチャートの露頭が散見された。　(加藤雅士)

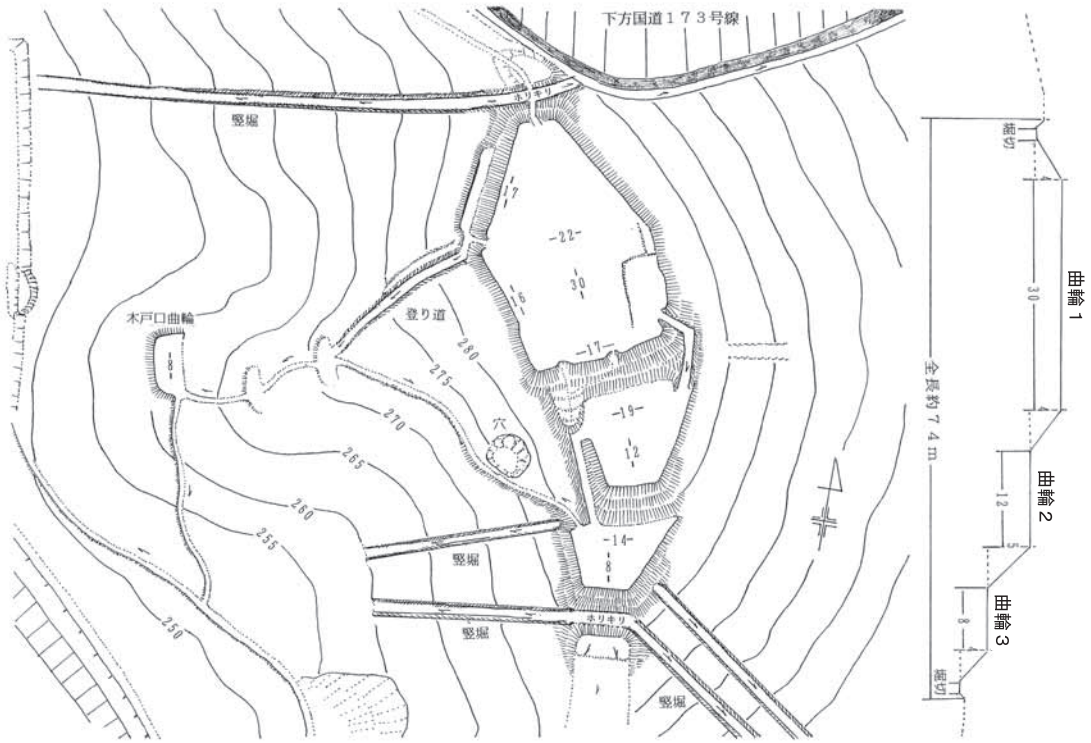
２．京丹波町における中世山城

三ノ宮東城跡は、今回、山城の主要部分をほぼ全域にわたって調査したため、その詳細を知ることができたが、三ノ宮東城とともに、同様な規模で対峙している三ノ宮西城跡の存在はきわめて重要であろう。京丹波町域における山城の分布および縄張り図は、その一部をすでに報告している。ここでは三ノ宮西城跡についてのみ､実地踏査に基づく縄張り図と所見を記しておきたい。

三ノ宮西城跡は、三ノ宮小学校(現在は廃校)の背後にあった。現在、三ノ宮地域振興会によって整備されており、小学校の裏側に遊歩道の登り口がある。ここより15mほどの上方には、８×４ｍの木戸口曲輪とも称されるような平坦地がある。これよりさらに登ると、曲輪１の西側から斜面を降下する竪堀状の道が遊歩道まで達している。

頂上の曲輪１は南北30m、最大幅22mある。ここより北側の遊歩道を下ると、浅い堀切があり、これに続く西側の竪堀は山麓まで降下している。

『大日本帝国陸地測量部』(明治28年発行)の地図によると、北側の山頂(小字高尾)より城跡まで尾根が続いており、この鞍部に峠道が通っていたのがわかる。現在は、この場所に国道を新設したために旧観は失われ、東側(北)に在ったと考えられる竪堀は道路により消滅している。



第９図　三ノ宮西城跡縄張り図(若江茂作図)

曲輪１の南東の隅には、下段の曲輪２へ降りる虎口があり、掘り残し土塁(切岸)の上を通る坂道になっている。また、曲輪２の西側に最下段の曲輪３へ降りる坂道がある。この曲輪３は防御が厳重で、西側の虎口の方向に竪堀がみられ、南側先端の４ｍ下には堀切を穿ち、ここから両斜面は竪堀となっている。

『丹波志』および『姓氏家系大辞典』によると、先祖は久喜山内相模守宗昌と称し、寛政年代には天田郡上川合村(現福知山市三和町)の大庄屋を勤めた。また、氷上郡大河村に住した甚右衛門は三宮三ノ宮城主の子孫であったと記されている。　（若江　茂）

３．全体構造

城は､道でつながれた６つの曲輪から構成されている。曲輪の配置は尾根筋のラインに沿って、北東から南東へかけての配置(曲輪１･２･６)と、尾根腹面の北西斜面への階段状の配置(曲輪３･４・５)が基本となっている。尾根腹面のもう一方の斜面である南東側には曲輪が配されない。これに加え、付属的な２つの小さな曲輪と、曲輪５の東側の丘陵裾付近に平坦面がある。

曲輪１は最高所にある主郭となる曲輪で、北東－南西方向に長細い形状である。曲輪の北東端に土塁・竪土塁・堀切を設けて、北東方面からの尾根づたいの進入を防ぐ。南西方向に対しての防御意識から縁辺部に塀の基礎部分と考えられる石列ＳＶ14を断続的に設けるほか、一つの竪堀を配する。

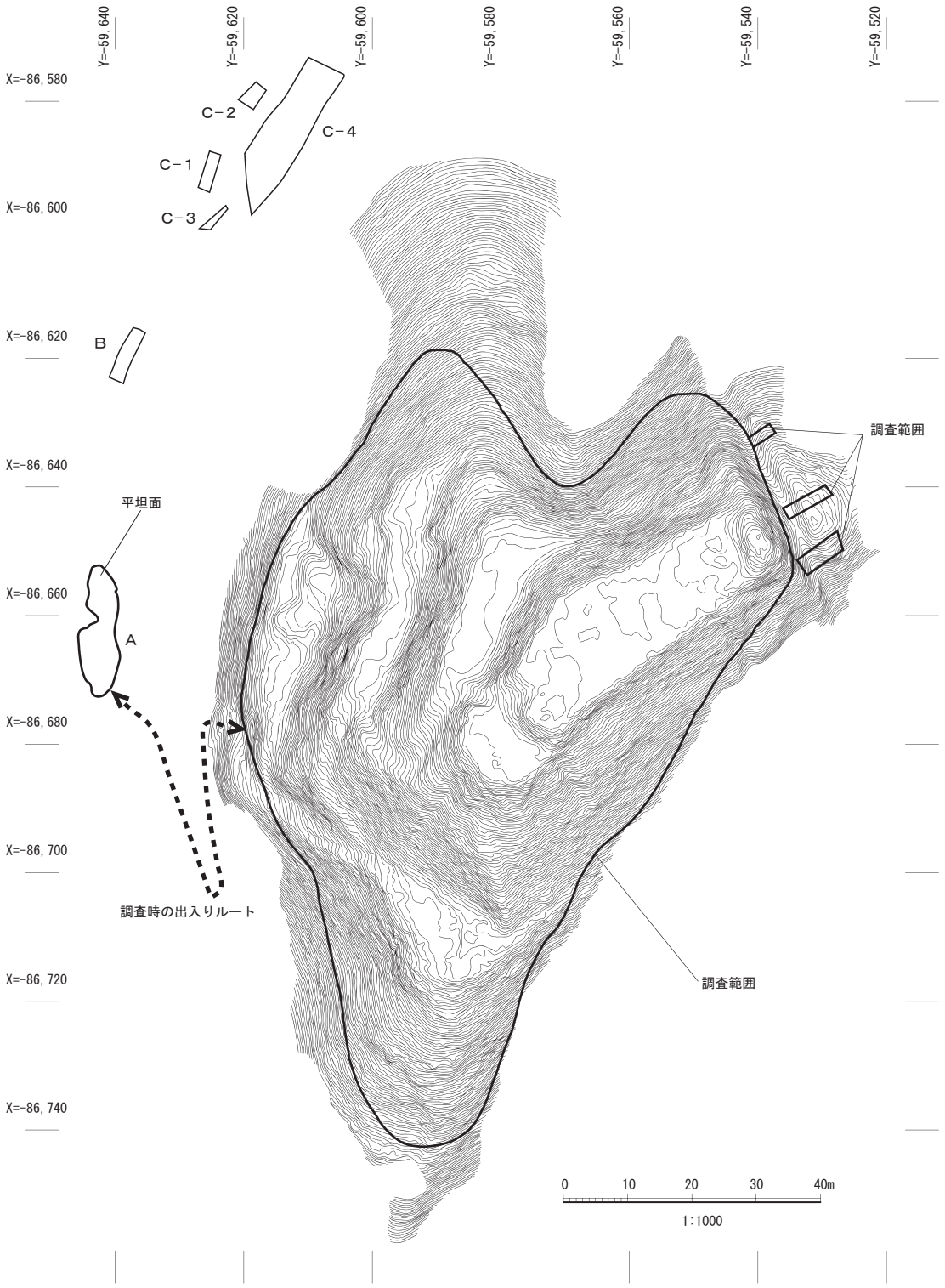
３棟の礎石建物や石積土坑があり、そのうち４間四方の礎石建物ＳＢ１は中心的建物である。曲輪１への出入りは堀切方面へぬける虎口１と、曲輪２・３からの虎口２がある。いずれの虎口にも土留めの石積を伴っている。

曲輪２は、曲輪１の南西となりにある曲輪である。半円形の平面形態をしているが、南西の縁辺は曲輪１にあわせて直線的になっており、やはり塀の基礎と考えられる石列ＳＶ15がある。また南東・南西斜面には計６条の連続した竪掘を設け、曲輪６方面からの進入を防いでいる。礎石建物ＳＢ５は２間×４間の建物で、虎口２を視覚的にも際立たせる効果をもっている。そのほか石積土坑ＳＫ７がつくられている。

曲輪３～５は丘陵の北西斜面に階段状につくられる曲輪である。山側を削った切岸と、谷側の整地で平坦面をつくっており、切岸の斜面裾には排水溝を設け、斜面からの雨水の処理を行う。各曲輪でも礎石やピットを断片的に検出しており、建物が建てられていたとみられる。そのうち曲輪５の北端には虎口と考えられる方形の落ち込みがある。

曲輪６は、曲輪２の南西方向の下位にある曲輪である。平面形態が半円形で、礎石列や土坑を検出した。

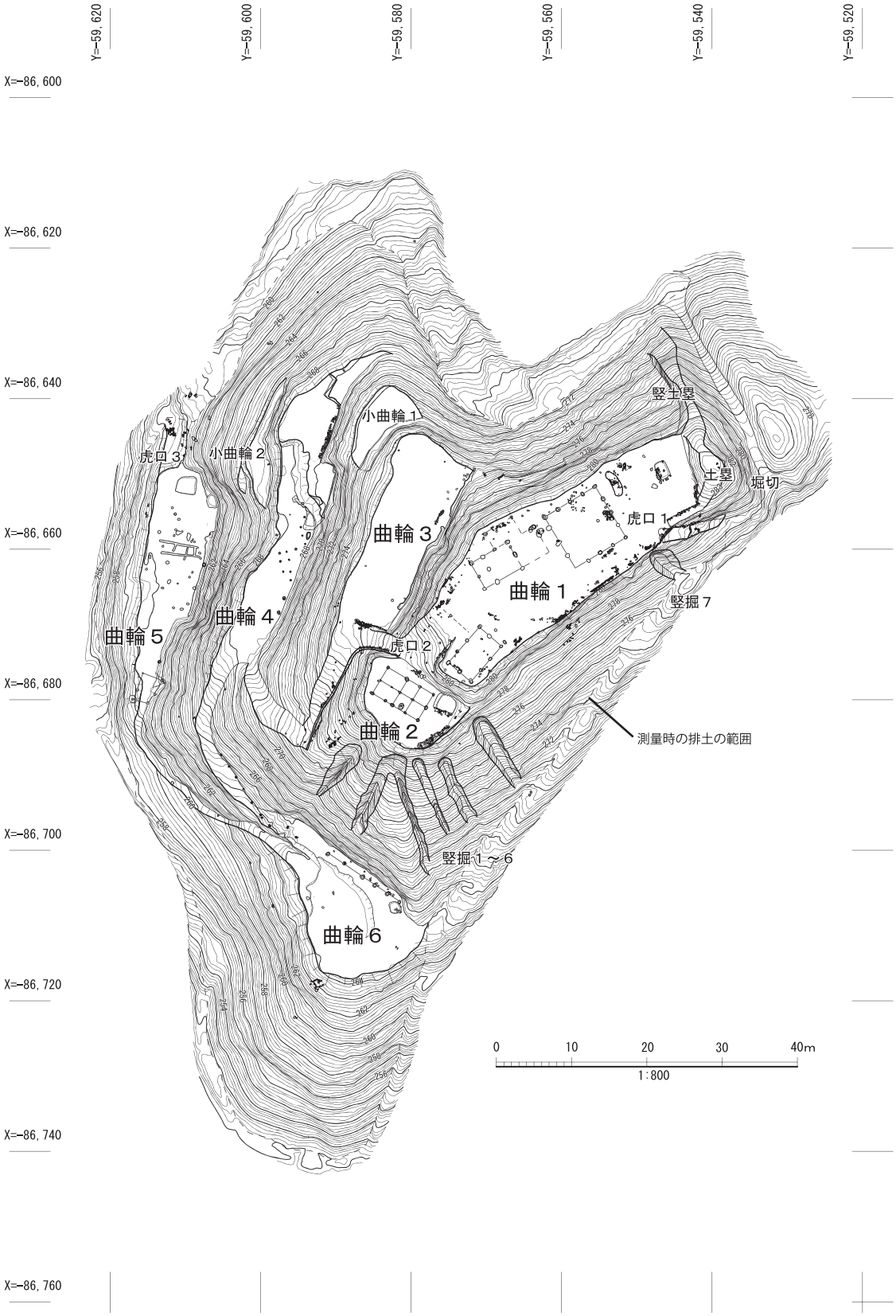
曲輪５の東側には、南北20.3m、東西の幅が最大で6.3m、標高239m前後の平坦面がある。曲輪５にある虎口はこの平坦面にむけて傾斜していることから、この間の道の存在が想定できる。現地調査時には国道173号(標高235m前後)から平坦面にのぼり、曲輪５の南にでる道を使用していたが、断ち割り調査の結果この道は城機能時のものではないと判断した。



第10図　調査前測量図

礎石や石積等に使用される石材は、主にチャートと泥岩であり、これに少数の輝緑岩も存在している。石は角のとれたものがほとんどで、一部に角礫が含まれる。後者は城内の露頭などで採取した可能性があるが、前者は周辺河川から川原石などを運んできたとみられる。

調査地は落ち葉・枝などで覆われており、まず人力でこれを除去した。次に畦の設定を行ったあと、表土の除去を行った。表土下には岩盤層や岩盤が風化した地山層、城構築時に岩盤や地山



第11図　三ノ宮東跡城全体図

層を動かしたとみられる整地層が存在する。また斜面や、斜面裾には城廃絶後に崩落したとみられる堆積層が存在する。遺構検出は岩盤層・岩盤層が風化した地山、および整地土上でおこなったが、いずれも由来を同じくすることから、所によってはそれぞれの峻別や遺構の認識が非常に難しかった。

４．検出遺構

遺構には、主要６か所の曲輪（曲輪１～６）と斜面地の遺構（竪堀・竪土塁・階段状虎口・道）がある。道を除く斜面地の遺構は、これらが設けられた地点に近い曲輪との関連を重視し、竪土塁１・竪堀７は曲輪１のところで、竪土塁２・竪堀１～６は曲輪２のところで記述している。道については、曲輪１・曲輪２に関連する枡形虎口部分についてのみ分離して記している。

１）曲輪１（第12～27図）

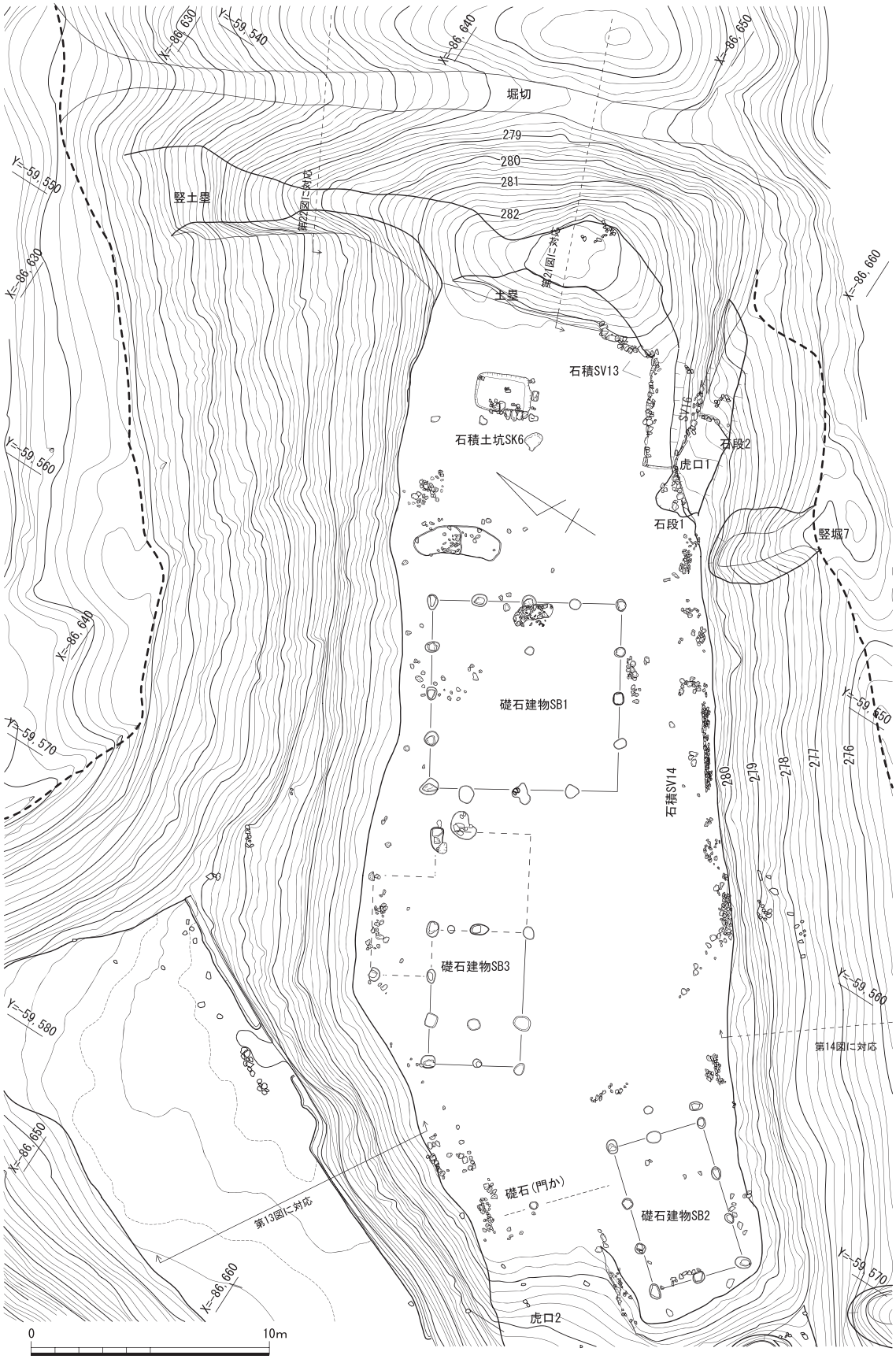
曲輪の形状･規模　曲輪１は、北東から南西方向に細長い形状の曲輪である。平坦面は最長42m、最大幅16mの規模で、平坦面の面積は約540㎡である。曲輪の南東の縁辺は、尾根筋を延長するようにほぼ直線的である。これに対して北西の縁辺は、中ほどにおいて30°屈曲している。これは尾根筋延長線を、北西斜面に作り出した曲輪３・４・５の縁辺部に合わせるためであると考えられる。曲輪の南西部は虎口となっている。南東端は大きく張り出して造成されている。曲輪１の平坦面は概して北東部が高く、南西部が低い。北東端での標高は281.5mを測り、南東の突出部での標高は280.5mである。この平坦面は、中央部は岩盤のカットによって、縁辺部は整地によって作られたものである。東の縁辺部は整地土により若干盛り上げられている。その斜面は岩盤を削ったもので、30°程度の傾斜で、谷底に向けて延びている。西の斜面も岩盤を削った45～55°程度の傾斜をもっており、北半部は谷底にむかって、南半部は曲輪３に向かってのびている。曲輪１は曲輪群の最高所にあり、最大である。複数の礎石建物があることから主郭となる曲輪であろう。

虎口１（道Ａ・石段１・石段２）　曲輪１の虎口は北東および南西に２か所ある。北東側を虎口１、南西側を虎口２とする。虎口１は、曲輪１北東部と堀切の南東部をつなぐ出入口である。土塁南西部から直角近くで土手が築かれ、土塁側からスロープとなって下りてくる。その下りきった所が虎口の始まりで、そこから堀切に向かって斜め方向の道がつけられている。道の土手側には石積が築かれ、路面には粗い造りながら２段の階段（石段１、石段２）が設けられていた。道Ａ、石段１、石段２についてここで記す。

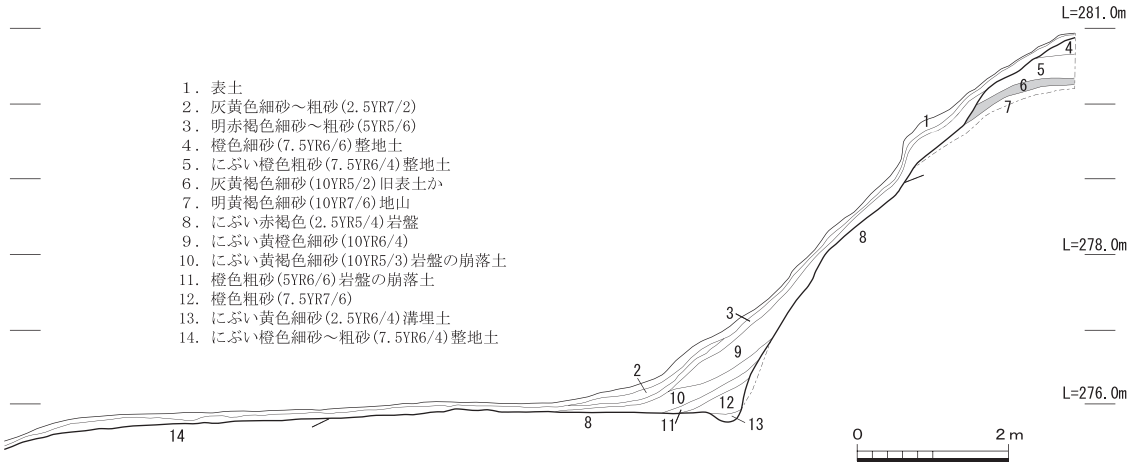
道Ａ　東端は排土のため確認できていないが、堀切の南東部につながるとみられる。確認部の長さは８ｍで、幅は１～1.5mである。両端の比高は４ｍである。

石段１　曲輪１平坦面と道の境界線に並べられた石である。大きさ30cm、厚さ15cm程度の石を、７石平置きする。道方向に面を合わせており、高さ0.15mほどの段をつくる。

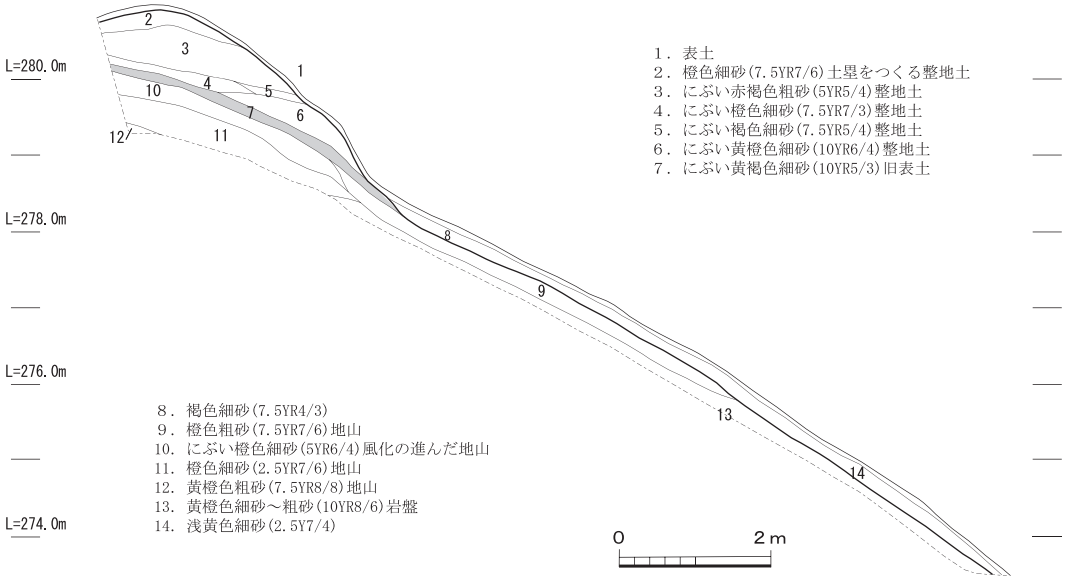
石段２　大きさ25～30cmの亜角礫を４石面をそろえて置き、平石一石をこの面にあわせて積んでいる。上方からの転落石の可能性あったが、面をそろえていることから、石段と判断した。


堀切
279
280
281
282
竪土塁
土塁
第12図に対応
石積SV13
石積土坑SK6
虎口1
石段2
石段1
竪堀7
礎石建物SB1
石積SV14
礎石建物SB3
礎石建物SB2
礎石（門か）
虎口2
第13図に対応
第14図に対応
X=-86,630
X=-86,640
X=-86,650
X=-86,660
Y=-59,540
Y=-59,550
Y=-59,560
Y=-59,570
Y=-59,580
0
10m

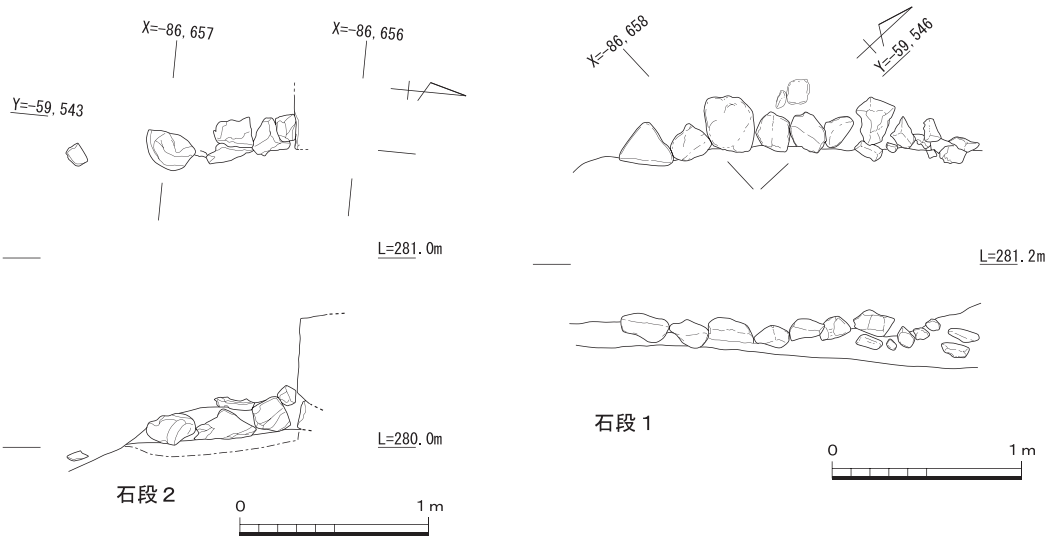
第12図　曲輪１平面図



第13図　曲輪１西斜面・曲輪３断面図



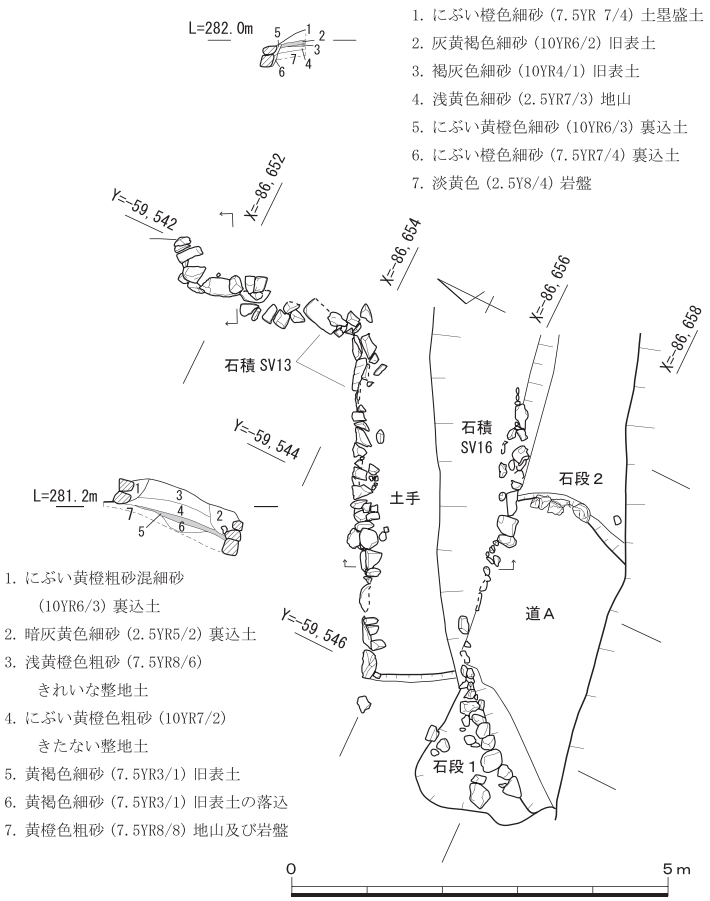
第14図　曲輪１東斜面断面図



第15図　虎口１(石段１・２)実測図

土手　盛り土によって造られており、長さ4.5m、幅１ｍを測る。曲輪の平坦面からの高さは40cmだが、土塁との接続部はスロープ状に高くなっており、土塁の頂部まで容易に登ることができる。曲輪側には、土塁と土手に対してＬ字に取り付く石積ＳＶ13、道側には石積ＳＶ16がある。

石積ＳＶ13　ＳＶ13のうち土塁の部分は土手の付根から北に2.5mの長さに伸び、短く90°に折れて土塁斜面に取り付く。基底部に40cm角の亜角礫を置き、その上には30cm程度の長方形の石が面を合わせて重ねられ、特に土塁に取り付く部分は、高さ0.8mに石を４段程度に積み、丁寧に造っている。断ち割り断面によると、土塁の盛り土をカットした後、岩盤の上に基底石を置き、奥の岩盤との隙間に裏込土を入れている。裏込土は土塁中の旧表土を覆っている。一方、土手部の石積は長さ40cm程度の長方形の石を使用している。長手に２段積んでいて、高さは0.2 ～ 0.3mを測る。検出時に付近で散乱していた石の量から判断すると、本来はいずれも現状より１・２段の石を上に積んでいたと考えられる。

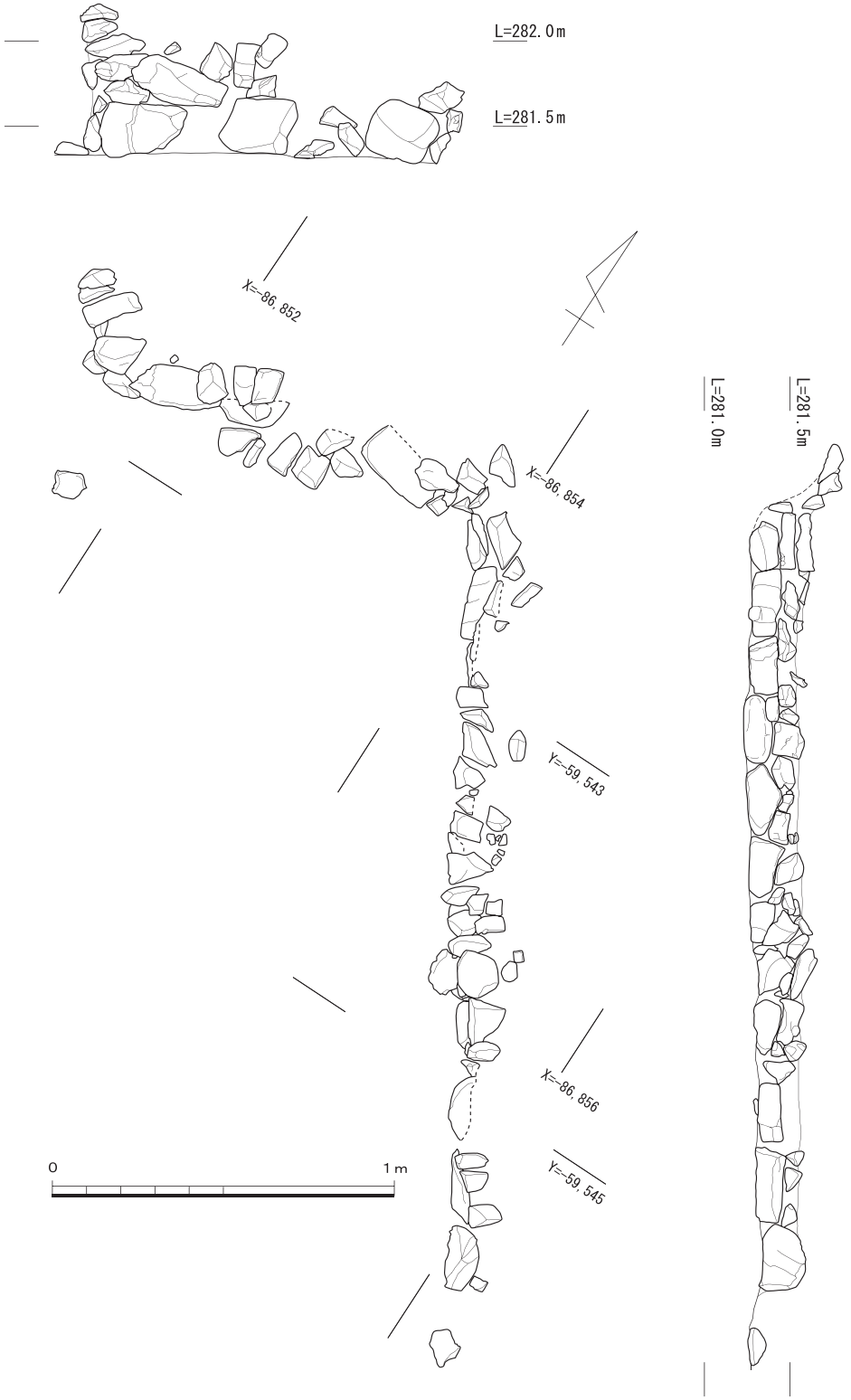


第16図　石積ＳＶ13等周辺実測図

石積ＳＶ16　ＳＶ16は長さ3.6m、高さは0.4 ～ 0.5mである。東に下る道に最大70cm、平均40cmの偏平な石を基底面に置き、その上に20cm程度の石を２・３段積んでいる。

ＳＶ13・16間の断ち割り断面によると、土手は傾斜変換点に盛り土してつくられたことがわかる。平坦な部分は岩盤をカットした面で、斜面部には４cm程度の薄い旧表土が確認できる。両積石の背後には裏込めの土を入れている。土塁部のＳＶ13の裏込土は、土塁中の旧表土を覆っており、土塁の改変時に作られたことが分かる。つまりこの旧表土は城機能時のものである。虎口１の土手・道とそれに伴う石積は一体的なものと考えられることから、虎口１は土塁の改変時につくられるか再整備されたとみられる。（加藤雅士）

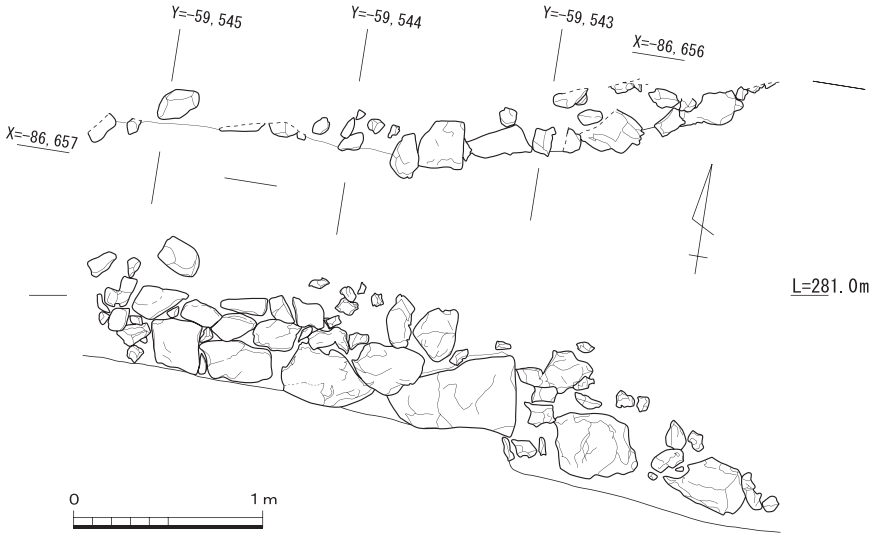
石積ＳＶ14　ＳＶ14は南東側縁辺に沿って残存している石積である。直線的に延び、所々に途切れた箇所が見られる。虎口１から南西に延びる石積は、ＳＢ１のそばの石列に対応して約２ｍ途切れる。その南西に長さ約５ｍの石積列があり、５ｍの間隙をおいて約２ｍの石積列がある。



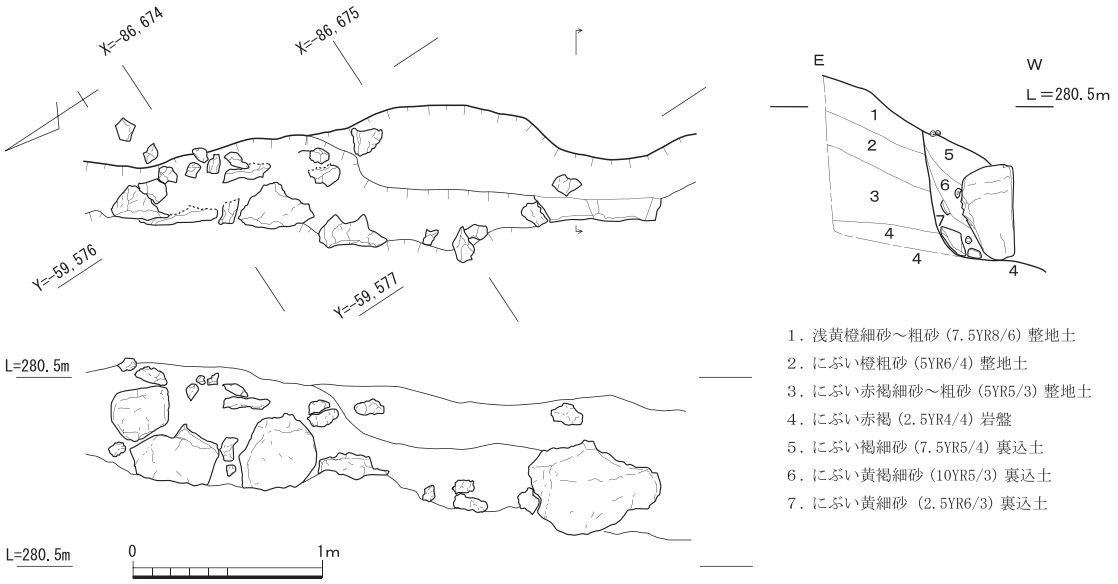
第17図　石積ＳＶ13実測図

断絶部を含めた長さは約30m、幅は0.5～0.7mを測る。　（黒坪一樹）

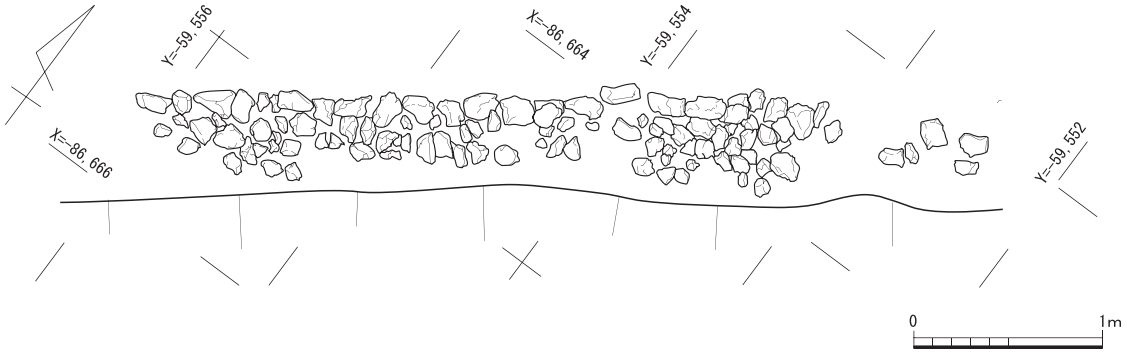
石積ＳＶ９　道Ｂの東端である、曲輪１南側の張り出し部虎口２に面してにつくられた石積である。長さは2.9m、高さ0.4～0.5mである。使用される石材は長さ40～70cm、厚さ30cmの平石で、基底部には大きめの石が使われている。石は岩盤上に直接置かれており、曲輪１の整地土



第18図　石積ＳＶ16実測図

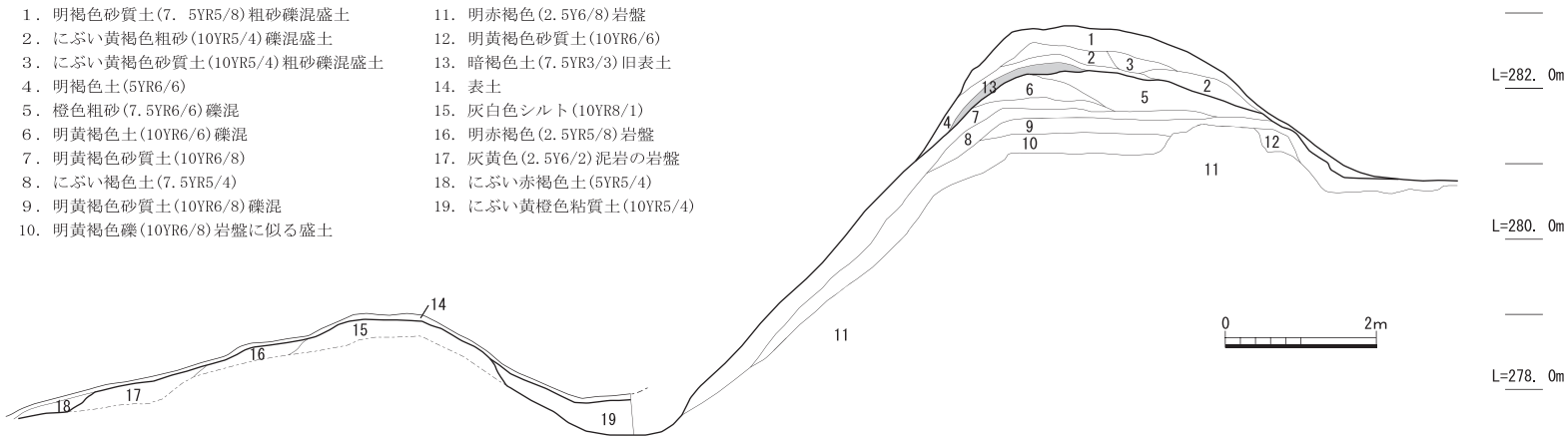


第19図　石積ＳＶ９実測図



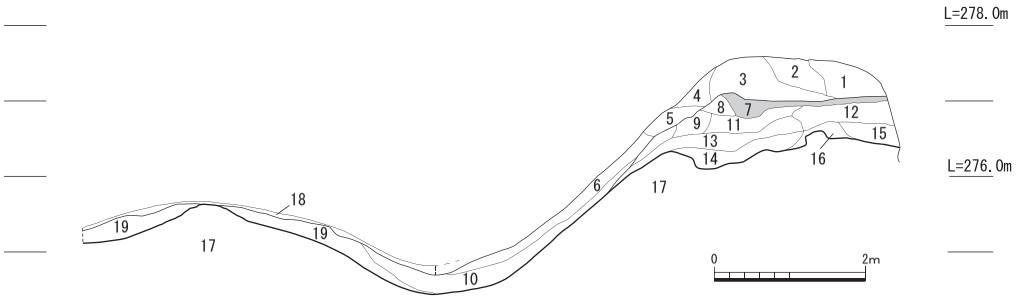
第20図　石積ＳＶ14実測図

1．明褐色砂質土(7. 5YR5/8)粗砂礫混盛土
2．にぶい黄褐色粗砂(10YR5/4)礫混盛土
3．にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)粗砂礫混盛土
4．明褐色土(5YR6/6)
5．橙色粗砂(7.5YR6/6)礫混
6．明黄褐色土(10YR6/6)礫混
7．明黄褐色砂質土(10YR6/8)
8．にぶい褐色土(7.5YR5/4)
9．明黄褐色砂質土(10YR6/8)礫混
10．明黄褐色礫(10YR6/8)岩盤に似る盛土
11．明赤褐色(2.5Y6/8)岩盤
12．明黄褐色砂質土(10YR6/6)
13．暗褐色土(7.5YR3/3)旧表土
14．表土
15．灰白色シルト(10YR8/1)
16．明赤褐色(2.5YR5/8)岩盤
17．灰黄色(2.5Y6/2)泥岩の岩盤
18．にぶい赤褐色土(5YR5/4)
19．にぶい黄橙色粘質土(10YR5/4)



第21図　土塁・堀切実測図

1．橙色粘質土 (7.5YR6/6)
2．黄褐色粘質土 (10YR5/6)
3．明黄褐色土 (10YR6/6)
4．明褐色土 (7.5YR5/6)粗礫混
5．黄褐色土 (10YR5/6)粗礫混
6．褐色土 (10YR4/6)
7．にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 粗礫混 旧表土
8．明褐色砂質土 (7.5YR5/6)
9．にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
10．明褐色砂質土 (7.5YR5/8)
11．明黄褐色土 (10YR6/8)
12．にぶい赤褐色土 (5YR5/4)粗礫混
13．橙色粘質土 (7.5YR6/8)粗礫混
14．橙色粘質土 (7.5YR6/8)灰白色礫 (2.5Y7/1) をまだらに含む
15．明褐色粘質土 (10YR7/6)
16．黄橙色粘質土 (7.5Y7/8)
17．赤褐色 (2.5Y4/8) 岩盤
18．表土
19．暗赤褐色土 (2.5Y3/4)粗礫混



第22図　竪土塁・堀切実測図

をカットした背面には裏込土が入れられる。裏込土の最下層は礫が多く混じる土である。

ＳＶ９の下方には人頭大の角礫が多く散乱していることから、本来は２・３段の石積であったとみられる。その役割は曲輪１側面の土留めとともに、道Ｂに対して視覚的効果を有していたと考えられる一方、石積がつくる面と道の平坦面は直角で交わらない。道Ｂの斜平面は、ＳＶ９に対しては手前１mのところから比高差0.5mの緩斜面となっており、石積の技術的限界を示しているとみられる。（加藤雅士）

土塁　東側尾根筋から曲輪１への侵入を防御する目的で、曲輪１の北東縁辺に隣接して築かれている。曲輪１の平坦面からの比高は２mを測る。また、この土塁を築いたことにより下の尾根筋を断ち切った堀切底からの比高は最大で約８mに達する。土塁最大幅は中間部で5.5m、北西端で3.5m、南東端で4.2mを測る。南西部は土塁頂部へのぼるスロープとなっている。頂部から丹波焼甕の体部や銭貨などが出土した。

堀切までを含む土塁の堆積状況は、岩盤から大きく数層に分けて説明することができる。岩盤の基底から、芯となる土を積み上げ、次に曲輪１平坦面側へブロック状に積んで拡張させていったとみられる。中間よりやや上層に有機質を含む黒褐色土がみられ、別の時期における土塁頂部とみなされ、少なくとも二時期にわたって造り直されているのがわかる。下層の旧表土下より金銅製の鍬形台〔図版第25(3)〕の破片や土師器皿、陶器片などが出土した。

堀切　堀切は、南東側の端は不明ながら、長さは約30mを測る。なお、調査範囲外となるが、堀切より東側の尾根筋にも土塁状の盛り上がりがあり、小規模な堀切が２条掘られている。この土塁状の部分について、層序および遺物の堆積・包蔵状態を確認するため、幅1.5m、長さ８～10mのトレンチを３か所(拡張区１・２・３)設定した。その結果、いずれのトレンチも表土直下で岩盤面となり、堆積土はほとんどなく、また出土遺物も皆無であった。

竪堀７　曲輪１の東斜面北側に設けられている検出長4.8m、幅２～3.2m、深さ0.2～0.4mを測る。地山層を掘り込んでいるが、断面形は「U」字形を呈する。埋土は黄褐色土で、数cmの大きさの礫を疎らに含んでいる。

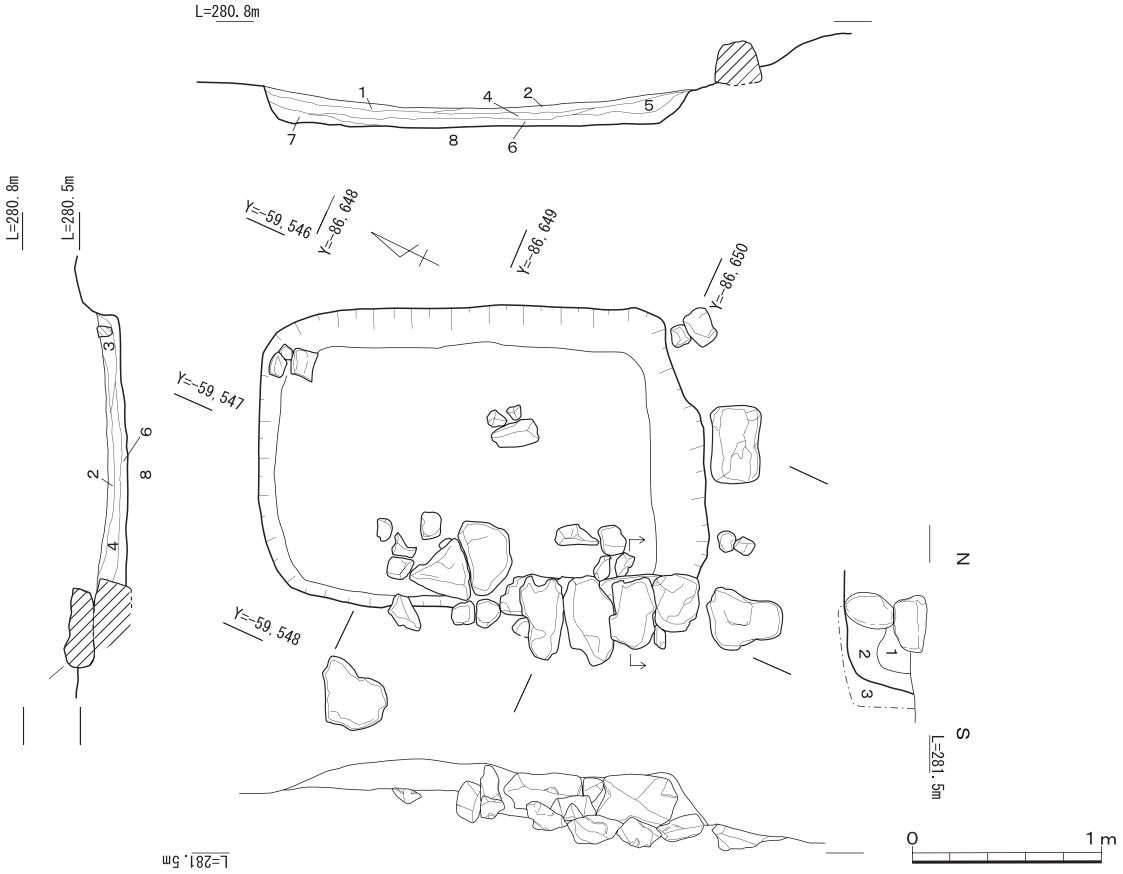
竪土塁　竪土塁は土塁の長軸に沿う北西斜面に堤状に築かれた土塁である。堀切同様、曲輪１への侵入を防御するための施設である。長さ11m、幅3.2m、最大高0.8mの規模である。断ち割って堆積状況を観察した結果、土塁と同様、数層の重なりがみられた。

集礫遺構ＳＸ４　千個を超える大小の礫が集積していた。その範囲は東西3.6m、南北3.5mにわたる。直線を意識して石を並べている所もあるが、全体として区画されたものとは考えられない。礫は岩盤から割り取られたような円磨度の低いチャートおよび泥岩の角礫である。いずれも径10～30cmまでのものであるが、中央部に一石だけ長さ70cm、幅50cm、厚さ25cmの大型のものがあった。礫の間から、丹波焼甕の破片が数点出土した。

石積土坑ＳＫ６　ＳＸ４の礫を除去後に、集礫範囲の北東寄りで、長方形の土坑を検出した。長辺2.35m、短辺1.8m、深さ0.2mで、西側長辺にのみ６石で内側に面を揃えた石積が施されていた。貯蔵穴とみられる。（黒坪一樹）

第23図　集礫遺構ＳＸ４検出状況

礎石建物跡ＳＢ１　曲輪１の中央部に位置する４間四方の礎石建物で、城の中心的建物である。柱間は1.95mの等間である。柱の通りから曲輪の縁辺までの距離は、北東側が１mである。これに対し南東側が3.5mで、南東方面を意識した建物と考えられる。礎石10基と、礎石抜き取り穴５基を確認している。礎石には偏平形や方形の亜角礫が使用されており、大きさは30cm程度、厚さ15～30cmである。いずれも上面に整った平坦面を有しており、慎重に石材の選択が行われたとみられる。礎石据付掘形は、礎石よりひとまわり大きい程度のもので、深さは0.2m程度である。これらは他の建物の



1．黒褐色粘性砂質土（7.5YR3/1）表土
2．灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3．暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
4．にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
5．褐色粘質土（10YR4/2）
6．にぶい黄褐色礫混じり粘質土（10YR4/3）
　φ３～５cm大の岩盤由来礫含む
7．暗褐色粘質土（10YR3/3）
8．明赤褐色礫（5YR 5/6）岩盤

＜断割部土層＞
1．灰黄褐色細砂（10YE4/2）裏込土
2．にぶい黄褐色細砂（10YR5/3）裏込土
3．明赤褐色礫（5YR5/6）岩盤

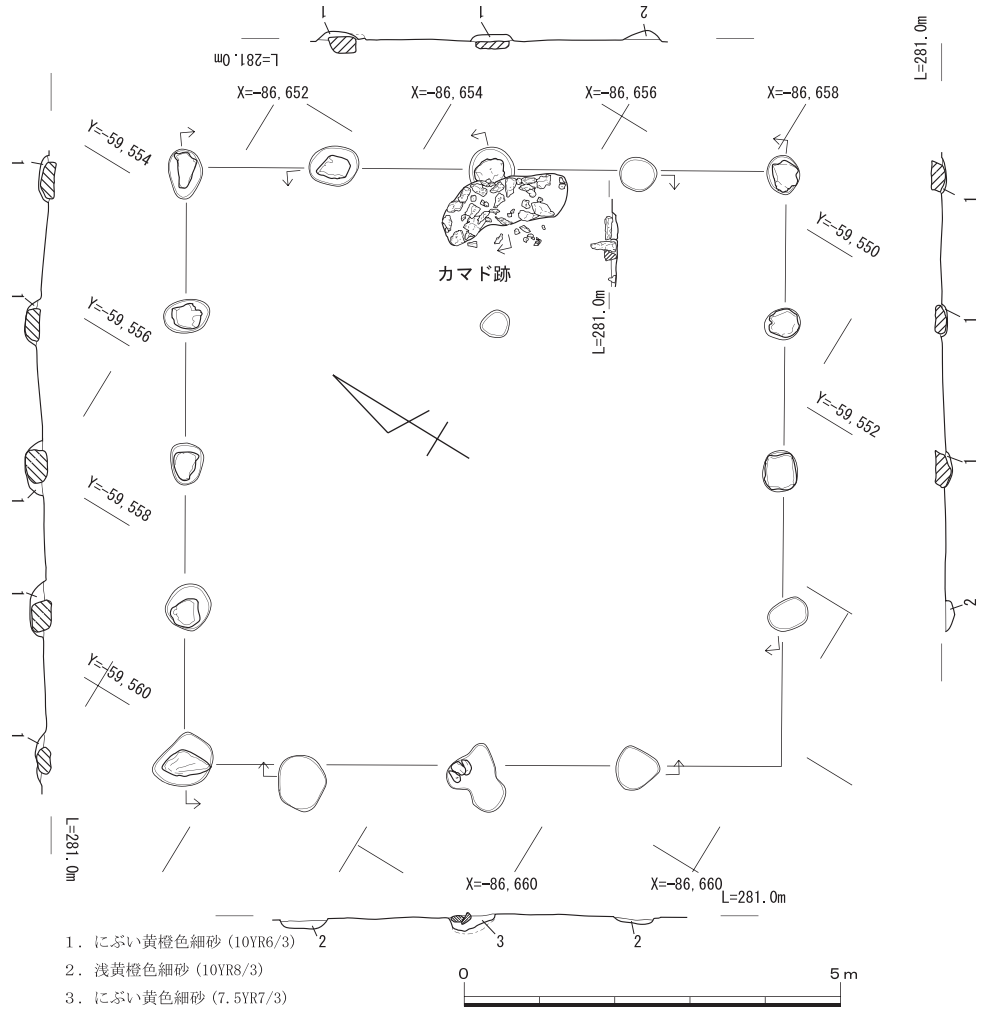
第24図　石積土坑ＳＫ６実測図

礎石にも共通する特徴である。

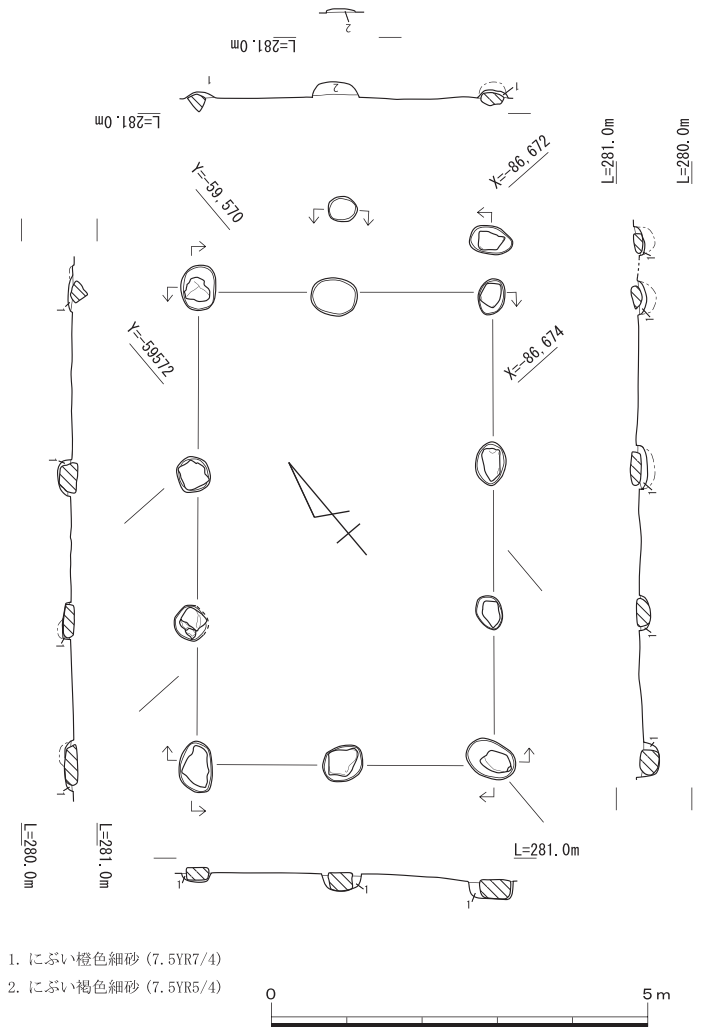
北東柱列の中央部内側には、礎石に接して半円形状に石が配されている。これの堀形は礎石据付堀形を切っている。炭や赤変は認められなかったが、カマド等の厨房施設の可能性がある。また南東の柱筋の外には石列がある。これは、壁立ちなど建物構造に由来するもの、あるいは南東方面を意識した塀の可能性がある。

礎石建物跡ＳＢ２　曲輪１の南東端にある２間×３間の建物である。曲輪の突出部にあわせた方位をとっており、礎石建物１・３とは建物方位が異なる。柱間は1.95mで等間であるが、北の１間のみ2.4mである。南妻に近接して礎石らしきものがあり、付属施設がとりついていた可能性がある。また南西柱筋の内側には、拳大の石による石列がある。虎口に隣接することから、隅櫓的な性格が考えられる。

礎石建物跡ＳＢ３　ＳＢ１の南西隣にある礎石建物。柱間は1.8～２mである。礎石の残りが悪く、建物の復元が確定しない。ＳＢ１の北西辺と柱通りをあわせている点を評価すると、２間×３間の建物と考えられる。一方、曲輪に屈曲部にある点と周辺の礎石を全て積極的に評価すると、曲輪１に柱通りをあわせた２間×５間の建物に１間×２間の張出部が付属する凸形に復元するこ



第25図　礎石建物跡ＳＢ１実測図



第26図　礎石建物跡ＳＢ２実測図

ともできる。ただし、張出し部にあたる３石は上面が平坦ではないという難点がある。

その他の礎石　曲輪１南西部の虎口に近接した場所に、礎石が１石ある。ここの曲輪の縁辺部には、ソフトボール大の石が不整形ながら列状に散在している。礎石は、石の列やＳＢ３の桁行きに対して直角のラインに置くことができるので、門などを構成していた礎石の一つである可能性がある。　（加藤雅士）

２）曲輪２（第28～35図）

曲輪の形状・規模　曲輪１から南西方向に南北約14m、東西約９mの半円形の曲輪で、面積は約80㎡である。曲輪１から曲輪３へと降りる中間地点に位置する。曲輪１とは約2.5m、曲輪３とは約３mの標高差がある。南東方向に向いた曲輪である。

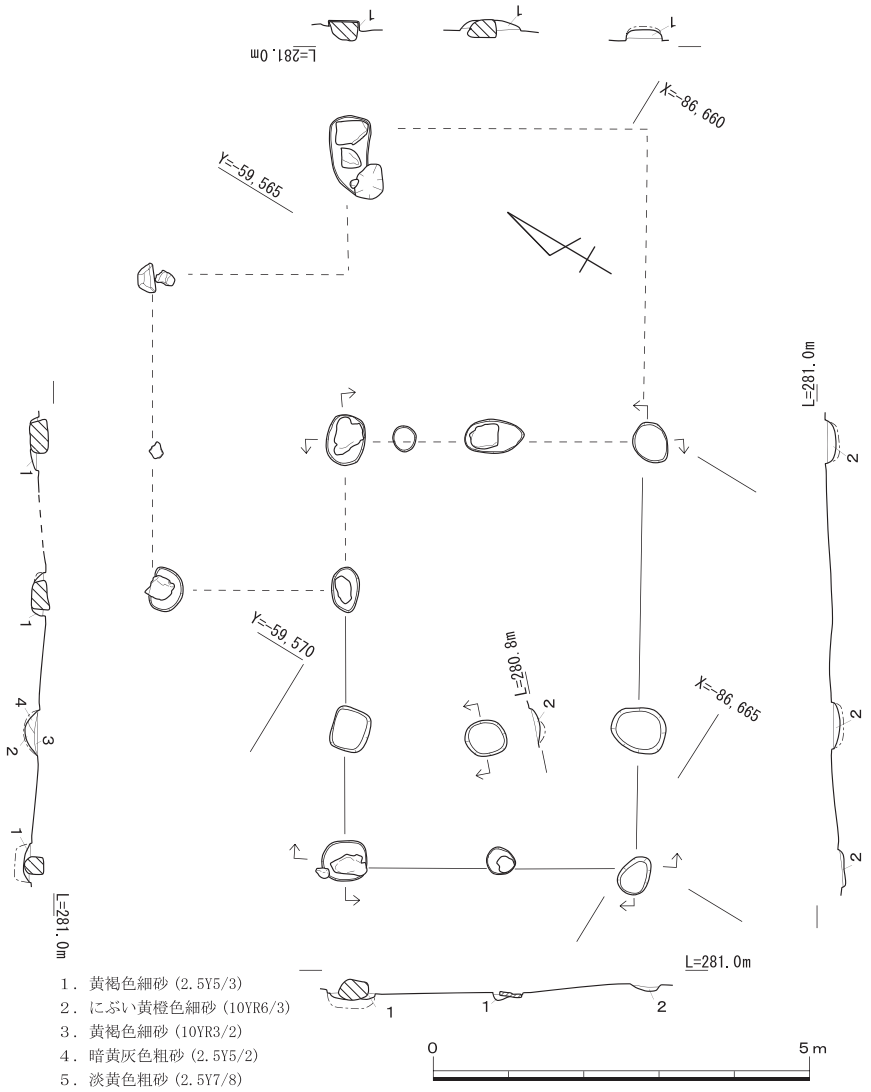
検出遺構には２間×４間の礎石建物跡ＳＢ５、石積土坑ＳＫ７、石積ＳＶ15などがある。また、曲輪の南東斜面部に掘られた６条の竪堀群がある。これらは曲輪２の南東側に集中して掘られているので、ここで記述しておきたい。

曲輪の東西に断ち割りを入れたところ、岩盤の上に整地したとみられる層が確認できた。本来の地形は西が低く、現状の地形も東に比べると10cmほど低い。東は、整地層の上に石積ＳＶ15を固めるように土塁状の高まりがあった。

出土遺物は、礎石建物跡周辺から北宋銭、白磁、青花磁器などが出土している。

石積土坑ＳＫ７　曲輪２の北東隅で、曲輪１の斜面裾部に設けられた土坑である。不定形な方形で、長辺2.8m、短辺2.1m、深さ0.45mを測る。南側のみ長辺に沿って径40～55cmの大きさの角礫を積んでいる。長辺に角礫を積む造作は、曲輪１の石積土坑ＳＫ６と共通する。北側は曲輪１の裾部にかかり、硬い岩盤面まで掘り込んでいる。中国製青花磁器椀片、丹波産甕片、瓦質擂鉢片などが若干出土している。　（牧田梨津子・黒坪一樹）

虎口２（枡形虎口・道Ｂ・道Ｃ）　最高所の中心的な曲輪１への正面虎口である。道Ｂ・Ｃが一



第27図　礎石建物跡ＳＢ３実測図

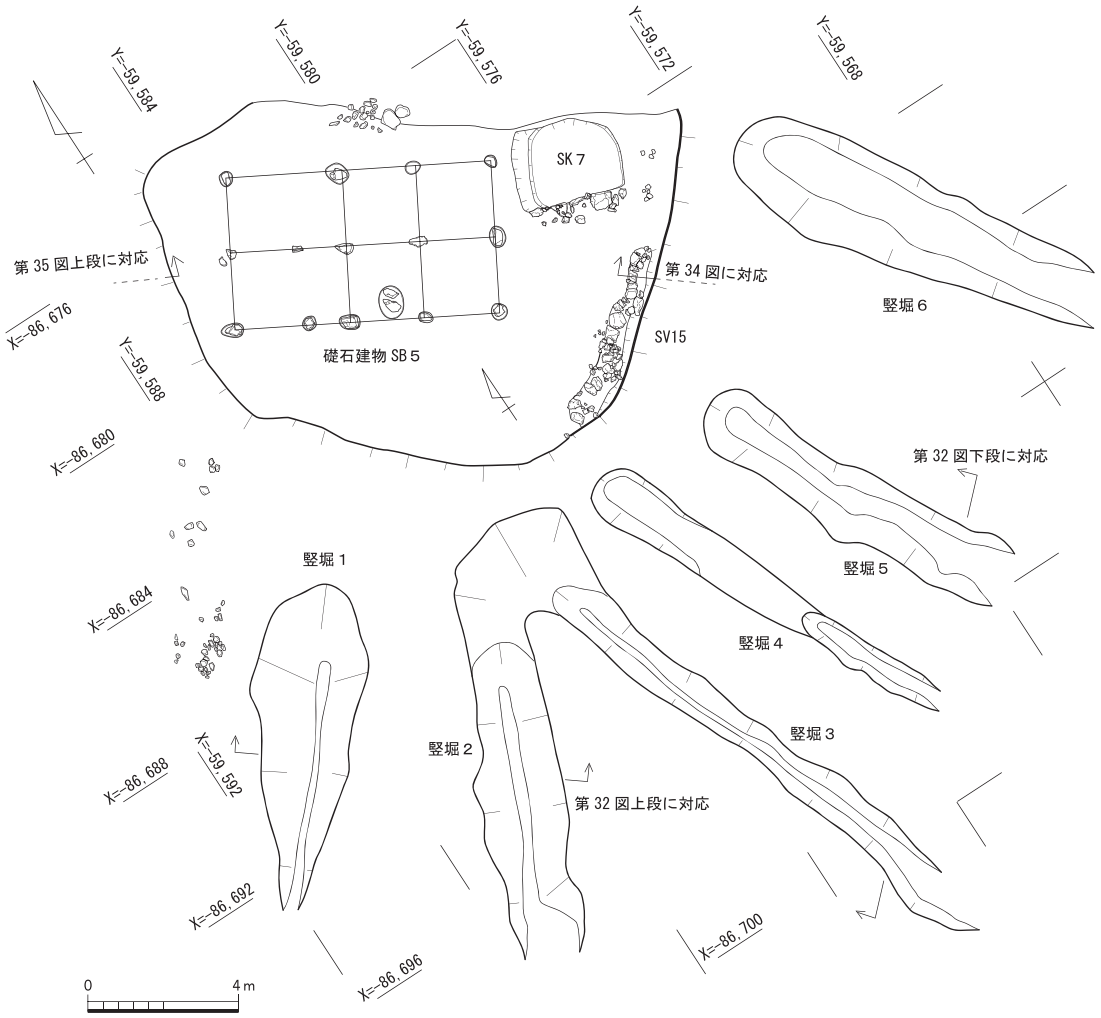
連になって、曲輪１の南西端に内枡形の虎口をつくる。

曲輪１南東部は隅櫓と想定される礎石建物跡ＳＢ２があるため、大きく張り出している。虎口はその張り出し部の北西に隣接して設けられている。道Ｄ～Ｆはいずれの箇所も幅1.2～3.5mほどであるが、この虎口に至り、半間分ほど幅が広がっている。したがって虎口の幅は4.5mを測る。これは通常の山城虎口の規模としては広いといえる。

道Ｂ　曲輪１の平坦部の南西端を凹ませた形で造られた長さ６ｍ、幅５ｍの斜路である。路面は岩盤層を削ってつくられており、道の両端の比高は２ｍ、傾斜度は20°である。

道Ｃ　曲輪２の北端と曲輪３の南端をつなぐ道で、道Ｂとは直角に接続する。路面は岩盤を削ってつくられており、長さ６ｍ、幅３ｍを測る。道の両端の比高は2.8mで傾斜度は15°である。道の南端には道Ｄへと続く排水溝が掘られている。また道の南端にはソフトボール大の石が列状に散在していた。

石積ＳＶ10　道Ａの北側面につくられた石積である。長さ4.5mで、最高部の高さは0.9mである。石は長さ30cm程度の長方形の亜角礫で、長手積みで１～７段に重ねる。基底部の１石は他より

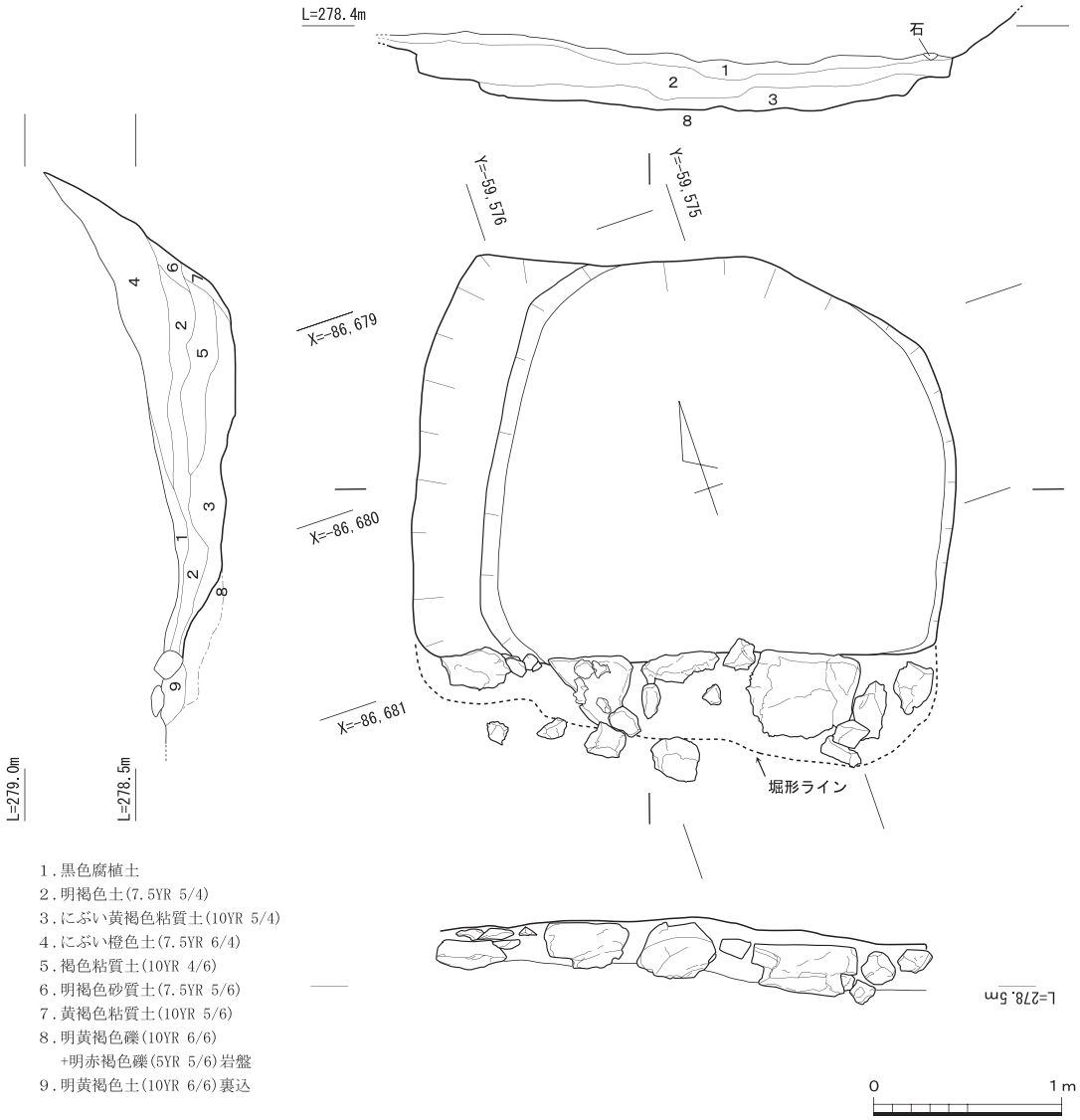


第28図　曲輪２平面図

奥行きのある石が使用されており、これを岩盤を削った平坦面に置いて、背面に裏込土を入れている。積石の石材選択や構築方法という面では、大きな平石を使用するＳＶ16とＳＶ９、長方形の石材を長手積みするＳＶ13とでそれぞれ類似している。（加藤雅士）

礎石建物跡ＳＢ５　総柱建物である。梁間２間で南北４ｍ、桁行４間で東西７ｍの長方形の建物跡である。礎石は10～20cm大のチャートである。扁平な割り石ではなく厚みがあり、立方体に近いものもある。ＳＢ５の南西、ＳＶ15とＳＫ７との間の面は、踏みしめられて堅くなった形跡がある。出入口として頻繁に利用されたか、土間のような作業空間であったかもしれない。建物跡は、曲輪１の斜面裾部から約1.5m、南側縁辺から約3.5m離れているが、曲輪２全体のおよそ４割近くを占めることから、周辺の動きはかなり制約されよう。曲輪１の隅櫓的な建物ＳＢ２とともに眺望は良好である。

石列ＳＶ15　南東側の縁辺部にそって築かれた石積あるいは石塁の残欠とみられる。およそ0.2mの高さに盛り上がり、小規模な土塁状である。礫の多く残存している所の長さは5.3m、幅0.7m、高さ0.3mを測る。径40～50cmの大きな礫も含むが、大部分は10～25cmまでの礫が用いられている。本石塁は曲輪２の縁辺全体に巡らない。６基の竪堀とともに、南方向への防御を強



第29図　石積土坑ＳＫ７実測図

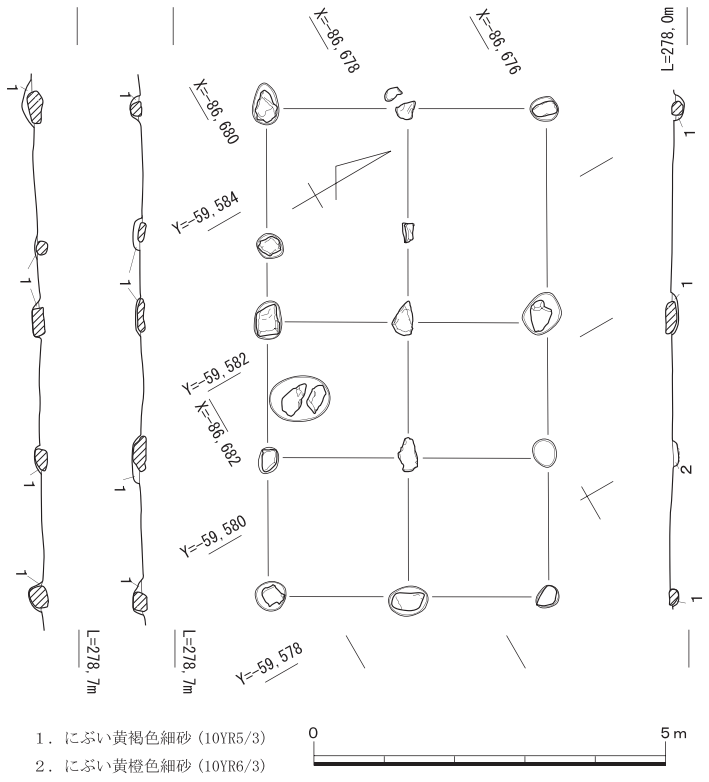
く意識したものといえる。

竪堀群　本山城の防御施設としては、曲輪２の南西側に６条竪堀が並行して集中的に造られている。竪堀１および竪堀２は深く岩盤面を削り、「V」字形の断面形となっている。その他の竪堀は浅く、断面形も「U」字形である。

竪堀１　長さ12m、幅3.2～４m、最大深さ1.5mを測り、「V」字形の断面である。埋土は３層に分かれ、上位から明褐色土、明赤褐色粗礫土、明赤褐色粘質土となる。

竪堀２・竪堀３　２条の竪堀が連続して掘られている。この２条の間は、曲輪１から曲輪２の東斜面と、曲輪２から曲輪６に下る南西切岸との傾斜変換ラインにあたる。竪土塁としての機能を有しているとも考えられ、掘り上げた土砂により隆起させている。竪堀２は長さ11.2m、幅1.6～２m、最大深さ1.2m、断面形状は「V」字形で、底にいくほど幅が極めて狭くなる。竪堀３は長さ18m、幅1.2～２m、最大深さ0.6mを測る。断面形状は「U」字形である。

竪堀４～６　竪堀４は、竪堀３より４m東に掘られた小規模な竪堀である。長さ11m、幅0.8



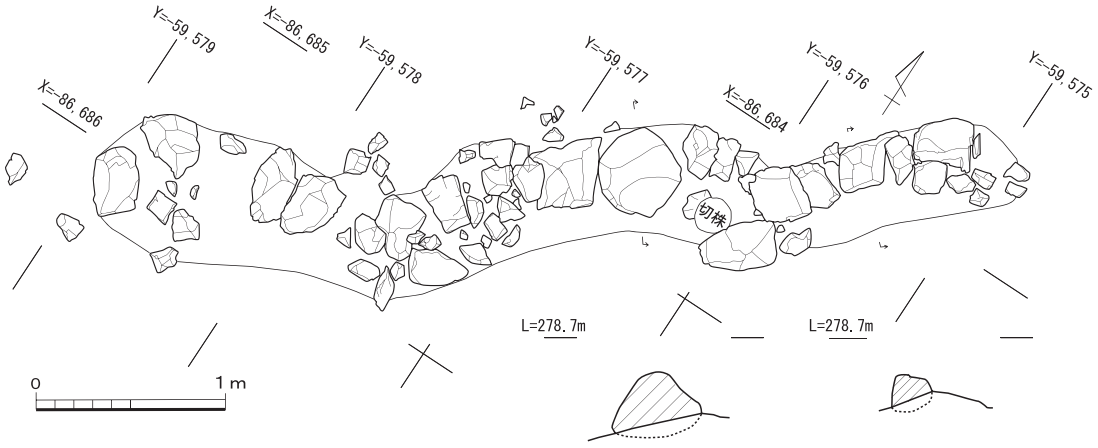
第30図　礎石建物跡ＳＢ５実測図

～1.1m、最大深さ0.3mの規模である。断面形状は「U」字形である。竪堀５は竪堀４に並行して掘られたもので、長さ13m、幅1.5～２m、深さ0.4mを測り、断面形状は「U」字形である。明褐色粗砂質土の埋土である。竪堀６は曲輪１と曲輪２の中間部から下方斜面に掘られたものである。長さ11m、幅２～2.4m、最大深さ0.6mの規模で、断面形はなだらかな「U」字形である。　（牧田梨津子・黒坪一樹）

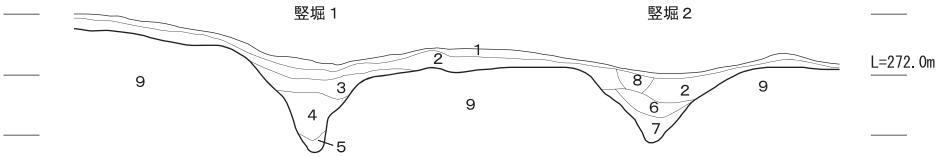
３）曲輪３（第36～38図）

曲輪の形状・規模　曲輪３は、曲輪１の西側切岸から約５m下位に造成されている。曲輪１からの転落とみられる大小の礫が切岸裾ラインに沿って散乱していた。削り取った斜面および平坦面の土砂で西側を面的に大きく拡張させている。縁辺および裾部のラインは直線的で、南北の細長い形である。面積は約222㎡である。南東側に設けられた石積ＳＶ10と、曲輪１の切岸ラインは直角で、曲輪１への虎口部への道の幅を決定しかつ補強している。遺構は石積のほか、礎石建物跡と考えられる礎石、切岸にそって浅く掘られた排水溝、短い石列、さらに北西部コーナーから張り出すように設けられた小曲輪１がある。

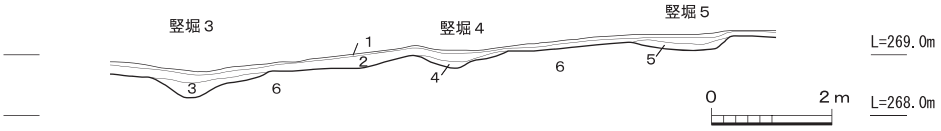
排水溝　曲輪１の切岸ラインに沿って、長さ12m、幅0.2～0.5m、深さ数cm、そして1.2mほ



第31図　石列ＳＶ15実測図

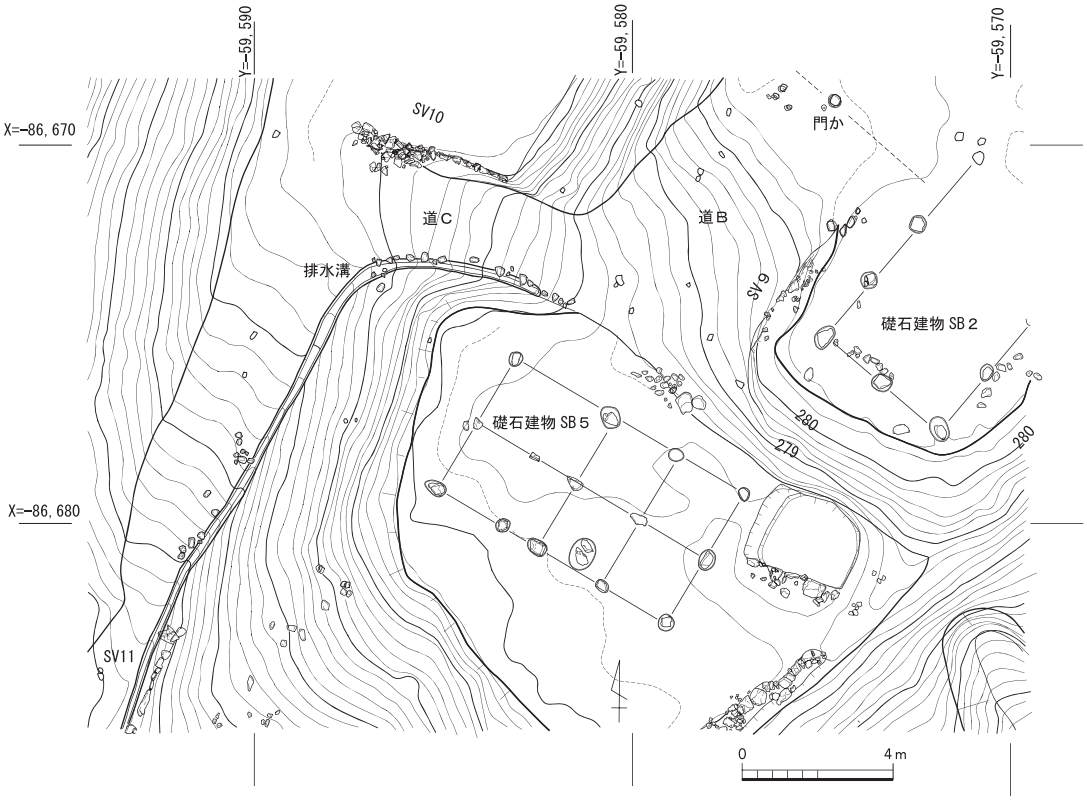


１．表土
２．黄褐色細砂(10YR5/6　粗礫混)
３．明褐色土(7.5YR5/6)
４．明赤褐色粗礫(5YR5/6)
５．明赤褐色粘質土(5YR5/8)
６．明褐色土(7.5YR5/6　粗礫混)
７．明赤褐色土(5YR5/6)
８．にぶい赤褐色土(5YR4/4)根株
９．明赤褐色粗礫(5YR5/6)岩盤



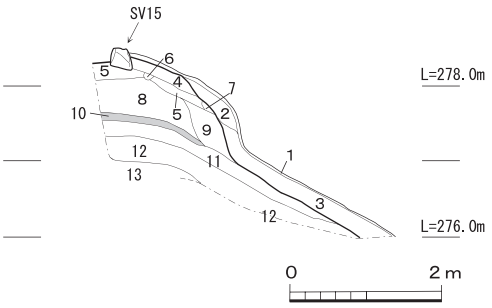
１．表土
２．黄褐色土(10YR5/8　粗砂・礫混)
３．明黄褐色粗砂(10YR6/6　礫混)埋土
４．橙色砂質土(7.5YR6/6)埋土
５．明褐色土(7.5YR6/6　粗砂・礫混)埋土
６．明褐色粗礫(10YR6/8)及び明赤褐色粗礫(5YR5/6)岩盤

第32図　竪堀断面図

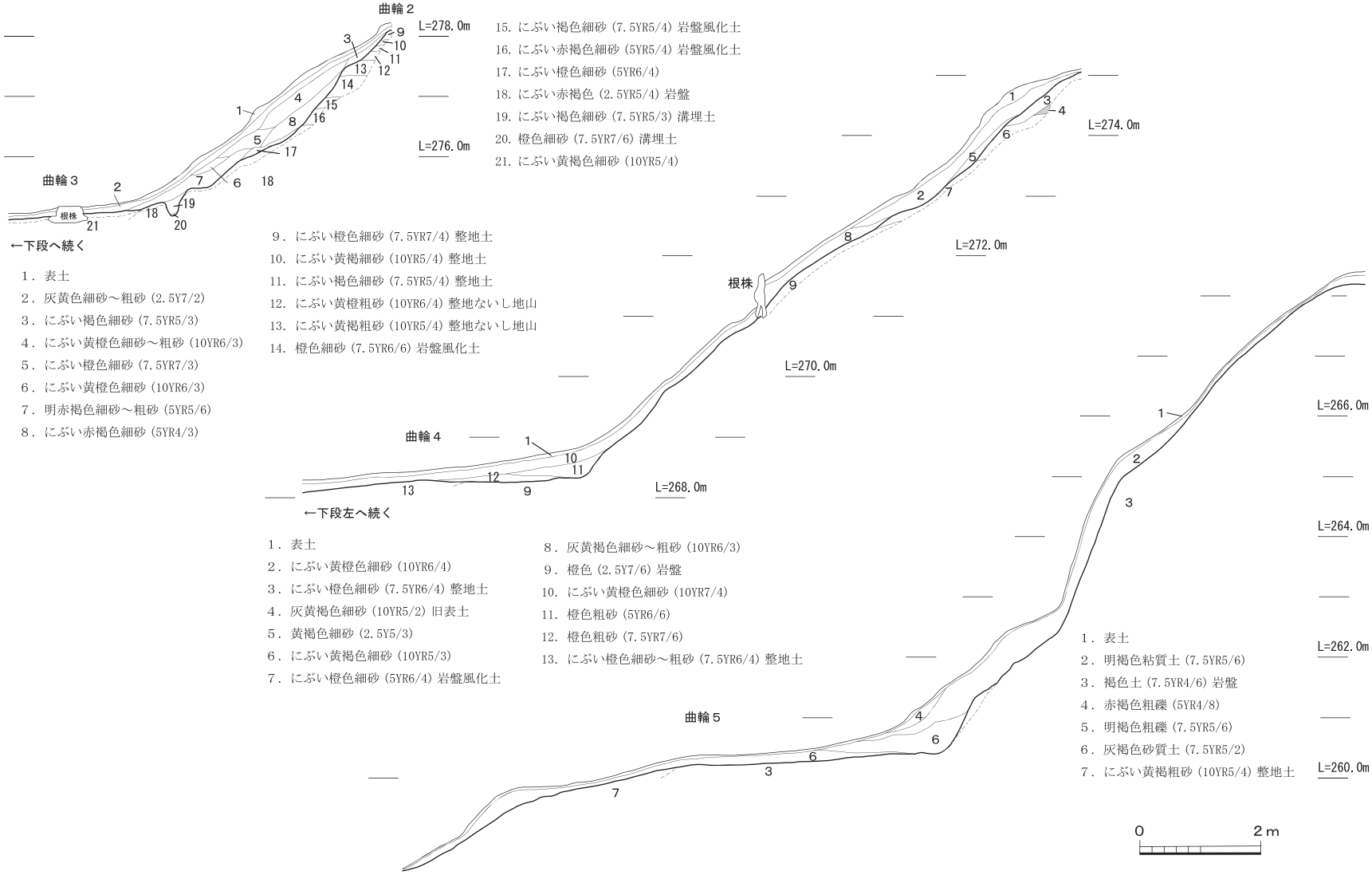


第33図　枡形虎口平面図

１．表土
２．にぶい黄褐色細砂(10YR5/4)
３．褐色細砂(10YR4/4)
４．浅黄色細砂(2.5Y7/4)裏込の役割をする
５．明赤褐色粗砂(5YR5/6)整地土
６．にぶい黄橙色(10YR6/3)整地土中ブロック
７．にぶい橙色粗砂(5YR6/4)５層風化土
８．にぶい赤褐色粗砂(5YR5/3)整地土
９．にぶい橙色細砂(7.5YR6/4)整地土風化土
10．にぶい黄褐色細砂(10YR5/3)旧表土
11．橙色細砂～粗砂(5YR6/6)地山
12．橙色粗砂～礫(2.5YR6/6)岩盤風化土
13．明赤褐色(2.5YR5/6)岩盤



第34図　曲輪２西・東斜面断面図



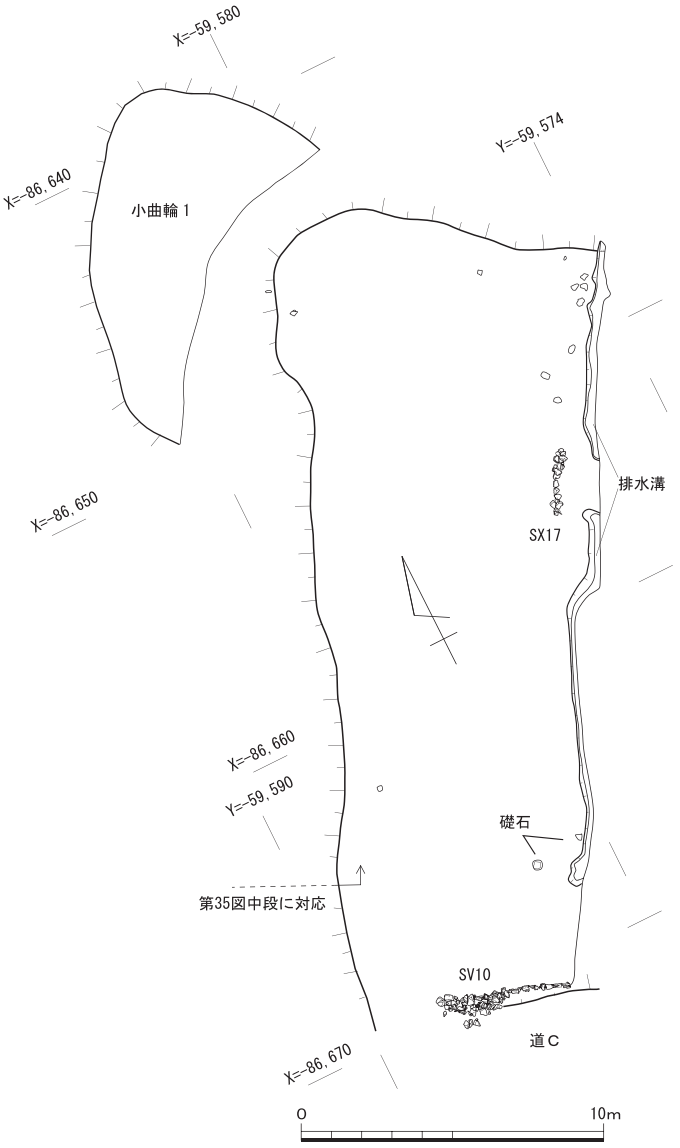
第35図　曲輪２斜面～曲輪４・５断面図

どの断絶をはさみ、さらに長さ7.5m、幅0.2～0.3m、深さ数cmの規模で検出した。

礎石　建物跡を構成していたと見られる礎石が東西を軸に２基確認された。排水溝の南側先端部に近く、石の大きさはともに約20cm四方、厚さ数cmの扁平なものである。掘形の深さは数cmで浅い。

石列ＳＸ17　排水溝の断絶間で、谷側に約１ｍひかえて並行する石列である。長さ20cm前後、厚さ数cmを測る礫が長さ約2.2m、幅0.4mで集積している。排水溝とともに何らかの機能を果たしていたものと考える。集礫内から遺物の出土はみられなかった。

小曲輪１　北西方向に張り出すように造成され、張り出し4.5m、南北6.5mのほぼ半円形である。本来、南西方向に曲輪４を見渡せる位置にある。斜面を下ると、曲輪４の岩盤削り出しによる切岸となり、連繋する道などの遺構はない。



第36図　曲輪３平面図

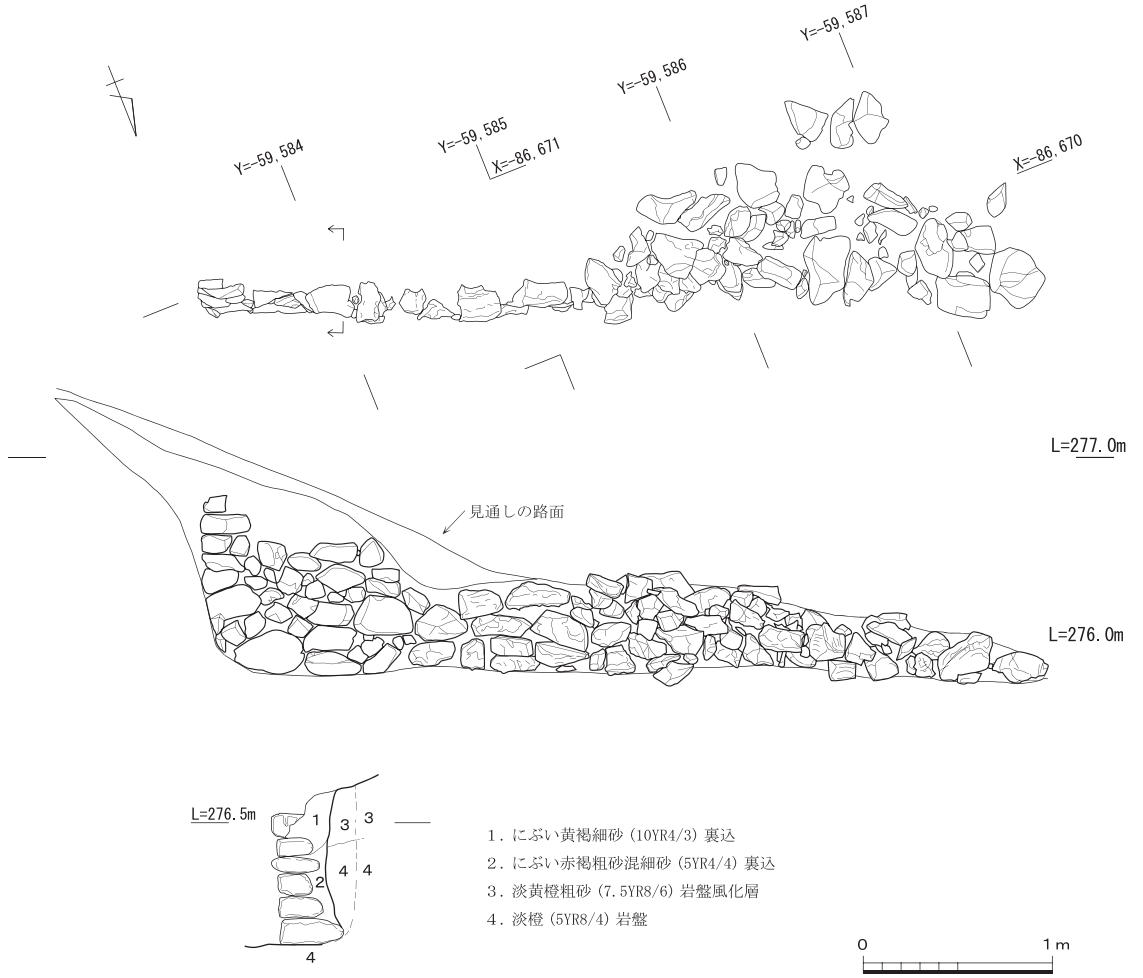
４）曲輪４（第39・40図）

曲輪の形状・規模　曲輪３の西側切岸から3.5m下位に設けられた平坦面である。切岸部は岩盤まで完全に削り込まれており、特に小曲輪を含めた張り出しと切岸裾は、直角のクランク状に画されている。形状は南側が細長い長方形、北側は地すべりによる３つの段差とともに細長い翼形の張り出し（小曲輪２）をもつ。面積は約202㎡である。

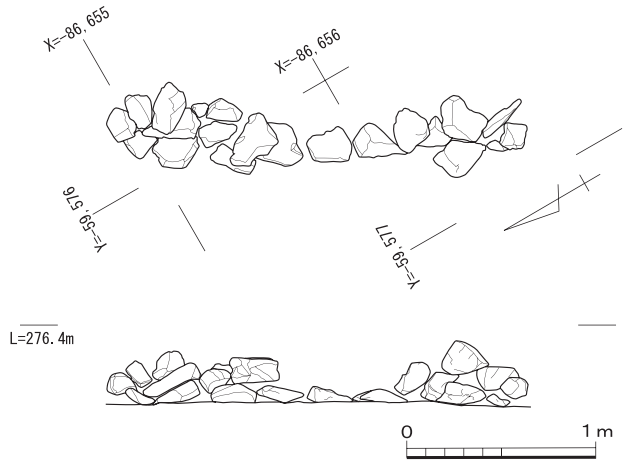
遺構は、礎石建物跡の可能性もある礎石、北側の切岸との裾部に集石列、不整楕円形土坑、切岸に沿って断続的に設けられた排水溝がある。

石列ＳＸ24　北西側の段上、切岸裾部に沿って並ぶ集石列である。長さ６ｍ、幅0.35mである。集石の大きさは拳大から人頭大のものまである。集石除去後に下部から幅0.4m、深さ0.05mの溝状遺構を検出した。

礎石　切岸中間よりやや南の裾部で、２基の礎石を検出した。２基の間隔は２ｍである。とも



第37図　石積ＳＶ10実測図



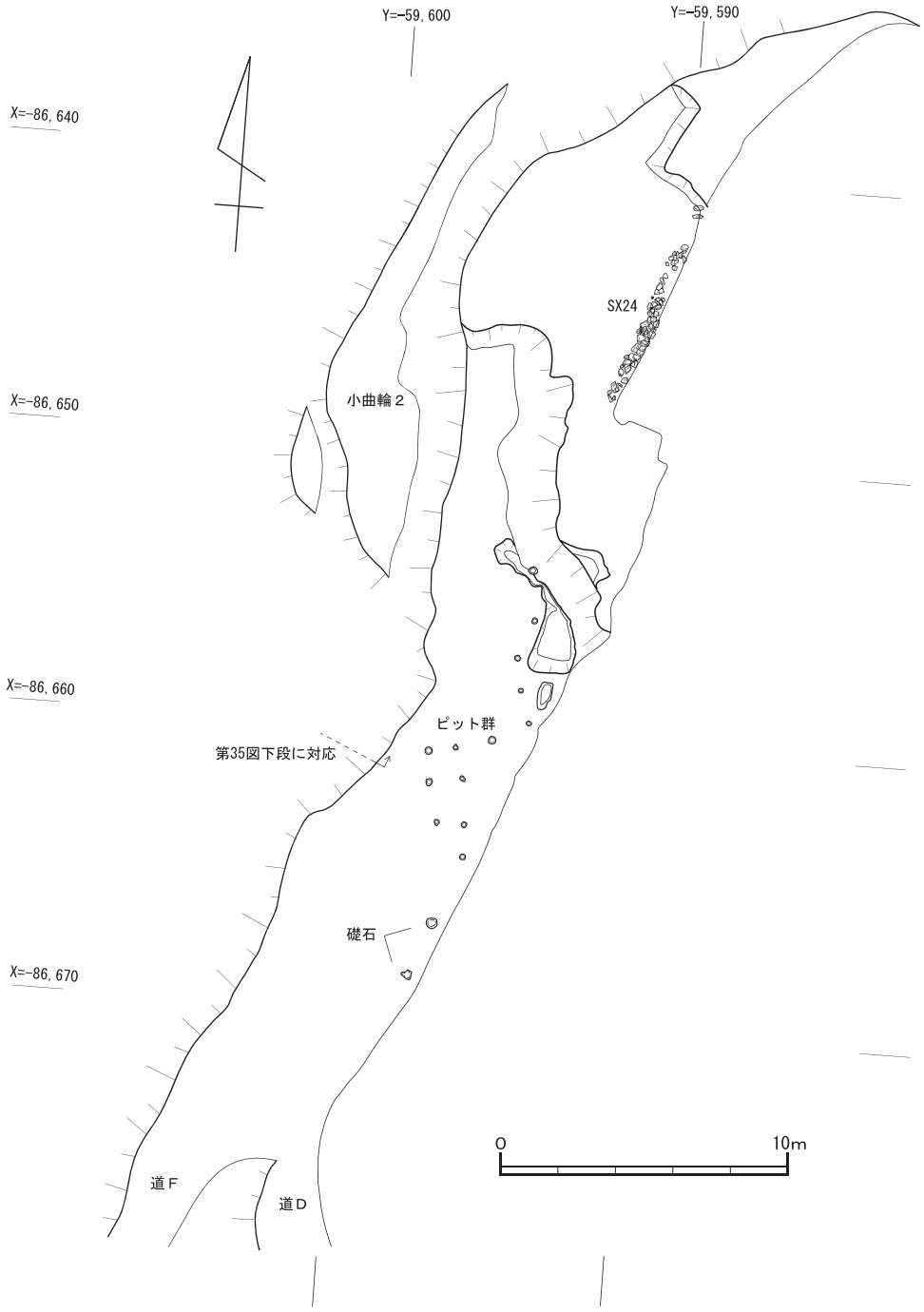
第38図　石列ＳＸ17実測図

に長さ25～35cm、幅20～25cm、厚さ10cmの石で、据えるために約数cm掘り込んでいる。建物を構成していたと考えられるが、復元はできない。

柱穴　直径15～20cm、深さ10～25cmの比較的小規模なピットを14基検出した。埋土は黄褐色砂質土や粘質土である。遺物の出土はみられなかった。掘立柱建物跡の復元はできなかった。

排水溝　北側の段差に沿って浅く掘られた溝である。長さ３ｍ、幅0.3～0.7mである。南端は、1.5×２ｍの土坑状に広がっている。

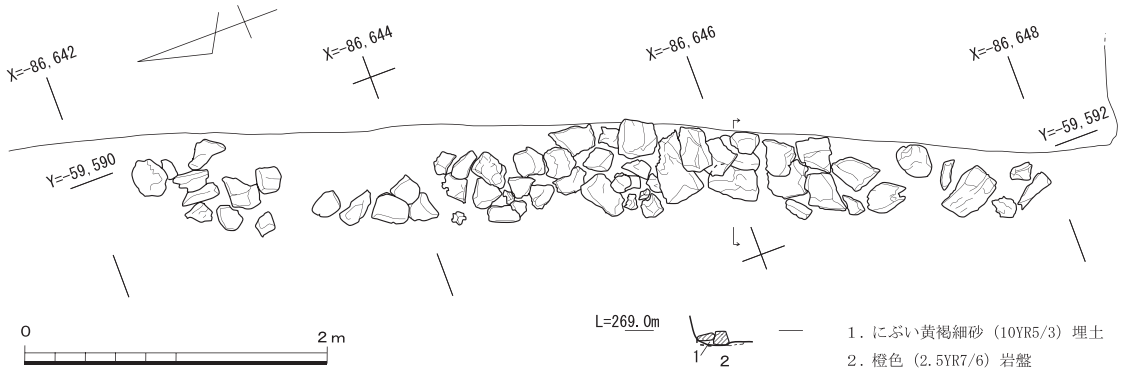
小曲輪２　北西部から曲輪５の北側へ下る斜面に造られた細長い平坦面である。南北18m、東西４ｍ、幅は１～４ｍで北に向かって狭くなっている。地すべりによる段差により生じた可能性もあるが、西側に大きく張り出しているため、曲輪５を横方向に見下ろすことができる。



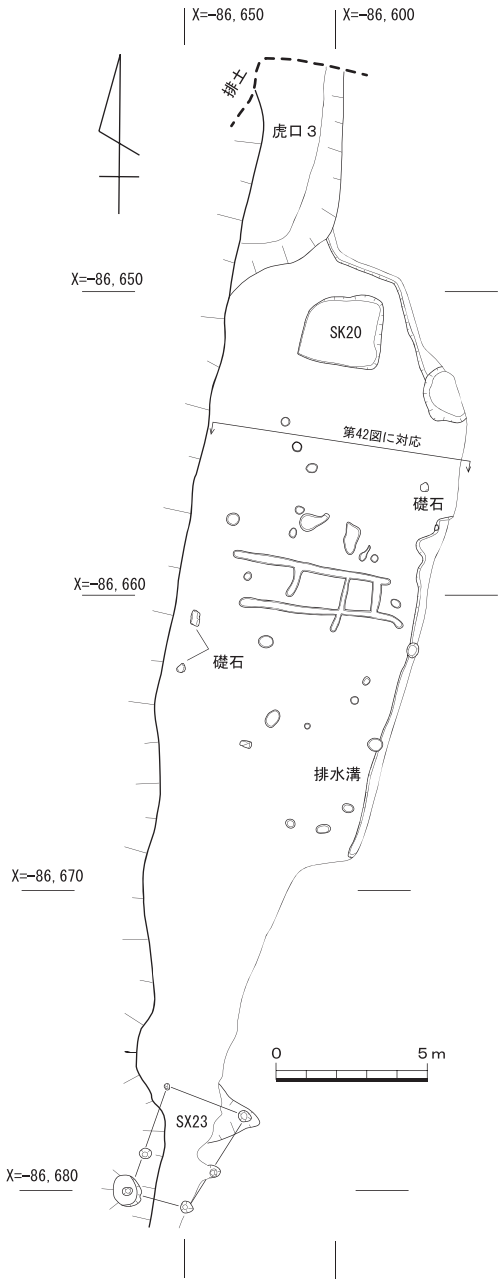
第39図　曲輪４平面図

５）曲輪５（第41 ～ 44図）

曲輪の形状・規模　北西側で最下部に位置する南北に細長い曲輪である。面積は約161㎡である。曲輪４との間の切岸は地山面まで完全に削りだされ、急峻な斜面となっている。調査前より、曲輪北側に大きく二つのマウンド状の高まりがあった。掘削の結果、上位の曲輪４の切岸部の岩盤層が表土および埋没土とともに崩落し、平坦部に積み重なっていた。これらの崩落土を除去し、地山面での精査をした結果、溝、柱穴、礎石などの遺構を検出した。



第40図　石列ＳＸ24実測図



第41図　曲輪５平面図

溝　幅20～30cm、深さ５cmほどの溝が１mの間隔をあけ、２条検出された。それに３本の溝（幅0.15～0.25m、深さ0.02～0.03m）が短く直角に交わり、区画された痕跡をとどめている。遺物の出土はみられない。

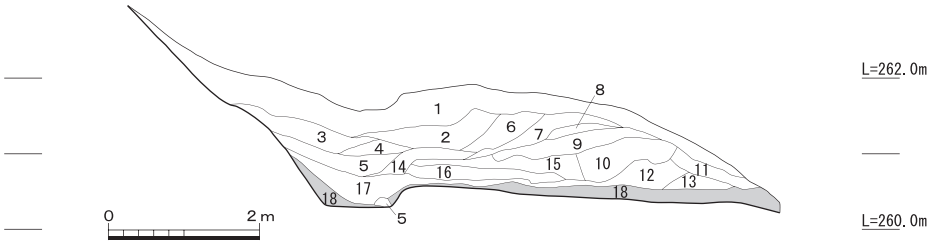
柱穴　直径0.15～0.4m、深さ0.1m前後を測る小規模な柱穴を、曲輪中間部に合計20基検出した。中から遺物の出土はみられなかった。山城の施設に関係するものか不明である。

礎石　曲輪中間部の縁辺部に沿って、礎石が並んでいる。対応するものが切岸裾部に沿って、また中間部にも一石、同様の礎石を検出した。断片的ながら、梁間２間、桁行３間の礎石建物跡の存在が想定される。

柱穴列ＳＸ23　曲輪の南端の出入口にあたる箇所に、直径約0.25m、深さ約0.25mを測るしっかりとした掘形をもつ柱穴を６基検出した。１mの間隔で並んでおり、門の可能性がある。

土坑ＳＫ20　虎口の東側の、角度をつけて掘削・整形された切岸の裾部に寄って、2.3×2.5mの方形に掘られた浅い土坑である。深さは約0.1mを測る。中から遺物は出土しなかった。　（黒坪一樹）

虎口３　曲輪５の北端で方形の落ち込みを確認した。曲輪５の平坦面との比高は0.7mで、曲輪５の北端から落ち込みに対して、長さ１m、幅２mの傾斜面を作っている。断ち割りによると、この



1．明黄褐色土（10YR6/6）
2．明褐色土（7.5YR5/6）
3．橙色粘質土（7.5YR6/8）
4．にぶい褐色土（7.5YR5/4）
5．明褐色土（7.5YR5/8）
6．褐色土（7.5YR4/6）
7．褐色土（10YR4/6）
8．褐色土（10YR4/4）
9．橙色土（7.5YR6/6）
10．橙色細礫混じり土（7.5YR6/8　地山由来）と灰白色粘土（2.5Y8/2）
11．にぶい黄橙色土（10YR6/4）
12．明黄褐色粘質土（10YR6/8）と灰白色粘土（10YR7/1）が混在
13．明黄褐色粘質土（10YR7/1）
14．褐色土（7.5YR4/4）
15．にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3）
16．明褐色粘質土（7.5YR5/6）
17．明黄褐色粘質土（10YR7/6）（灰白色粘土塊含む（10YR7/1））
18．褐色粘質土（10YR4/4　暗い色調で有機化）旧表土

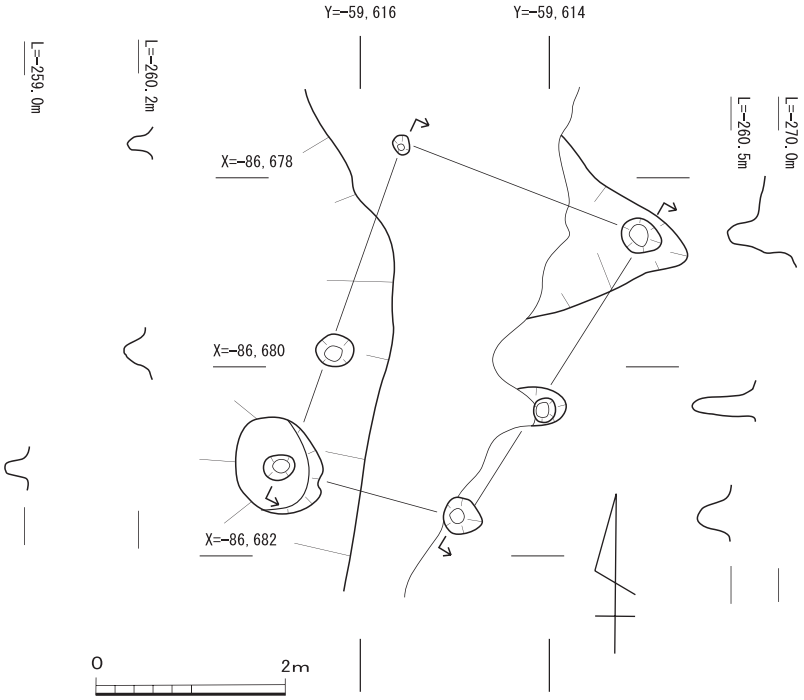
第42図　曲輪５崩落土堆積状況

傾斜面は厚さ20cm程度の土を版築状に土を積んでつくっている。落ち込みの東斜面は、曲輪４から続く岩盤を削った斜面があり、これが西の谷方向まで続いている。落ち込みの北の状況は排土のため不明な点もあるが、①整地によって意図的な斜面を作っていること、②谷部にむけて岩盤を削った斜面が続くこと、③曲輪５の東下方に平坦面が存在していることの上記３点から、この落ち込みは虎口と考えられ、東下方の平坦面へ続く道の存在が想定される。　（加藤雅士）

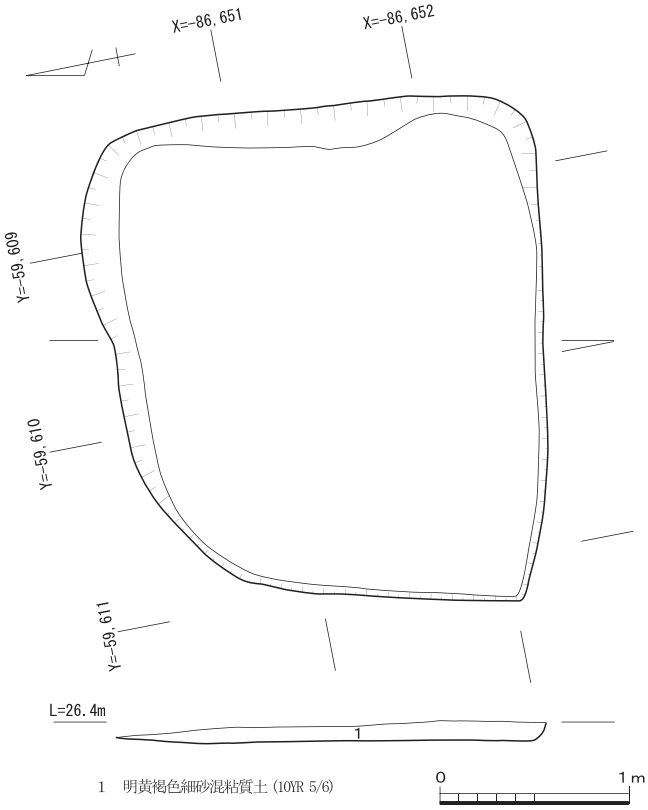
６）曲輪６（第45～49図）

曲輪の形状・規模　山城南西部の半円形に造り出された曲輪で、北西部は大量の土砂により斜面を埋め立て、約238㎡の広さの平坦面を形成している。曲輪の中間部に南東から北西方向に走る地滑りにより、約0.1～0.2mの段差が生じている。検出された遺構は、礎石列、柱穴群、楕円形土坑２基である。

土坑ＳＫ18　幅広楕円形で、長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は２層にわかれ、上から橙褐色粘質土、明褐色粘質土である。上層内から、厚みのある20cmほどの礫数点とともに石製の阿弥陀仏像



第43図　柱穴列ＳＸ23実測図



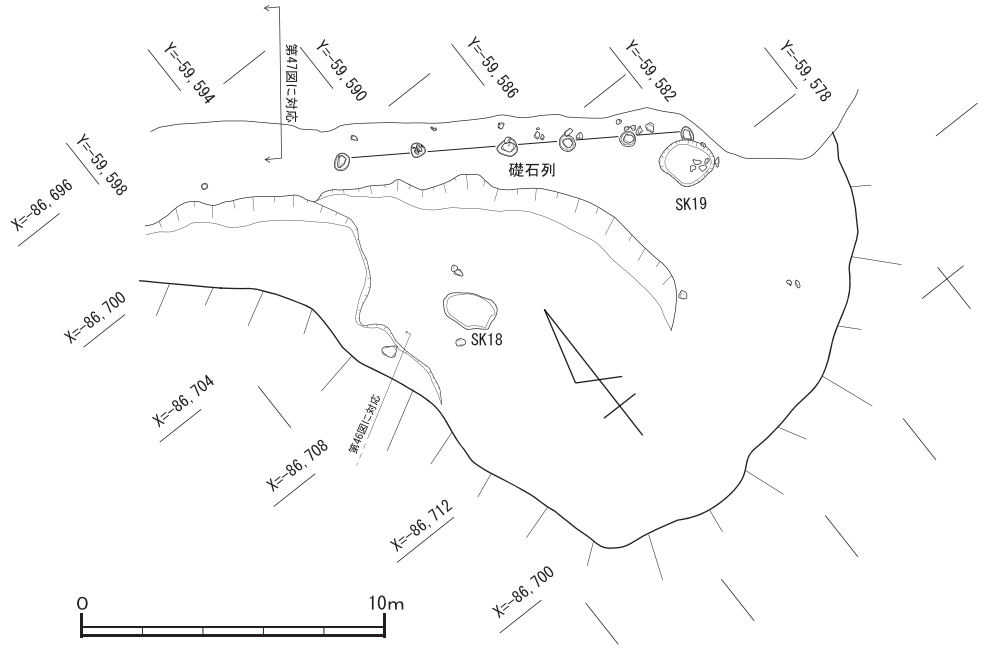
第44図　土坑ＳＫ20実測図

が表面を下にして出土した。石仏は礫とともに投棄されたものか、この場に供えられたものか、不明である。

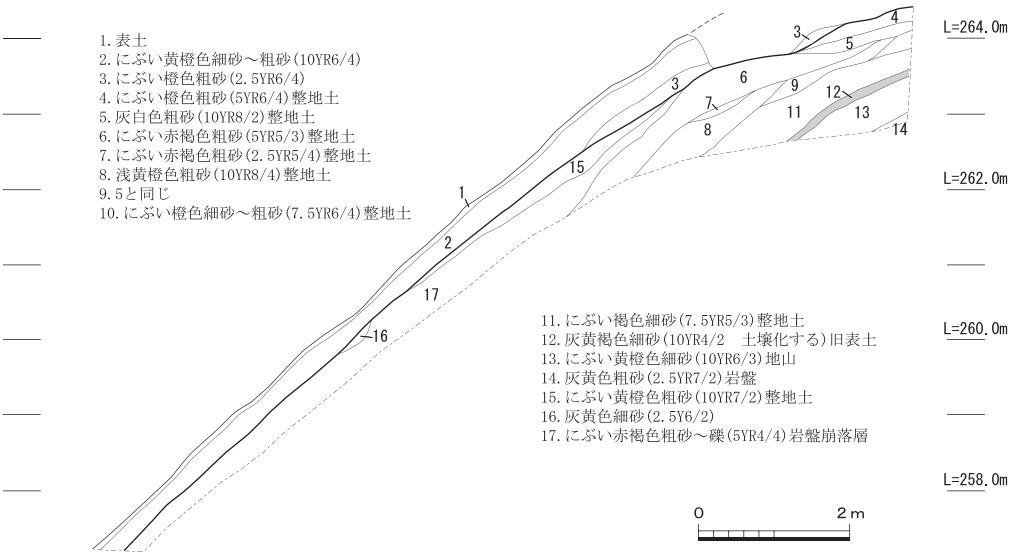
土坑ＳＫ19　やや不整形な楕円形土坑である。直径1.5m×1.8m、深さ約0.15mを測る。出土遺物はなく、性格不明である。

礎石列　切岸の裾部に沿って、長さ30～40cm、幅約25cm、厚さ15～20cmの扁平なチャート礫を用いた礎石５点が一直線に並ぶ。掘形の深さは10～15cmである。掘形間寸法は揃ってはいない。北から2.6m、３m、２m、２m、2.9mを測る。この礎石列の部分を残し、これらに並行するように、約0.1～0.2mの地すべりによる段差が発生している。そのためもあって、これらに対応して礎石建物を構成していた礎石は消失してしまったと推定される。縁辺部にも１か所、大型の扁平礫をもつピットを検出していることから、建物が存在していた可能性は高い。建物とすれば、梁間または桁行４間の規模でかなり大きなものとなる。

ピット　礎石列と同一レベルで、北西方向に広がった面で検出した。直径0.18m、深さ0.2mの



第45図　曲輪６平面図



第46図　曲輪６西斜面断面図

ものと、直径0.25m、深さ0.1mのものである。ともに埋土は黄褐色砂質土である。このピットは、曲輪４へ続く道Ｅのピット列と関連するものと考えられる。

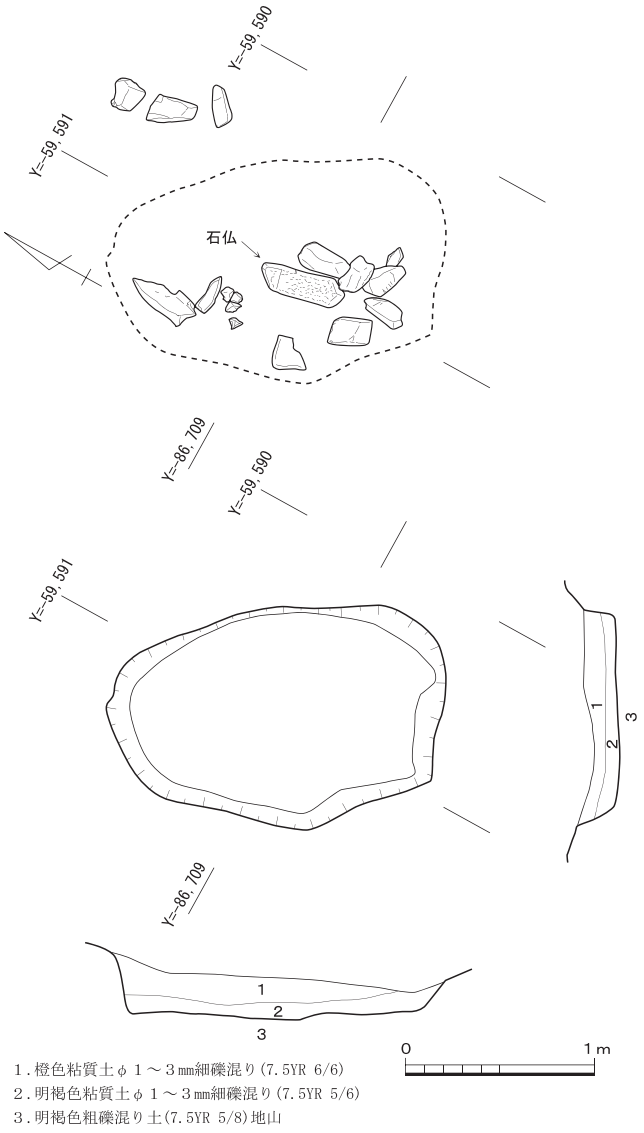
（黒坪一樹）

７）道（第50～55図）

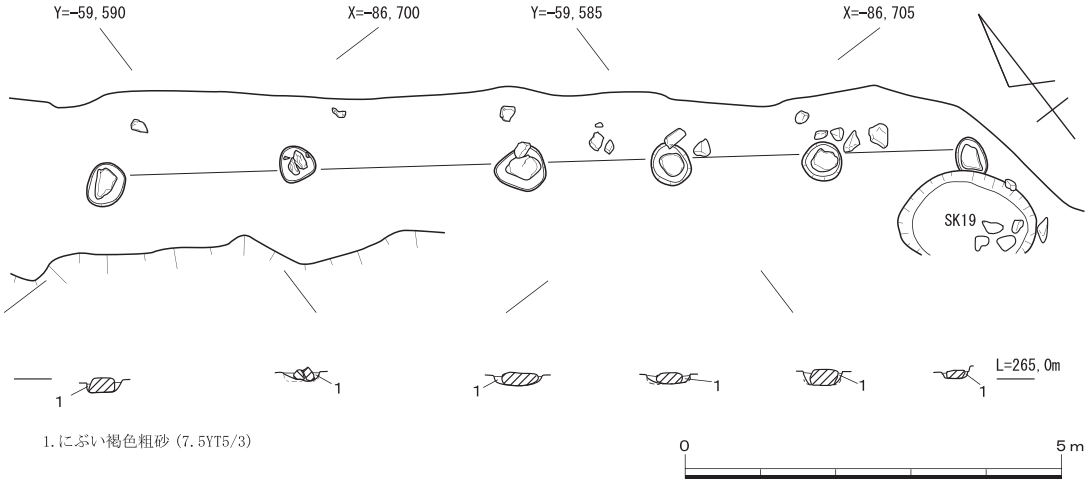
道Ｄ（曲輪３－４間）　曲輪３の南から北にのびた後、西に直角に折れて曲輪４の南にいたる道である。道両端の比高は約７mあり、曲輪３と屈曲部の比高は約３mである。屈曲部には石積ＳＶ11がつくられる。曲輪３から屈曲にかけての道幅は1.4～2.5mで、虎口部分からの排水溝が南斜面まで続いている。

屈曲部から曲輪４にかけての道幅は2.5～3m。傾斜度はいずれも12～13°である。道の平坦面は、山寄りの岩盤を削り、谷寄りは整地を行ってつくり出している。

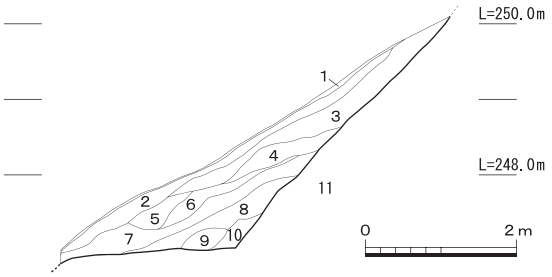
石積ＳＶ11　曲輪３－４間の屈曲部において、曲輪２からの斜面裾に築かれる石積である。確認した長さ3.2m、高さ0.3m。使用石材は、長さ80cmのものが１



第47図　土坑ＳＫ18実測図



第48図　礎石列実測図

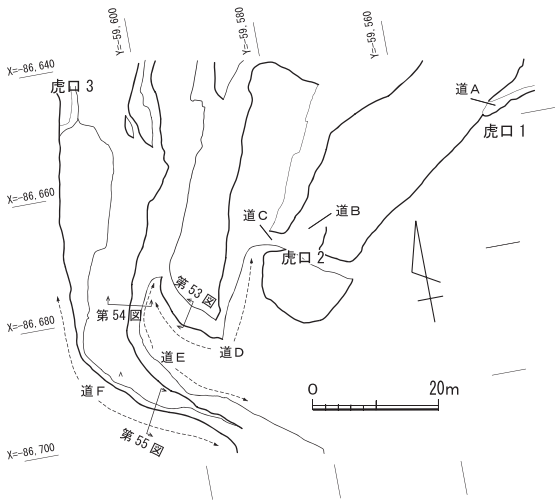


1．表土
2．黄褐色細砂質土（10YR5/6）
3．明赤褐色砂礫（5YR5/6）
4．橙色砂礫（5YR6/6　地山由来の灰白色粘質土塊を全体に含む）
5．明赤褐色粗礫（5YR5/6　φ1～10cmの礫を含む）
6．明赤褐色粘質土（5YR5/8　粗礫を疎らに含む）
7．明褐色粗砂礫（7.5YR5/6　φ1～5cm大の礫を多く含む）
8．明褐色粗砂礫（7.5YR5/8　φ1～5cm大の礫を多く含む）
9．明赤褐色粗礫（5YR5/8）
10．明褐色細砂（5YR5/8）
11．にぶい赤褐色（2.5YR5/4）岩盤

第49図　切岸の堆積状況図

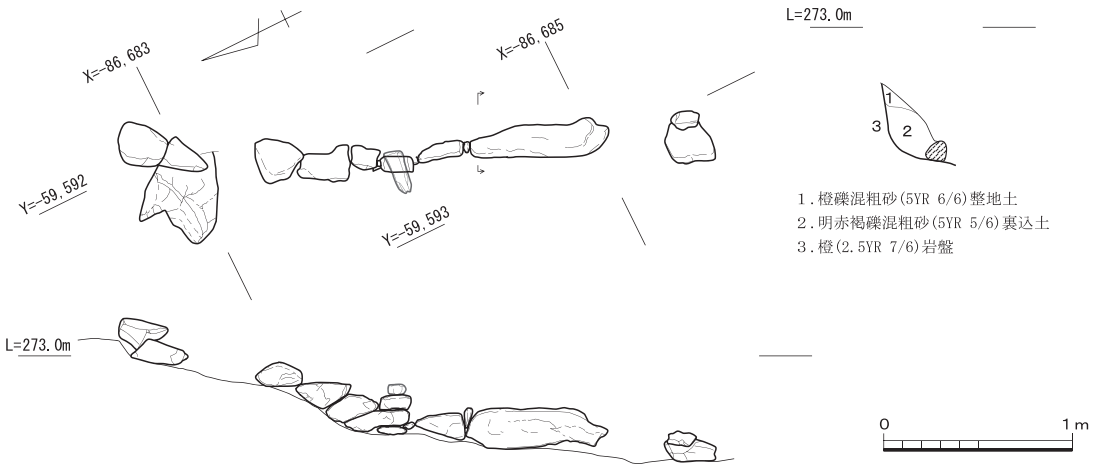
点あるものの、長さ30cm・幅20cm・厚さ10cm程度の角柱状をした亜角礫が主として使われ、面をあわせて石を積んでいる。この石材の選択はＳＶ10と類似している。構造は、曲輪２からの斜面裾をほぼ直角に削り、石を直接岩盤上に置いた後、背面に土を入れている。

基底部の１・２段を確認したのみであるが、周囲に散乱していた石の状況や、曲輪２の斜面が上方にのびていることから、本来はさらに数段の石をかさねていたとみられる。また、ＳＶ11と竪堀間の尾根状の部分には、人頭大の石が多く認められ、この尾根上に小規模な施設が存在した可能性がある。ＳＶ11はその斜面裾を保護する目的でつくられたと考えられる。



第50図　城内経路図

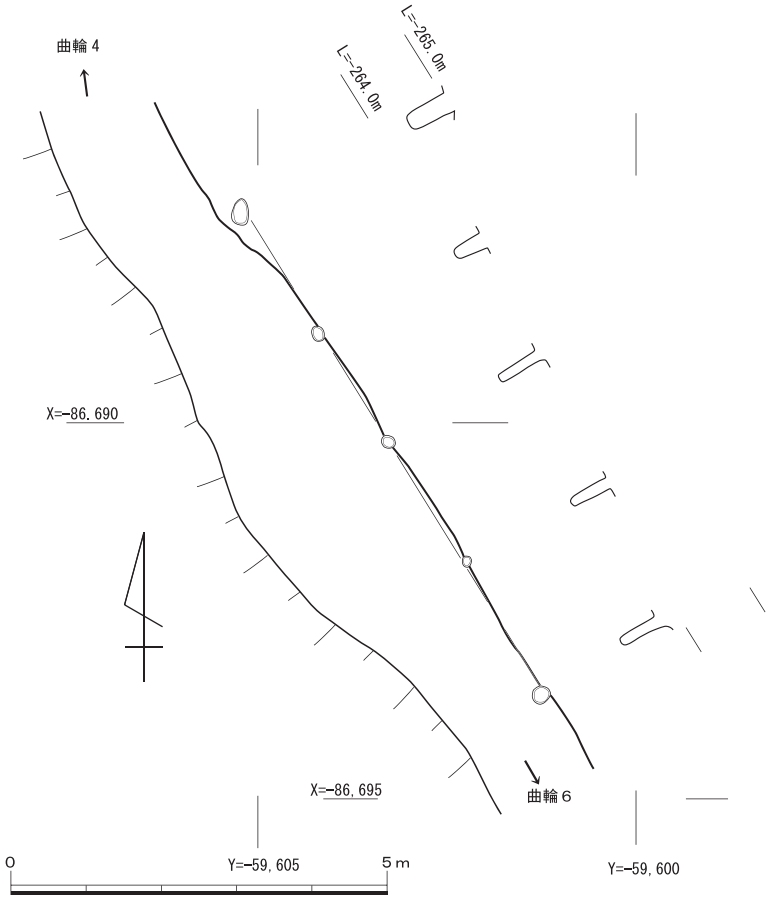
道Ｅ（曲輪４－６間）　曲輪４の南と曲輪６の北西部を緩やかなカーブでつなぐ道である。道の両端の比高は約４mで、傾斜度は道の北半部で15°程度、南半部では10°程度と緩やかになっている。道幅は２～2.5mで、やはり山寄りの岩盤を削り、谷寄りを整地している。しかし、道の平坦面は、虎口部の斜面や道Ｄの



第51図　石積ＳＶ11実測図

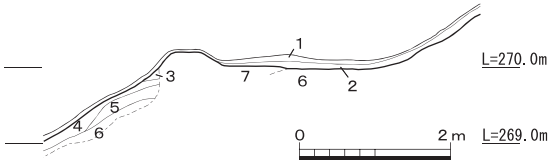
ように水平に近いものをしっかりつくるのではなく、谷側に向かって10°程度傾斜している。

柵列ＳＡ21　道の南半から曲輪６の北西隅において、斜面裾に10基のピットを確認している。このうち５基のピットはほぼ直線的に規則正しく並んでいて、柱穴列と考えられる。堀形は0.2mの円形で、深さは0.6m程度のものが多い。柱の通りはほぼ直線だが、間隔は1.7～2.0mとばらつきがある。道の谷側にはピットが認められないことから、山寄りの斜面上の施設や土留めのような性格が考えられる。



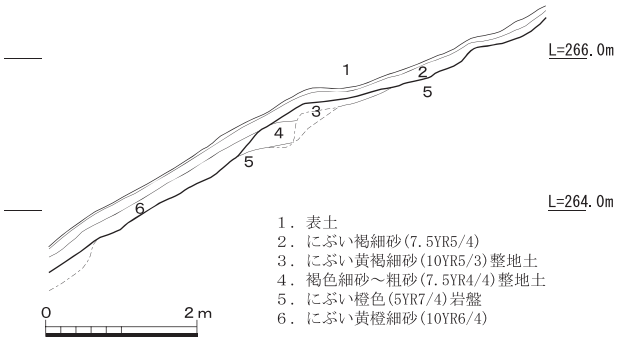
第52図　柵列ＳＡ21実測図

道Ｆ（曲輪５－６間）　曲輪５の南から緩やかに屈曲して、曲輪６の北西部へ通じる道である。道の両端の比高差は約４mであるが、屈曲部が最も低い位置にある。屈曲部との比高差は曲輪５の南とで１m、曲輪６の北西部とでは５mあり、それぞれ15°の傾斜度で上り下りする。道のうち、曲輪５から屈曲部までの部分は、山寄りの岩盤を削ってはいるが谷寄りの整地土はわずかである



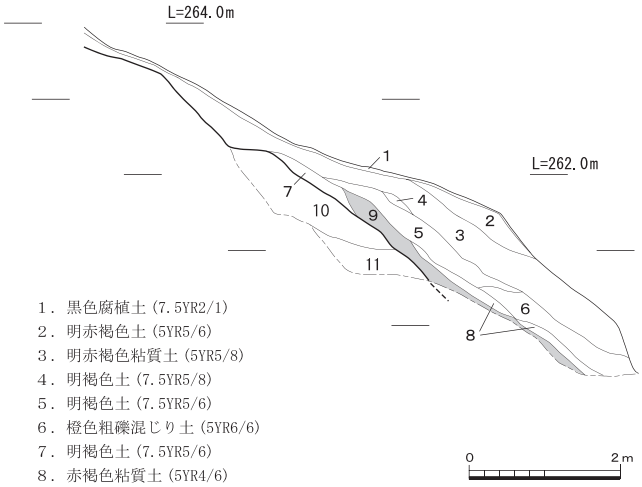
1．表土
2．にぶい褐色細砂(7.5YR6/3)
3．にぶい褐色細砂(7.5Y7/5)整地土
4．にぶい黄褐色細砂(10YR5/4)整地土
5．黄褐色細砂(2.5Y5/4)整地土
6．橙色細砂～粗砂(7.5Y6/6)岩盤および岩盤風化土
7．橙色細砂(5YR6/6)整地土

第53図　道Ｄ断面図



1．表土
2．にぶい褐細砂(7.5YR5/4)
3．にぶい黄褐細砂(10YR5/3)整地土
4．褐色細砂～粗砂(7.5YR4/4)整地土
5．にぶい橙色(5YR7/4)岩盤
6．にぶい黄橙細砂(10YR6/4)

第54図　道Ｅ断面図



1．黒色腐植土(7.5YR2/1)
2．明赤褐色土(5YR5/6)
3．明赤褐色粘質土(5YR5/8)
4．明褐色土(7.5YR5/8)
5．明褐色土(7.5YR5/6)
6．橙色粗礫混じり土(5YR6/6)
7．明褐色土(7.5YR5/6)
8．赤褐色粘質土(5YR4/6)
9．暗赤褐色土(5YR3/4)旧表土
10．明赤褐色粘質土(5YR5/6)地山
11．赤褐色粗細礫混じり土(5YR4/8)岩盤

第55図　道Ｆ断面図

ため、道の平坦面は幅１ｍであり、0.3m程度ある谷寄りの緩斜面をあわせても狭い。

屈曲部から曲輪６までの部分は、山寄りの岩盤を削っているのみで整地しない。道幅は１ｍである。この部分の断ち割りで、道の南西斜面には堆積土に覆われた厚さ20cmの旧表土層が存在することを確認した。この旧表土層は道面上にはないことから、城を築く以前の山地に堆積していた旧表土と考えられる。調査時に道としていた、調査区外の平坦面から曲輪６に続く道についても、断ち割りによって断面の確認を行った。道Ｆから続く斜面に、堆積土が積もっているのみで、岩盤の削り出し等は認められなかった。よって、この道は城の機能時には存在しなかったと考えられる。　（加藤雅士）

８）Ａ・Ｂ・Ｃ地区の調査（第10図）

本調査地区の位置は、山城跡の北西側、主要施設部からは離れた山塊の裾部にあたっている。標高は230から235m前後を測る。設定した調査区は、斜面地のなかに形成されたＡ地区およびＢ地区、そして大小の平坦面が階段状になっているＣ地区の３か所である。

Ａ地区（10㎡）　曲輪状の平坦面（約100㎡）の範囲に、工事用道路建設ライン内の10㎡を掘削した。表土である黒色腐植土より下位は黄褐土が厚さ約30cmで堆積していた。黄褐色土の中には上位の岩盤がくずれた大小の礫も含まれているとわかった。そして、黄褐色土の堆積が水平になっていることで、本地区は、曲輪５の北西虎口に向かうための前哨となる小曲輪である可能性がでてきた。調査範囲外の部分を含めると、およそ100㎡の広さとなる。山城に関する遺物は出土していないが、このようなまとまった面積（約100㎡）の平坦面がこの地点に設けられている点は

重要である。三ノ宮東城跡のひとつの曲輪とみなしたい。

Ｂ地区（15㎡）　ほとんど丘陵裾に近い斜面部にみられた幅2.5m、長さ20mほどの狭い平坦面である。幅２ｍ、長さ８ｍの調査区を設けて掘削した。表土の黒褐色腐植土を除去すると、淡褐色土が約15cmの厚さでみられ、これより下位は岩盤面となった。30 ～ 40cm大の石の集積を２か所確認したが、表土の黒褐色腐植土中のもので、掘り込みなどはなかった。近現代の植林作業などにともなう礫の集積とみられる。

Ｃ－１地区（10㎡）　段差のある平坦部に設定した細長いトレンチである。畑地に利用されていた淡褐色土の堆積があり、地山面まで約20cm掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

Ｃ－２地区（12㎡）　表土である黒色腐植土直下の地山面（暗黄褐色砂礫）で、直径80cm、深さ20cmの円形土坑が１基検出された。15 ～ 30cmの大きさの礫が20個ほど混入していた。土器などの出土はみられず、近現代の畑地利用で礫を集積・投棄した土坑であろう。

Ｃ－３地区（10㎡）　Ｃ－１地区から一段上の狭小な平坦部に設けたトレンチである。Ｃ－１地区と同様、畑地耕土の淡褐色土の堆積より下は地山面となり、遺構･遺物は確認できなかった。淡褐色土より石臼や近世陶磁器の破片が若干出土した。

Ｃ－４地区（143㎡）　黒色腐植土の下層は褐色粘質土面となり、この面を精査した結果、円形土坑１基と、直径15 ～ 25cmを測る小土坑数基を検出した。円形土坑、小土坑とも明赤褐色の焼土が周囲に見られ、被熱している。円形土坑は直径0.6m、深さ0.15mで、その上面から石臼および近世陶磁器などが出土した。検出面では、江戸時代の陶磁器類の破片が出土しているが、平安時代とみられる須恵器片や中世の中国製磁器の破片も若干みられる。

ここでの調査成果は、Ａ地区が山城に関する部分である可能性が判明したこと、Ｃ地区から近世の土坑や陶磁器類の出土を確認したことである。　（黒坪一樹）

５．出土遺物（第56～60図）

三ノ宮東城跡の調査では、中世後半期の陶磁器や金属製品、石製品などが出土したが、多数を占めるのは中国製磁器である。中国製磁器では、青花磁器が多い。さらに、中国産の白磁や青磁が含まれる。国産のものとしては、丹波産の甕や擂鉢が含まれる。ほかに、瀬戸美濃や信楽などの製品が含まれる。特に、信楽産の緒桶とみられる鉢が含まれるのが注目される。土器では、土師器皿や瓦質擂鉢などが含まれる。金属製品では、銅製品と鉄製品がある。銅製品には、甲冑金具や刀装具、銭貨などが含まれる。鉄製品では、建築の飾金具や釘などのほか、用途不明なものもある。石製品では、硯や砥石、石仏がある。今回の調査では、以上のような遺物が、整理用コンテナ15箱出土した。なお、斜面から出土した遺物は、その上部の曲輪に属するものと見做した。また、中国製磁器の分類は、貿易陶磁研究会発行の『貿易陶磁研究』第２号（1982）に準じた。

１）陶磁器（第56 ～ 58図）

曲輪１　１～５は中国製白磁椀で、口縁部が外反する。２～５は小椀である。５は復元口径6.5 cmを測る。30は中国製白磁皿で、口縁部が外反する。復元口径17 cmを測る。白磁皿Ｃ群で、

15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。６・７は中国製青磁椀で、外面に線描きの蓮弁文を施す。16世紀前半頃の製品とみられる。７は復元口径12.8cmを測る。

８～27は中国製青花磁器椀である。口縁部が外反しない「蓮子椀」系の椀で、青花磁器椀Ｃ群である。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。９・10は体部に芭蕉葉文、口縁部に波濤文を描く。10は復元口径14.8cmを測る。12・13・25～27は略した細かい唐草文を描く。13は復元口径13.8cmを測る。14・15は唐草文を描く。14は復元口径11.7cmを測る。11・20～23は口縁部に呉須で線引きし体部に線描きの花文を施す。11は復元口径11.8cmを測る。17は底部が高台内に窪み、見込みに略した梅月文を描く。高台径5.8cmを測る。18・19は小椀である。18は復元口径5.9cmを測る。28・29は中国製青花磁器皿である。

31は瀬戸美濃産の天目椀の底部である。高台は浅い輪状で、径4.6cmを測る。32は信楽産の鉢で、小振りであるが緒桶とみられる。筒状の器形で、口縁端部が外反する。このような器形のものは、水指として使用されることがあり、「鬼桶」とも称される。この鉢も茶道具として使用された可能性がある。復元口径15.9cm、器高12.7cmを測る。65は丹波産の大形の甕である。口縁端部には沈線が巡り玉縁状になる。肩部にはヘラ描きがあるが、何が描かれているのかは不明である。復元口径59.4cm、復元胴部最大径84cm、復元底部径21cm、器高93cmを測る。

33は京都系の土師器皿である。平坦気味の底部から口縁部が斜め上方に立ち上がる。復元口径12cm、器高1.9cmを測る。16世紀中葉頃のものとみられる。34～46は在地系の土師器皿である。口縁部と底部の境が明瞭でなく、丸く立ち上がる。内面がハケ目調整されるものがある。34は口径11.8cm、器高2.3cmを測る。47は瓦質の小壺である。復元口径8.4cmを測る。

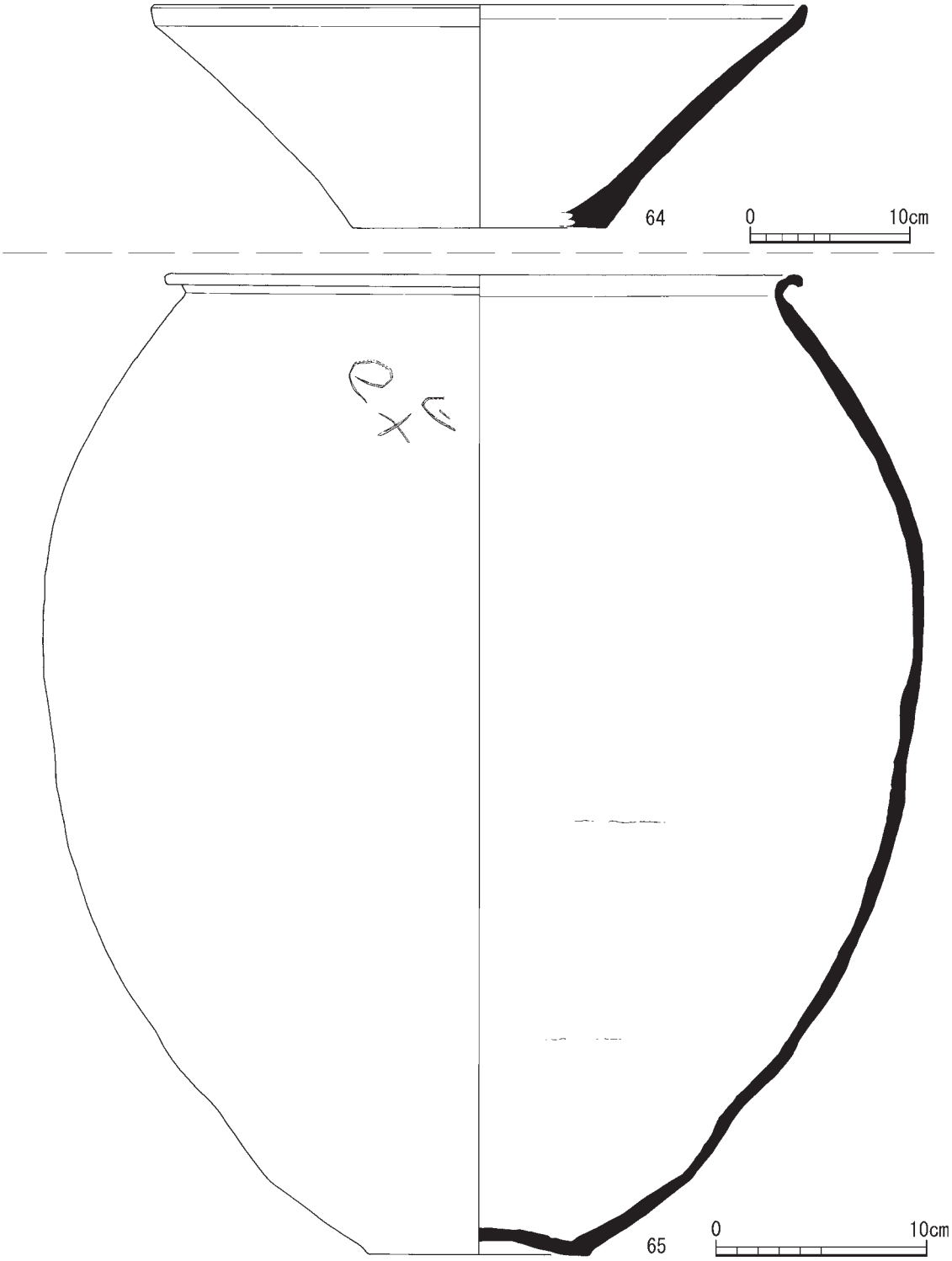
90は肥前磁器（伊万里）染付椀で、内外面にいわゆる「コンニャク印判」で梶葉文を施す。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか手」である。18世紀頃の製品である。口径10.1cm、器高5.2cmを測る。土塁の表土から出土した。廃城後に持ち込まれたものであろう。

曲輪２　48は中国製白磁皿で、いわゆる「口禿げの白磁」である。13～14世紀前半頃の製品とみられる。復元底部径7.4cmを測る。49は中国製白磁皿で、白磁皿Ｃ群である。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。復元口径11.8cm、器高３cm、復元高台径6.3cmを測る。

50～53は中国製青花磁器皿である。口縁端部が外反する器形で、青花磁器皿Ｂ群である。外面に唐草文を描き、見込みに花文を描く。15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。50は復元口径12.6cmを測る。54～60は中国製青花磁器椀である。青花磁器椀Ｃ群である。54・56は略した細かい唐草文を描く。55・57は口縁部に呉須で線引きし体部に線描きの花文を施す。55では内面口縁端部に四方襷文を描き、復元口径13.8cmを測る。58は唐草文を描く。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。

61は丹波産の擂鉢である。擂目は一本引である。16世紀頃の製品である。64は丹波産の鉢である。体部は外開きに立ち上がり、口縁端部を上方につまみあげて外面に面をもたせる。復元口径40.5cm、復元底部径15.8cm、器高14cmを測る。62・63は瓦質の擂鉢である。櫛引の擂目をもつ。63は口縁端部付近を横ナデしてやや窪ませており、復元口径29.8cmを測る。

第56図　出土遺物実測図１（土器・陶磁器）



第57図　出土遺物実測図２（陶器）

曲輪３　66は中国製青花磁器皿である。口縁部が外反する器形で、青花磁器皿Ｂ群である。15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。67・68は中国製青花磁器椀の一部である。

69は丹波産の甕の口縁部である。65と類似しており、同一個体の可能性もある。70は瓦質擂鉢である。口縁部付近を窪ませており、櫛引の擂目をもつ。

曲輪４　71は中国製青磁椀で、外面に線描きの蓮弁文を施す。16世紀前半頃の製品とみられる。

第58図　出土遺物実測図３（土器・陶磁器）

復元口径12.8cmを測る。72・73は中国製青花磁器椀の一部である。

74・75は瀬戸美濃産の天目椀である。75は復元口径11.8cmを測る。76は丹波産の鉢で、64と類似する。注口部がわずかに残る。

曲輪５　77は中国製白磁小椀で、口縁部が外反する。復元口径は7.4cmを測る。78は中国製青花磁器椀の一部である。79は丹波産の甕の肩部である。80 ～ 82は土師器皿で、内面がハケ目調

整される。在地系のものである。80は口径10.9cm、器高2.9cmを測る。81は口径11.7cm、器高2.5cmを測る。83は瓦質擂鉢である。櫛引の擂目をもつ。

曲輪６　84は中国製白磁皿で、白磁皿Ｃ群である。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。復元口径11.8cmを測る。85・86は中国製青花磁器椀である。86は線描きで施文する。87は中国製青花磁器皿である。口縁部が外反する器形で、青花磁器皿Ｂ群である。15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。

道Ｄ　88は丹波産の甕である。口縁部が受口状になる。16世紀頃の製品とみられる。復元口径37cmを測る。89は土師器皿で、口縁部と底部の境が明瞭でなく、丸く立ち上がる。在地系のものである。

Ｃ－４地区　91は肥前磁器染付椀である。高台が大きめで高く、体部は直線的に外開きする。いわゆる「広東椀」である。花唐草文を描く。18世紀末頃の製品とみられる。口径11.4cm、高台径５cm、器高６cmを測る。92～94は肥前磁器染付椀である。丸文、団花文、松文を描く。18世紀頃以降の製品とみられる。95は肥前磁器青磁染付椀蓋である。外面に青磁釉を施し、内面に染付を施す。18世紀後半以降の製品とみられる。

96は京焼陶器皿である。緑色釉で葉文を上絵付する。97は瀬戸産の陶器椀である。内面と外面口縁部には透明釉、外面体部以下には褐釉を施す。18世紀後半頃以降の製品とみられる。口径9.1cm、高台径4.4cm、器高5.4cmを測る。98は丹波産の甕もしくは鉢の口縁部とみられる。17世紀以降の製品とみられる。99は土師器皿で、口縁部と底部の境が明瞭でなく、丸く立ち上がる。在地系のものである。口径11.8cm、器高2.3cmを測る。

２）銅製品（第59図）　100は兜の鍬形台である。鍍金が残る。端部は２弧の「Ｖ」字状になり、猪ノ目を穿つ。兜本体に取り付けるための鋲穴がある。表面の周囲には枠を巡らし、菊花状の花文を線刻する。幅2.9cm、厚さ0.1cmを測る。曲輪１から出土した。101も鍬形台である。鋲穴が２か所残存する。表面の周囲には枠を巡らし、菊花状の花文を線刻する。地には魚々子を撒く。幅3.4cm、厚さ0.07cmを測る。曲輪１の土塁盛り土から出土した。102は鎧金具の鞐である。肩当と胴などの鎧の各部の連結に使用する。形状はレンズ状で、やや反りをもつ。紐通しの穴が２か所ある。長さ3.1cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。曲輪１から出土した。103は八双金物である。鎧の胴上端部などの装飾金具である。両端部は「Ｖ」字状になり、猪ノ目を穿つ。鍍金が残る。残存長5.3cm、幅1.9cm、厚さ0.13cmを測る。曲輪１出土である。

104は刀装具の笄である。刀の佩表に着装する。柄部に浮き彫りがあるが、形状は不明である。長さ19.1cm、最大幅0.7cm、厚さ0.3cmを測る。曲輪４から出土した。105は刀装具の小柄の柄部である。無文の簡素なものである。長さ9.2cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。曲輪１から出土した。106・107も小柄の柄部の残片である。曲輪１出土である。

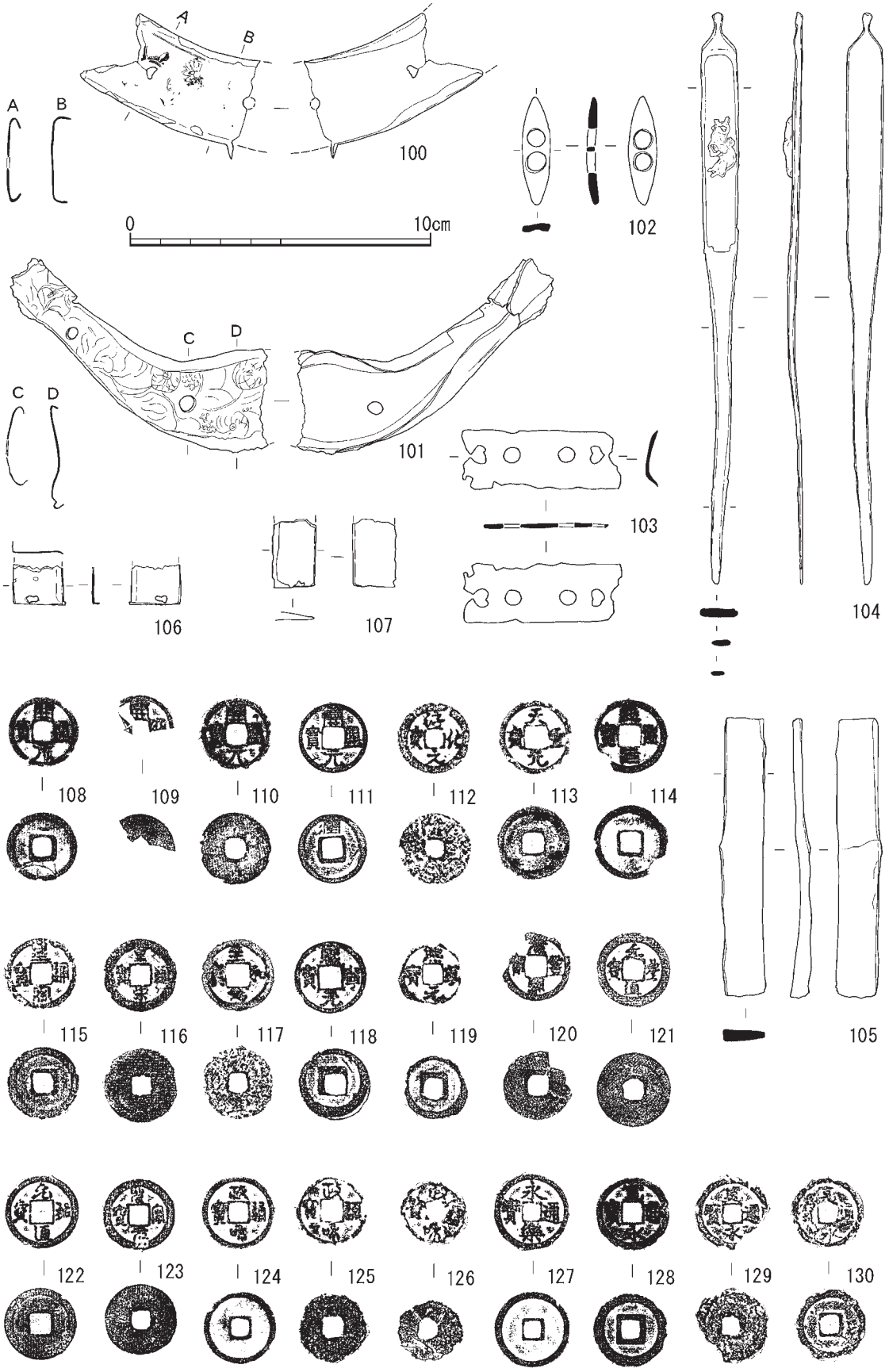
108～130は銭貨である。108～110は唐銭の開元通寶で、621年初鋳である。曲輪１から出土した。111も開元通寶であるが、これは紀地銭で、裏面に「潤」の字が鋳出されている。江蘇省鎮江で鋳造されたことを示しており、845年初鋳である。道Ｆから出土した。

112 ～ 126は北宋銭である。112は淳化元寶で、990年初鋳である。曲輪６から出土した。113・114は天聖元寶で、1023年初鋳である。113・114は曲輪１から出土した。115・116は皇宋通寶で、1038年初鋳である。曲輪１から出土した。117は至和元寶で、1054年初鋳である。曲輪６から出土した。118・119は熙寧元寶で、1068年初鋳である。118は曲輪１から、119は曲輪２から出土した。120・121は元豊通寶で、1078年初鋳である。曲輪２から出土した。122は元祐通寶で、1086年初鋳である。曲輪１から出土した。123は聖宋元寶で､1101年初鋳である。曲輪１から出土した。124 ～ 126は政和通寶で、1111年初鋳である。124は曲輪２から、125･126は曲輪６から出土した。127は明銭の永楽通寶で、1408年初鋳である。曲輪２から出土した。128 ～ 130は日本製の寛永通寶である。128・129はいわゆる「古寛永」で、寛永13(1636)年～万治２(1659)年に鋳造された。128は曲輪１から、129はＣ－４地区から出土した。130はいわゆる「新寛永」で、元禄10(1697)年以降に鋳造された。Ｃ－４地区から出土した。

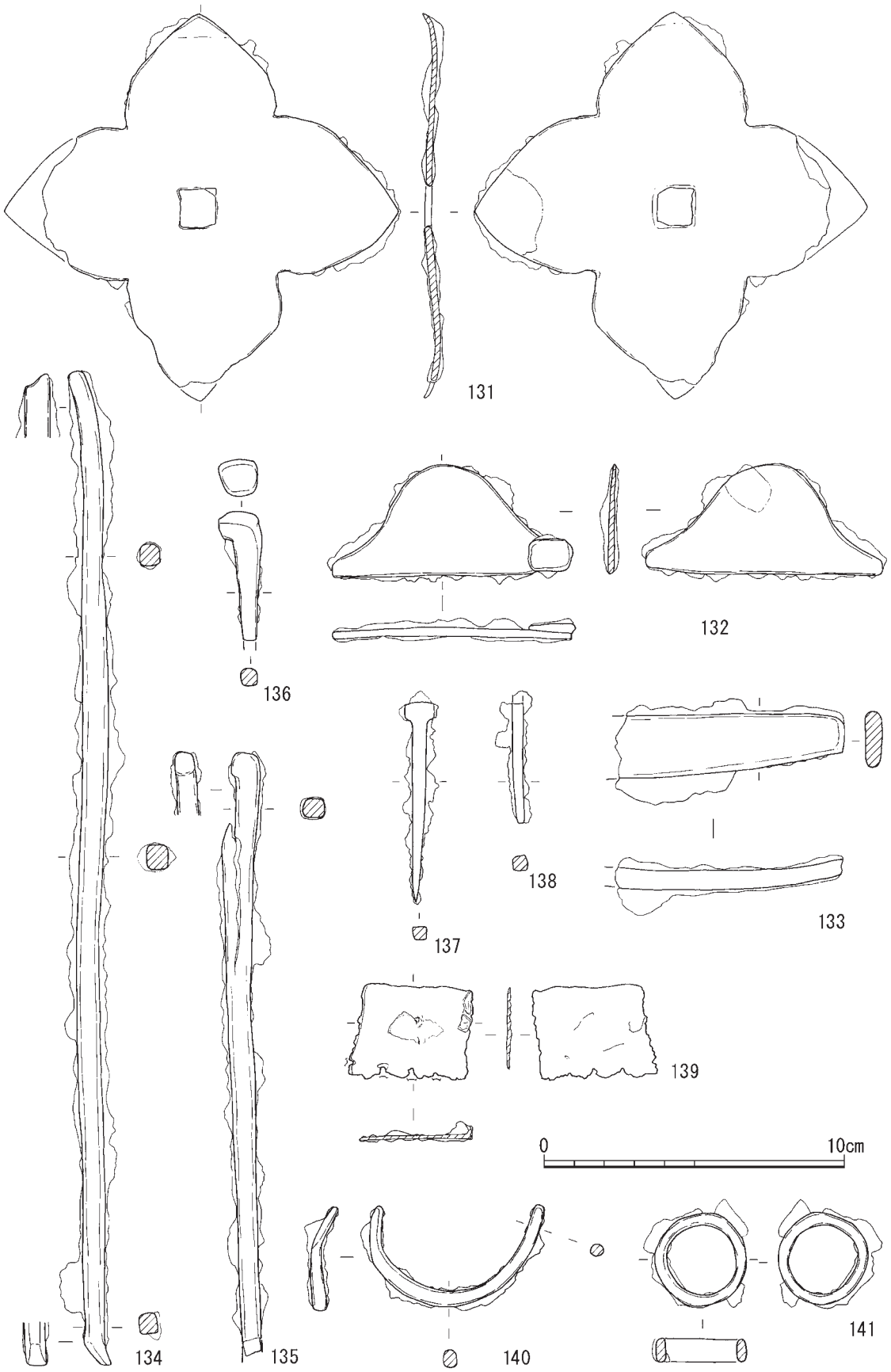
３)鉄製品(第60図)　131は十字形の花形金具である。扉の釘隠などの飾金具とみられる。中央に四角形の釘穴がある。残存している限りで12.2×11.7cm、厚さ0.25cmを測る。曲輪１から出土した。132は山形の平面形の金具である。用途不明である。建築の装飾金具ともみられる。幅7.8cm、高さ3.6cm、厚さ0.25cmを測る。曲輪４出土である。133は長台形状を呈し、やや反り気味であるが、刀の茎とも考えられる。残存長7.6cm、幅２cm、厚さ0.6cmを測る。曲輪４から出土した。134は棒状の金具で、両端がやや反り気味になる。長さ33.2cm、断面0.7cm角である。用途は不明である。曲輪３から出土した。135は棒状の金具で､端部がわずかに「Ｌ」字状になる。残存長15.1cmを測る。用途不明である。曲輪１から出土した。136も135と同様の形態である。残存長4.2cmを測る。137・138は角釘である。137は長さ6.7cmを測る。曲輪１から出土した。139は板状の金具で、端を折り返す。厚さ0.1cmを測る。曲輪１から出土した。140は半環状の金具である。曲輪１から出土した。141は環状の金具で、外径3.1cmを測る。締め金具か。曲輪１から出土した。

４)石製品(第61図)　142は小形の硯である。両面を使用したものとみられる。残存長8.9cm、幅4.9cm、縁の厚さ0.9cmを測る。曲輪２から出土した。143 ～ 148は砥石である。角柱状のものや平板状のもの、大きさも大小様々である。148は残存長20.7cm、幅8.8cm、厚さ6.6cmを測る。146は残存長3.4cm、幅2.6cm、厚さ2.6cmを測る。143・144は曲輪１、147・148は曲輪３、145は曲輪４出土である。

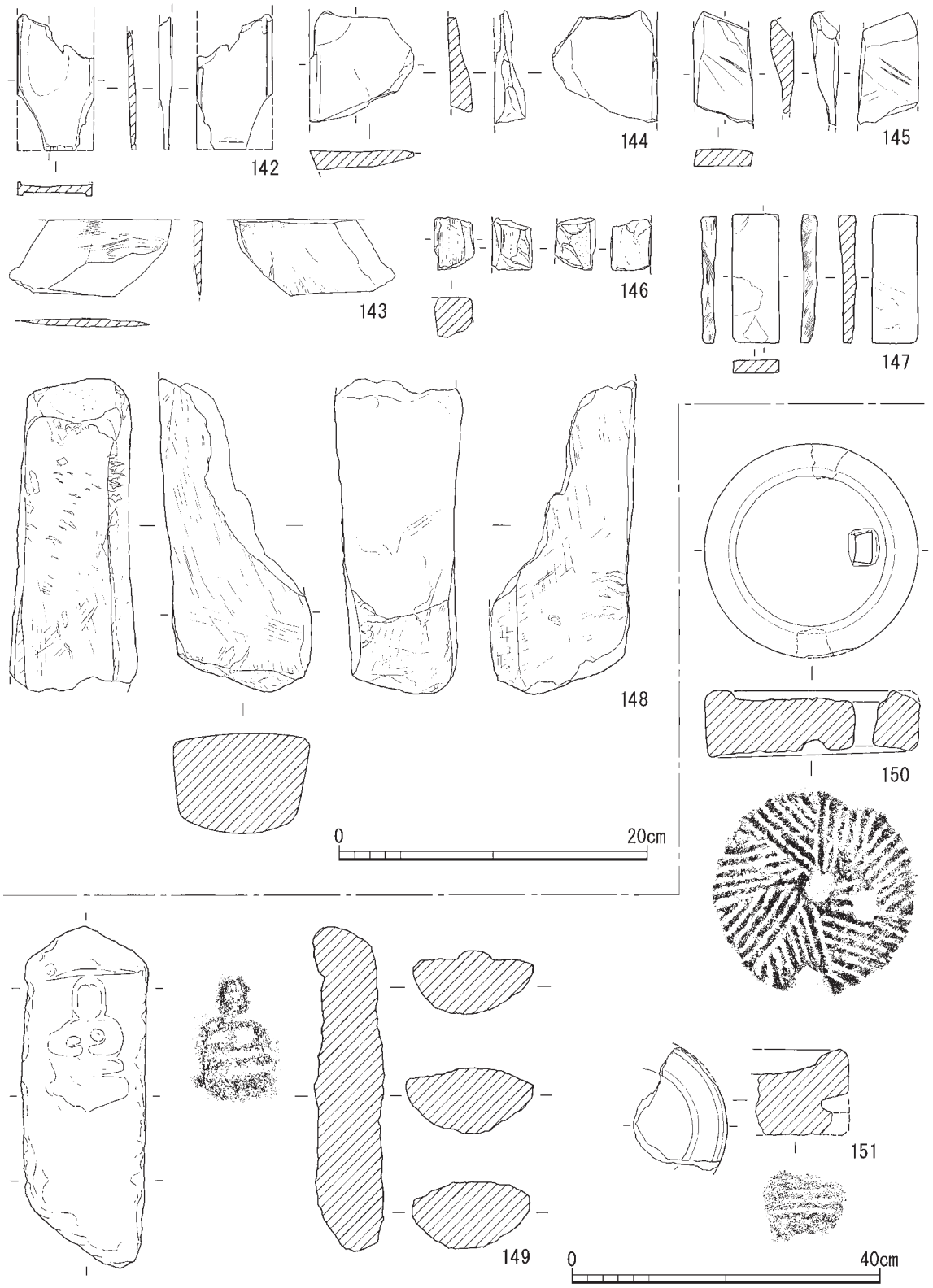
149は石仏である。尖頭板碑形で、上部に庇をつくり、その下に阿弥陀如来を浮き彫りする。花崗岩製で、背面は蒲鉾状の荒タタキ仕上げである。長さ44cm、幅16cm、厚さ8.8cmを測る。曲輪６から出土した。150･151は石臼である。凝灰岩製である。150は径28cm､厚さ8.8cmを測る。下面に綾杉状の擂目をもつ。Ｃ－４地区出土である。　(引原茂治)



第59図　出土遺物実測図４（銅製品）



第60図　出土遺物実測図５（鉄製品）



第61図　出土遺物実測図６（石製品）

６，まとめ

城の構造（第62図）　今回の調査では、城の構築構造を解明することを目的に、各所で断ち割りを行い断面観察をおこなった。まず、曲輪１の土塁と竪土塁で厚さ約10cmの旧表土を確認することができた。この旧表土は土塁を造る盛り土にはさまれていることから、城構築後の機能時に旧表土が形成され、城の整備時に旧表土上にさらに盛り土されたことが分かる。またＳＶ13の裏込土がこの旧表土を覆っており、ＳＶ13－ＳＶ16間の断ち割りでも旧表土を確認することができたので、ＳＶ13・16をともなう虎口１の整備は、土塁の再整備時とほぼ同時であると考えることができる。ここで確認した旧表土を、旧表土Ａとしておこう。

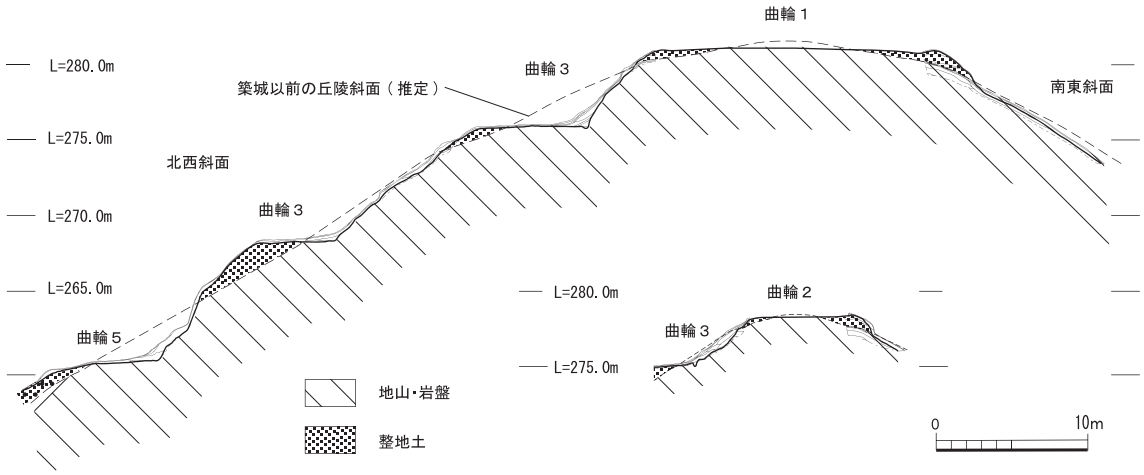
断ち割りでの断面観察は各曲輪の縁辺部においてもおこなった。深さ１～1.5mの断ち割りを入れた結果、岩盤･地山と、その上に積まれた整地土を確認することができた。曲輪１・２の中央や曲輪３～６の山寄りは地山を削って平坦面をつくり、縁辺部の谷側には整地土を入れることにより平坦面の拡張をおこなっている。曲輪１・２・６の谷側1/4～1/3程度、階段状の構成をとる曲輪３～５では谷側1/3～1/2が整地土による平坦面とみられる。曲輪１・２において、北西斜面と南東斜面に積まれた整地土の厚さを比較してみると、北西部では厚さが50cm程度であるのに対し、南東部では厚さ80～90cmであり、いずれも南東側の方が厚い。これは本来の地形の問題と、南東側の防御をはかるＳＶ14やＳＶ15を構築したことが原因と考えられる。

城の構築手順は、まず山地の尾根に対して頂部のカットと、その排土を利用しての平坦面の拡大をおこなって曲輪１をつくり、順次、下にむけて曲輪斜面の岩盤を削っての切岸の形成、および排土を利用しての平坦面の拡大・確保を行っていったと考えられる。

さて、縁辺部での断ち割り断面の多くでは、岩盤･地山と整地土の間に厚さ10cm程度の旧表土とみられる黒色土層が確認できた。これを旧表土Ｂとしておく。旧表土Ａが城の機能時に形成されたものとみられるのに対して、旧表土Ｂは整地土と岩盤に挟まれているので、三ノ宮東城築城以前の旧表土であるという可能性もある。旧表土Ｂの特徴として、斜面部に対しての末端を整地土とそろえているという点がある。つまり平坦面を含め、斜面部には堆積していない。

仮に旧表土Ｂが城の機能時のもので、整地土が再整備時のものとすると、斜面のカットをやり直したということになる。また整地土の量が膨大であることを考えると、建物を全て壊して更地にしてしまうような曲輪平坦面のカットが必要である。これらは、まったく成り立たないわけではないが可能性としては低い。よって、旧表土Ｂは城構築以前の、もとの尾根にともなうものと考えられる。この考えに立つと、旧表土Ｂの観察から、もとの尾根の復元が可能となり、およそ傾斜度30°程度の斜面をもった尾根であったとみられる。この傾斜を曲輪１の上で結び、頂部のなだらかさも考慮すると元の尾根のピークは281m程度と復元できる。この高さは土塁よりも２m程度低い。　（加藤雅士）

検出遺構　城の中心となる曲輪１では、礎石建物跡ＳＢ１～３や石積土坑、塀跡とみられる石積などを検出した。礎石建物跡ＳＢ１は、４間×４間の建物で、柱の間隔は約２ｍを測り、全体として一辺約８ｍの正方形の建物になる。この城の中心的な建物とみられる。建物の北東辺中央



第62図　三ノ宮東城跡断面構造図

部には弧状の石列があり、カマドの基礎とも考えられる。南東辺の外側にも１間分の直線的な石列があり、目隠し塀のような施設があったことも想定される。礎石建物ＳＢ２は、２間×３間の建物で、曲輪南端にあり、隅櫓的な建物と考えられる。建物の西側基礎部分に貼石状の石積がある。また、この建物の西が曲輪１への虎口となるが、その部分にも礎石とみられる石があり、あるいは門があった可能性も考えられる。礎石建物跡ＳＢ３は、礎石の残存状態が悪く、規模や形状は不明である。曲輪北東側では、堀切側にのびる道を検出した。斜面側を石積で護岸し、途中に石段を設ける。堀切を通じて谷部から水を汲み上げるための道、あるいは、非常時の脱出用道とみられる。その南側に隣接して竪堀が１条ある。この道から礎石建物跡ＳＢ２までの曲輪１南東辺に、断続的に延びる石列を検出した。塀などの基礎部分と考えられる。石積土坑は、地山の岩盤を掘り込み、その縁辺に石積を設ける。貯蔵穴とみられる。周辺に礎石状の石が散在しており、覆屋があったことも想定できる。

曲輪２では、２間×４間の礎石建物跡ＳＢ５や石積土坑などを検出した。石積土坑は、曲輪１のものと同様である。また、この曲輪は周囲の斜面部に６条の竪堀が設けられている。竪堀の中には、底部が非常に狭くなった断面「Ｖ」字形を呈するものもある。なお、この曲輪では、曲輪１と同様に、南東辺に石列があり、塀などの基礎と考えられる。あまり広い曲輪ではないが、曲輪１同様に、城内でも重要な地点であったと考えられる。

曲輪３～５は山腹に造られた細長い曲輪である。曲輪の斜面裾部は地山の岩盤を削り出した急傾斜の切岸となる。各曲輪に礎石状の石が残っており、礎石を伴う構築物があった可能性も考えられる。また各曲輪の斜面裾には、岩盤を掘り込んだ排水溝がある。曲輪３では、南端の道際に石積を築いて護岸している。曲輪４では、北端部を低い段状に成形している。曲輪５では、南側の斜面裾に、岩盤を掘り込んだ柱穴がある。対になる柱穴は検出できていないが、掘立柱建物があったとも考えられる。また、この曲輪には調査前に土塁状の盛り上がりが見られたが、調査の結果、曲輪４の縁辺中央部が崩落して堆積したものであることを確認した。崩落土の除去後に梯子形の浅い溝状遺構を検出したが、その性格は不明である。根太の痕跡とも考えられる。また、

この曲輪の北端部が、麓から城内への入り口になると考えられる。麓までの道については、調査地外となるため、不明である。曲輪３及び曲輪４の北側部分では、下部の曲輪の北端部に張り出すような小曲輪を設けている。下部の曲輪に侵入した敵に横矢を掛けるための施設とも考えられる。

曲輪６は、曲輪２から続く竪堀を設けた斜面の裾部が、地山の岩盤を削り出した急傾斜の切岸となる。礎石列が残っており、礎石建物があった可能性がある。また、この曲輪は、西半部が後世の地滑り等によって陥没している。

各曲輪はジグザグ状の道でつながっている様子である。この道では斜面裾に地山の岩盤を掘り込んだ排水溝を持つ部分がある。曲輪３から曲輪４に到る道の屈曲部では、斜面裾に石積の一部が残存する。また、曲輪４から曲輪６方向への道には柵列状のピットが並ぶ。

以上のように、この城跡では、塀を設け、斜面部に竪堀を掘り、地山の岩盤を削り込んで急斜面の切岸を造り出すなど、様々に防御のための工夫がされていることを確認した。また、建物基礎や道の要所に石積を築き、岩盤を削り出して各曲輪を整形するなど、丁寧な城造りの様子がうかがえる。それとともに、城内に礎石建物があったことを確認した。簡素な掘立柱建物がわずかにあるのみで、非常時だけに使用されたとみられる一般的な戦国時代の山城と較べると、恒久的な造作である。このような状況から、この城は、非常時だけに使用されたのではなく、ある程度日常的な生活が行われていた可能性も考えられる。平地からの比高も50m前後であり、あまり高いとはいえない。

出土遺物（付表１・第63図）　三ノ宮東城跡は、陶磁器や土器が多数出土している。出土点数の多い中国製青花磁器では青花磁器椀Ｃ群や青花磁器皿Ｂ群、白磁皿Ｃ群が目立つ。これらの中国製磁器は、15世紀後半から16世紀前半頃にかけて生産され輸入されたものとみられる。また、土師器皿から見ると、16世紀中葉頃のものがあり、その頃までは城として存続していたものと考えられる。以上のことから、この城跡は、16世紀前半を中心とする時期の城跡とみられる。

曲輪１では、出土点数が多い中国製青花磁器椀から見ると、斜面部からの出土も含めて50％が出土している。それに次ぐのが曲輪２・６である。尾根線上に位置する曲輪である。曲輪３・４・５では、出土数はわずかである。丘陵腹部に位置する曲輪である。曲輪１では、椀皿などの供膳具だけでなく、擂鉢などの調理具や甕などの貯蔵具など、ほぼ万遍なく出土している。土師器皿の出土量も総数の80％以上を占める。また、甲冑金具や建物の飾金具と考えられる金属製品も出土している。出土遺物からみても、曲輪１が城中の主要地点であり、かなり日常的な色彩の濃い場所であることがわかる。また、茶道具の水指の可能性がある信楽産の鉢の出土も、非常時のみに機能した曲輪ではないことを示唆する。曲輪２・６も、出土遺物数では曲輪１にかなり劣るものの、中国製青花磁器や白磁の出土傾向などから、曲輪１と同様の性格が想定される。また、曲輪１・２・６からは、銭貨の出土も目立つ。曲輪２は、曲輪１に隣接しており、周囲を６条の竪堀で防御される重要な曲輪と考えられる。曲輪１の一部ともいえる。曲輪６は低い位置にあり、非常時や緊急時にいち早く対応できる曲輪である。少人数であっても、常駐する必要がある曲輪

付表１　出土陶磁器一覧表

	青花		白磁		青磁椀	土師器皿	瓦質擂鉢	瓦質小壺	瀬戸美濃		丹波甕	丹波擂鉢	丹波鉢	信楽鉢	計
	椀	皿	椀	皿					天目椀	灰釉皿					
曲輪１	12		6	1	1	47	1				10	2	2	1	83
（斜面）	27	3	7	1				1	1		9	4			53
曲輪２	9	3	2	2		1	3					1			21
（斜面）	1	1					2				1				5
曲輪３	2	1	1			1	1				1				7
（斜面）	2										1				3
曲輪４	2				2				2		8				14
（斜面）	1				1	2	1				1				6
曲輪５	4		1		1	5	1			1	2	1			16
（斜面）															
曲輪６	12	1	2		2				1		1				19
（斜面）	3														3
道	3					1					1				5
計	78	9	19	4	7	57	9	1	4	1	35	8	2	1	235

ともいえる。

一方、曲輪３・４・５では、中国製青花磁器や白磁の出土数は、曲輪２・６の半数以下である。曲輪６よりも日常色は薄い傾向にある。段状に設けられた細長い曲輪の形態や横矢掛とも考えられる小曲輪が見られることからも、非常時に使用することを主目的とした曲輪と考えられる。日常は、無人状態とは言わないまでも、道等として機能した曲輪とも考えられる。

このほか、注目される遺物としては、曲輪６から石仏が１体出土している。中世後期頃のものとみられる。尖頭板碑形で阿弥陀如来を浮き彫りする。戦国時代以降の城では石仏や石塔を石材として使用することがあるが、この石仏が石材として持ち込まれたものかどうかは不明である。

概観　三ノ宮東城跡はあまり規模の大きい城跡とはいえないが、ほぼ全域にわたって、戦国時代の城の状況を知ることができた。これが、今回の調査の大きな成果といえる。

この城跡に隣接して三ノ宮西城跡がある。三ノ宮西城跡は、調査が行われておらず詳しいことは不明であるが、同時期の城と仮定すると、その近さから敵対する城とは考えられない。三ノ宮東城からは南側の谷筋を眺望できないが、三ノ宮西城からはできる。このように考えると、この２つの城は一組で機能していた可能性も考えられる。また、時期差があれば、移転したとも考えられる。その場合、三ノ宮東城から、山内氏の城という伝承が残り館跡と考えられる部分が付属する三ノ宮西城へ移転した可能性が高いと思われる。これにより、三ノ宮西城跡は長く地元の人々の記憶に残り、三ノ宮東城跡は忘れ去られたともいえよう。

京丹波町の瑞穂地域には今も山内姓を名乗る人が多く、土佐山内氏との係りは別として、三ノ宮西城跡が伝承のように山内氏関係の城跡である可能性は充分考えられる。隣接する三ノ宮東城跡も、並存でも移転であっても、山内氏関連の城跡と考えることもできる。　（引原茂治）

第63図　出土遺物分布図

付表２　三ノ宮東城関連年表

西暦		おもな出来事	記事
813年	弘仁４年		酒治志(しゅじし)神社　正月21日付の宣旨(角川辞典)
平安末期			「抑知足院御領直米内山内荘廿石」京都大学所蔵兵範記仁平２年２月巻裏文書
1213年	建暦３年		常寿院領の一所として見える　慈鎮所領譲状案２月日付
1234年	天福２年		「丹波国　山内庄　所当三十石　在雑事」『華頂要略』(角川辞典)
1253年	建長５年		「丹波国山内庄〈信輔　京極殿領内〉」『近衛家所領目録』10月21日付(角川辞典・HP)
1333年	元弘３年	足利尊氏挙兵	山内氏馳せ参じる『太平記』(振興会)
1353年	文和２年		山名氏が「丹波山内辺」にいた『中園太相国暦記』(振興会)
1467年	応仁１年	応仁の乱～1477年	
1477年	文明９年		塩田村に山内荘の荘号がみえる『親元日記別録』。飯河中務丞忠資の知行。須知源三の押領を訴える(角川地名辞典)
1482年	文明14年		丹波守護細川政元が押領。「御料所船井郡山内庄上三ヶ村主御百姓等」が言上状を出す『蜷川家古文書』10巻(振興会)
1568年	永禄11年	信長上洛	
1578年	天正６年	光秀の丹波攻略	
1579年	天正７年	光秀の丹波攻略	
1582年	天正10年	本能寺の変	丹波船井郡の知行について光秀から指示をうける。「須知九大夫、山内一族中」宛の三宅弥平次（明智光春）書状『思文閣墨跡資料目録』60巻(振興会)
1583年	天正11年		豊臣秀吉が「丹州船井郡山内庄内弐百五拾石」を上部大夫にあてがう『可睡斎文章』(振興会)
1600年	慶長５年	関ヶ原の戦	
16世紀後半			「山内衆」宛の明智光秀書状で大堰川の舟運に関わる指示『反町弘荘主宰古書逸品展示即売会目録』1976(振興会)
17世紀末			貝原益軒『西北紀行』(紀行は17世紀末。出版は益軒の死後の1713年)「山内村あり、是土佐守山内氏祖先の住めりし所なりと云う」(振興会)

※表は下記文献を基に作成した

三之宮城跡専門委員会編『三之宮城跡 - 三之宮城跡整備事業完成記念冊子 -』三ノ宮地域振興会　2007

竹内理三編『角川日本地名大辞典　26　京都府　下巻』角川書店　1983

注１　伊野近富「２．塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1990

注２　田辺昭三『陶邑古窯址群』１　平安学園考古学クラブ　1966

注３　片山博道「二　園部窯跡群」(『園部町史通史編　図説　園部の歴史』園部町・園部町教育委員会)　2005

注４　古墳をはさんだ上下の尾根の地山面と、古墳のベース(地山)面とに段差はない。古墳築造以前、この地点は滑らかなラインで北西方向に下降していく幅広の尾根緩斜面であることがわかる(第３図)。

注５　潮崎誠・高島信之「第８章　西山６号墳の調査」(『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書１』兵庫県三田市教育委員会)　1983

注６　亀割均「Ⅲ　遺構と遺物　3.古墳時代の遺構・遺物」、「Ⅴ　調査のまとめ　3.一時坂古墳出土土器について」(『一時坂　―長野県諏訪市一時坂遺跡第一次発掘調査報告書―』諏訪市教育委員会)　1988

参考文献

園部町･園部町教育委員会『園部町史通史編　図説　園部の歴史』2005

京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第３版　第２分冊　2002

清水芳裕「第５章　京都府美月遺跡の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター)　1983